

# **Cambodia Journal**

第3号

2010年2月

## カンボジアジャーナル第3号

### [目次]

- カンボジアに音楽があふれる日まで 浦田彩 2  
『息子よ、生き延びよ』（ピン・ヤータイ著）翻訳を終えて 宮崎一郎 5  
カンボジアの結婚式 船越ちひろ 8  
自転車オヤジ、カンボジアに行く 平戸平人 11  
カンボジアの日本語フリーペーパー事情 西村清志郎 18  
日本カンボジア研究会のこと 小林知 21  
思い出のカンボジア～1959年から1962年ごろまでの良き時代を振り返って～ 川瀬生郎 22  
遠藤俊介さんの思い出 高瀬友香 30  
天女の舞を目指して～カンボジア舞踊を日本で習う～ 松室三重 32  
資料編 チョム・クサン周辺の遺跡 高橋勲 34



タケオ州のとある寺院。今は使われていない古いヴィハラの壁面には植民地時代を描いた壁画があった。

カンボジアに音楽があふれる日まで

浦田 彩

「カンボジアの子供たちに曲をプレゼントしませんか」

偶然見つけたウェブサイトにかかれていたこの一言に「これだ!」と思い、飛びついた。今思えば、それがすべての始まりだった。

その時23歳だった私はカナダにいた。留学と言えば聞こえはいいだろうが、日本で居場所を失くし、一体これから先どうやって生きていけばいいのだろうかかと悩んだ末に日本を飛び出したのだった。英語もろくに話せなかった私が、そう簡単に海外での生活に馴染めるはずもなく、将来に対する不安がさらにつのるばかりだった。私の居場所はどこにあるのだろうか? そればかり考えていた。

そもそも、どうして私が日本を飛び出したのか。それは、大好きな音楽、生き甲斐だった音楽としばらく離れてみようと思ったから。音楽のない生活に身をおいて、自分がどう変わるのか、それとも変わることができないのか、それを見極めたかったから。

音楽との出会いは4歳。YAMAHA音楽教室でピアノを習い始めた私は、とてつもなく怖い先生と出会った。練習をしていかなければ手が赤くなるほど叩かれ、楽譜を暗記していなければ、その楽譜を投げつけられた。気の強い私はそんな怖い先生に対しても臆することなく、レッスン中に先生の間違ひを見つけては平気でそれを指摘するような子供だった。隣で見ていた母親はドキドキしながらレッスンを見守っていた



2009年、IKTT 蚕まつりにて。

らしい。この先生にはその後20年以上もお世話になった。小学校でも中学校でも、教室ではおとなしくて目立たなかった私が、週1回の音楽教室では人が変

わったように生き生きとしていた。幼い頃から私にとって音楽が自己表現の手段だったのだ。

中学・高校では吹奏楽部に所属しトロンボーンを吹くようになった。それをきっかけにピアノ以外の楽器にも興味を持ちエレクトーンを習い始めた。その時の恩師にジャズやラテンをすすめられ、私はますます音楽にのめりこんでいった。音楽のない生活は考えられなかった。

高校卒業後、音楽を本格的に学ぼうとYAMAHA音楽院大阪エレクトーン科に入学した。私よりも才能がある子がたくさんいるだろうし、その中に埋もれてしまわないようにせめて外見だけでも目立とうと思った私は、アフロヘアで入学式に出席した。その結果、先生や先輩に真っ先に名前を覚えられた。今ではすっかり笑い話だ。在学中に同期のボーカルの女の子とユニットを組み、生まれて初めてのライブ活動を始めた。オリジナル曲は先生たちの評判も良く、卒業試験は優秀な成績、卒業公演では総代としてソロ演奏者に選ばれた。卒業が間近に迫った頃、音楽事務所にスカウトされ、まさに順風満帆。大好きな音楽で生きていける。それが何より嬉しかった。

音楽事務所に所属し、曲作り、ストリートライブ、ラジオ出演をこなす日々が続いた。なんとかレコード会社との契約にもこぎつけ、東京に移り住み、2003年に念願のメジャーデビュー。曲作り、レコーディング、営業、戦略会議とめまぐるしく過ぎて行く毎日をなんとかこなしていくのに必死だった。デビューを果たせたことで緊張の糸が切れてしまったのか、歌は歌えず、曲は作れず、若かった私はスタッフとのコミュニケーションもうまくとれず溝は深まるばかり。結局、半年後には音楽事務所からもレコード会社からも契約を打ち切られてしまった。

今まで当たり前のようにそばにあった音楽がブツンと途切れた。音楽しか知らない私が、普通のOLとして働いたり、結婚して子育てをしたり、そんな当たり前のことが出来るだろうかと急に不安に襲われた。

居場所をなくした私は、思い切ってピアノを弾かない環境に自分をおいてみようかと決心し日本を飛び出したのが2005年。行き先はカナダ。出発は23歳の誕生日。半年間、今までとは全く違う環境に自分をおいてみたら、その先に何が見えてくるだろうかと思っていた。

英語が話せず、ホームシックにもなり、大好きなピアノもそばにない。日本だろうが、カナダだろうが、結局、音楽がなければ、そこは私の居場所ではないのだということにあらためて気づかされた。

やはり私には音楽しかない。

そう思い始めた時、何気なく見ていたウェブサイト

にこの一言を見つけた。

「カンボジアの子供たちに曲をプレゼントしませんか」

私の中で何か動き始めた。この時はまだ、カンボジアがどこにあるのかさえ知らず、ましてや自分がその国で暮らすことになるなどとは思ってもしなかった。

「知らない国の子供たちに無責任に曲だけプレゼントするわけにはいかない。カンボジアに行かなきゃ」  
距離をおいたつもりの音楽が、一気に私の中に戻ってきた。

日本に一時帰国後、カンボジアに向かった。1ヶ月間、カンボジアの子供たちと触れ合おうと思いピアノを持参した。2005年10月のことだった。タイのバンコクから陸路で入国。タイ国内の道路は完全舗装されていて快適。ところが国境を越えてカンボジアに入った途端、想像をはるかに超える悪路。粗末なわらぶき屋根の家、物乞い、半裸のおじさん、片足の子供。「もう帰りたい」そう思った時、雨が降ってきた。子供たちがはしゃぎ、大人も同じように楽しそうに雨に降られている。心細くて泣きそうになっていた私の心の中に何か温かいものが生まれたような不思議な感覚だった。今では6、7時間のシェムリアップまでの道のりが、その時は17時間の気が遠くなるような長旅だった。

泊まったゲストハウスの近所に子供たちがいたので彼らの前で早速ピアノを吹いてみた。子供たちが楽しそうにはしゃぎ始めた。すると彼らの母親らしき女性がやって来てこう言った。

「音楽ではお金が稼げないので日本語を教えてください」

ショックだった。私はなんて浅はかで無知だったのだろう。この国の人たちはビートルズもベートーベンも知らないのだ。

「このまま帰るわけにはいかない」そう思った。

実は、日本に一時帰国した時にピアノ講師採用試験を受けていた。その結果が出るまでの1ヶ月を使って私はカンボジアを訪れていた。結果は不合格。それを知った瞬間、母に「カンボジアで暮らしたい」と打ち明けた。もしあの時、試験に合格していたら、今頃、私はカンボジアのことなどすっかり忘れて、どこかの音楽教室で日本の子供たちにピアノを教え、時には着飾って生徒たちの発表会を開き、休日には好きな曲を弾きながら平穏に暮らしていたかもしれない。でもその道は消えた。

その時から母を説得する日々が続いた。ようやくカナダから帰国したと思った娘がどうしてカンボジアに住みたがるのかと母はさぞかし戸惑ったことだろう。

無理もない。カンボジアと言えば、内戦、地雷といった暗いイメージがどうしてもつきまとうのだから。母と泣きながら話し合う日々が続いていたある日、母が急に万里の長城に行きたいと言いだした。母との初めての海外旅行。せめて旅行中は喧嘩しないでおこうと心に決めた。最終日、ホテルの部屋で二人でテレビを観ていたら、偶然、アンコールワットが映った。

「カンボジアに行ってもいい？」私の問いかけに母はうなずいてくれた。

3ヶ月後、私は再びカンボジアを訪れた。目的は仕事探し。カンボジアでは音楽活動だけで食べていけないことは明らかだった。どうしたらこの国で生きていけるだろうかと思っていた矢先、偶然出会った日本食屋の店長が「一緒にお店をやろう」と言ってくれた。まだカンボジアのことを何も知らず、それまで音楽のことしか頭になく、ましてや飲食店経営に関しては素人だった私をよく受け入れてくれたものだ。仕事は決まった。住むところはなんとかなるだろう。

そして2006年、母を連れて3度めのカンボジア。娘が暮らしたいと言っているカンボジアが一体どんな国なのか、母は自分の目で確かめたかったのだろう。



Miloメンバー。浦田あや(左)、狐塚芳明(上)、アッタイ(下)、鈴木理子(右)。

カンボジアの現実を見て、母が安心したとは決して思えない。むしろ不安でいっぱいになっただろう。でも母は手紙に「頑張れ！」と書いて一人で日本へ帰って行った。もう後にはひけなかった。

当然のことながら、カンボジアでの生活は決して甘くはなく、日本食屋での慣れない仕事に追われる日々が続いた。音楽活動のチャンスがどこかにないものかと狙っていたが、多くのカンボジア人たちはその日を食べていくのに精一杯で、小学校での教育さえまだまだ行き届いていないのが現実。「私と一緒に音楽をやってみませんか」などと聞いたところで笑い飛ばされるだろう。情操教育という発想すらまだこの国にはないのかもしれない。

そんなある日、お店の常連客でカンボジア在住10年以上の狐塚さんが「ジョンレノンの命日に彼の半生を描いた映画 *imagine* をみんなで観たい」と言い出したのがきっかけで、彼と音楽の話をするようになった。ギターを弾ける彼とピアノを弾ける私が出会い、バンドを結成し、2007年12月8日、ジョンレノンの命日にカンボジアで初めてのライブを開いた。Milo (ミロ) というバンド名でシェムリアップのバーやレストランで活動を始めた私は、人前で演奏できることの楽しさを久しぶりに満喫した。

それから1年が経とうとしていた頃、アンコール日本人会の喉自慢大会でバックバンドをしていた私は、あるカンボジア人の中学3年生の女の子の歌声に惹かれた。決して上手くはないのだけど声に芯がある。

「この子、おもしろい」それが今のmiloボーカリスト、アツタイとの出会いだった。あくまでも学業優先という約束で彼女のボイストレーニングをするようになった。正直言って私のトレーニングはかなり厳しい。中途半端な遊びに終わらせたくないと思うと、どうしてもきつい言葉が口から出てしまう。それでもアツタイはついて来る。落ち込むどころか必死に練習をする。それがなにより嬉しいし頼もしい。

カンボジアに暮らし始めて3年で私は日本食屋を退職し音楽活動に専念することにした。もちろん音楽で食べていけるほどカンボジアが急激に変化した訳ではない。ただ、ぼんやりとではあるけれど、自分のやりたいことが具体的な形となって見えてきたような気がするからだ。作った名刺にはこう書いた。「miloが目指すもの - カンボジア人ミュージシャンの育成、カンボジアでの音楽教育普及、カンボジア国内の音楽イベント企画、伝統音楽の復興」。決して外国人による音楽の押し付けになってはいけないという思いがある。

カンボジア伝統音楽の独得のリズム、歴史、世界観、それを掘り起こしカンボジア人自身の手で継承していくきっかけを作ることも目標のひとつ。まずは音楽を聴いてもらうこと。小学校、孤児院、病院、聴いてくれる人がいるのならどこへでも楽器を抱えて行き演奏する。子供たちは初めて目にする音符に戸惑い手拍子すら上手く出来ない。当然、歌声もバラバラ。それでいい。子供たちの笑顔が何よりの手ごたえ。もし、彼らが学校からの帰り道に友達と一緒に歌ってくれたなら嬉しい。家に帰って家族の前で歌ってくれたなら、なお嬉しい。なぜなら音楽は決して特別なものではなく、日々の暮らしに溶け込むべきものなのだから。

シェムリアップはもちろん、小さな村々にも音楽が自然と流れる日まで、私はこの国で暮らそうと思う。

(執筆協力：川中由美子)



**浦田彩 (うらた・あや)】**

2007年よりシェムリアップ在住者を中心に活動している音楽バンド「Milo (ミロ)」の代表。

カンボジア人なら誰もが知っている「アラピヤ」「サラヴァン」などオーディエンスをハッピーにする曲を中心にライブを繰り広げている。

また世界最長鍵盤ハーモニカをカンボジアへ持ち込み、東南アジア初の鍵盤ハーモニカアーティストとしても活動中。1982年大阪生まれ。

ウェブサイト：<http://ameblo.jp/milo-angkor/>

『息子よ、生き延びよ』（ピン・ヤータイ著）

翻訳を終えて

宮崎 一郎

先月（2009年11月）、連合出版から上梓した翻訳書について紹介したい。

この本は2000年にコーネル大学出版局からペーパーバックとして刊行されたPin Yathay著“Stay alive, my son”の全訳である。原著はすでに1987年に出版されており、本書はその改訂版にあたる。

著者ピン・ヤータイ氏は、プノン・ペン北方のウドン出身。モントリオール工科大学に留学、土木工学の学位を取得し1965年帰国。1975年4月にクメール・ルージュが権力を掌握するまでロン・ノル政権の公共事業省で土木技師として働いていた。本書に書かれた体験を経て単身タイにたどりついた後、ヨーロッパ、カナダ、米国に赴き祖国の窮状について訴えた。また、プロジェクト・エンジニアとしての仕事を再開し、アジア開発銀行勤務を経て、パリのフランス開発庁に勤務した。

ここで、この本を訳した私と本との出会いについて少し触れておきたい。私は現在新潟市内の高校で英語を教えている教員である。前任校でイギリス人の教師ゾーイ・コーさんと一緒に授業をすることになったが、慣れない異国での生活に困らないようにと私が身の回りの世話などをしてやったので、帰国の際にそのお礼にと1冊の本を置いていった。

一生のうちにどのくらい本が読めるのか分からないが、時として自分の生活に決定的な影響を与える出会いがあるものだ。この本がそんな1冊になろうとはその時点では分らなかった。読み始めるとすぐに1975年の4月のプノン・ペンの朝の情景に引き込まれていき、次第にこの本がただ読み流すような類の本でないことが分ってきた。翻訳に関しては未熟であり、全くゆとりのない勤務状態が続いていたうえ父親の入院などもあったが、休日を中心に正味1年半ほどで何とか訳し終えた。

私はこの本が出版されてから、これまでの人生で何らかの関わりのあった人たちにこの本を贈ったり紹介したりしたが、予想以上に多くの人たちが手紙やメールで感想を送ってくれた。その中に、ある70歳近い方が、戦後の大陸からの引き上げ体験や残留孤児の話と本の内容を重ねて、長い感想を書いてくださったので一部を引用させてもらおう。「戦争、革命、動乱の中で、様々な美名のもとに、どれほど多くの人々が殺されたか、また、生き残っても、いかに数奇な運命に翻弄されたか、筆舌に尽くしがたいことが無数にあったことは事実です。今、日本の世相を見ると、平和ボケして、すべての物事が皮相に見えます。」

私はカンボジアへ行ったこともないし、専門家でもない。この本を翻訳しようと思ったきっかけを一言で表現するのは難しいが、この本には極限状況を経験した者にしか語りえないもの、ナチのホロコーストを生き延びたフランクルの「夜と霧」に通じるものがあると思う。

この本はまずカンボジア民族の悲劇の実態を克明に描いている点で資料的価値がある。“Stay alive, my son”のForewordの中でDavid Chandlerも述べているように、クメール・ルージュ支配下のカンボジアを扱った本は他にもあるが、それらの多くは外国人の視点から描かれているか、著者がカンボジア人であったとしても、その多くは当時子供であった。生粋のカンボジア人であるピン・ヤータイ氏は海外の教育を受けた知識人であり、社会的地位もあり、一家を支える父親でもあった。彼の証言は極めて高い信憑性を持つといつてよい。

また、この本はピン・ヤータイという人間の、家族への愛、勇気、知恵や機転、驚異的な生命力によって読者を引きつける。著者はロン・ノル政権時代は公共事業省の土木技師であったため、クメール・ルージュの「解放」後はその前歴をひた隠しにする。しかし、ある日ついにそれが発覚してしまい、逃亡を余儀なくされる。この本のタイトル『息子よ、生き延びよ』は原題“Stay alive, my son”をそのまま訳したものである。この言葉は、病に倒れた著者の実父が死の間際に著者に語った最後の言葉であると同時に、ただ一人生き残った次男を置き去りにしなければならなかった著者が、息子と最後の別れをする際に語った言葉でもある。夥しい死の悲惨なドラマの中でこの場面には深い感動を覚えずにはいられない。他にも涙なしには訳せない場面が何カ所もあった。

ところで、フランスに留学し、急進的な共産主義を標榜して理想社会を建設する夢を描いたポル・ポトやカンボジアのエリートたちはなぜ、170万人とも200万人ともいわれる同胞を死に追いやってしまったのだろうか。美しい自然に抱かれた、敬虔な仏教徒の国に吹き荒れたこの狂気の本質は何なのだろうか。知識人やエリートの否定と農村への移住、強制労働は中国の文化大革命を彷彿とさせるが、クメール・ルージュ支配下のカンボジアは、国際社会から見放されたまま国全体が閉鎖的な収容所と化していった。冷戦時代の大国のパワーゲームに翻弄され、周辺諸国への猜疑心を募らせながら、憎悪の矛先は外国へ向かうのではなく同胞の大量虐殺へと向かっていったのはなぜか。また、これを放置していた日本を含む国際社会の責任は問われなくてもよいのだろうか。

日本では40年以上前のこの出来事についてこれまであまりに関心であったことは事実である。私の職場でもこうした問題には関心を寄せる人はまれである。「国際化」が叫ばれるわりには、相変わらず語学を磨くこと以外にあまり関心はなさそうだ。かつて私は生

徒を含む職場の有志で、文化祭に「戦後50年企画展」を行なった。戦時中の日本がアジア諸国、とりわけ中国大陸や朝鮮半島などに対して行なった加害の歴史を検証するのが目的で、各国と日本の教科書の戦時中や植民地時代に関する記述の違いを理解してもらうための展示などを行なった。こうした試みに対する反応も、当時は一部の人を除いては一般的に関心が薄かったように思う。そもそも教科書であまり触れられてこなかったので予備知識もなく、判断できなかったのかもしれない。また、こうした問題を話題にすることを避ける傾向もみられる。残念ながらクメール・ルーージュが支配した時代のことに関しては、さらに関心が薄いと言わざるを得ない。

私がこの本の存在をイギリス人教師から知らされなければ、さらにまた連合出版という出版社との出会いがなければこの本の出版はありえなかった。その意味でも紹介していただいた波田野氏、地名・人名に関してご教示いただいたラオ・キム・リャン氏にはこの場をお借りしてお礼申し上げたい。また、この出版不況といわれる中で、編集のみならず出版のために多大なご尽力をいただいた八尾氏の存在がなければこの本は日の目を見ることができなかった。心から感謝の意を表したいと思います。

最後に、この翻訳をしながら考えたいいくつかの事柄について、断片的になるが述べてみたい。

例えば森である。このピン・ヤータイ一族の悲劇の物語で森は大きな意味を持っている。第6章の「死にゆく人々の森」では、筆者の親族を含む多くの「新人民」、つまりかつて都会で暮らしていた人々はカンボジアで最も未開の地域であるカルダモン山脈の山麓に広がる森の中へ連れて行かれる。それ以前もクメール・ルーージュに反論したり、前歴が発覚したりした場合は村はずれの森に連れて行かれて「再教育」（処刑）されたようだが、カルダモンは村はずれではなく、「不健康な場所として名高く、鬱蒼とした樹木で覆われ、マラリアがはびこる山岳地帯」だった。クメール・ルーージュはなぜこんな場所へ連れて行ったのだろうか。

さらにこの場所から何度か他の村へと移動した後、前歴を暴露された筆者と妻アニーは、クメール・ルーージュが監視する村にとどまることは確実に死を意味すると判断し、息子のナワートをある女性に託して森の中に逃亡するという苦渋の決断をする。逃亡の時期として雨期を避けているとはいえ、森は獣に襲われたり、餓死したりする可能性もある危険な領域である。それでも著者は森がクメール・ルーージュの支配の及ばない世界であり、わずかでも生きる可能性がある場所だと考えた。

クメール・ルーージュはその暗愚な恐怖政治によって筆者の親族を含む多くのカンボジア人を文明生活から未開の状態へと転落させる。かつて送っていた豊かな生活、社会的地位、衣食住をはじめ、車や宝石類、貨

幣などありとあらゆる物を剥奪し、子供たちの命も奪ってしまうが、さらにこの森の中で不注意から発生した山火事で最愛の妻を失ってしまう。すべてを失った筆者は「魂の抜け殻のように」ひたすら西に向かって歩き続ける。国境にたどりついて生き延びても勝利、死んで家族と再会できればそれもまた勝利だという境地に至る。森での体験は「生き地獄」としてのクメール・ルーージュ支配下の村と筆者がタイで助けられ「復活」するまでの中間領域ともいべき不思議な空間である。途中で聞こえた悪魔のような不気味な声を発する謎の動物の正体は何だろう。食糧も尽き、亀や蝙蝠、蟹、蛇を食べ、蛭に悩まされながらも驚異的な生命力で飢えをしのいで生き抜く。

ところで、仏教との関連について少し触れておきたい。カンボジアの宗教指導者フーオット・タットは筆者の父の伯父にあたる。突然クメール・ルーージュが寺にやってきて誰かのバイクを奪っていく場面では、バイクが奪われたという事実よりも、寺という神聖な場所で国家安泰の象徴的存在であるこの長老に対して彼らが敬意を払わないことに筆者は驚き、不安になる。クメール・ルーージュに対する自分の楽観的な見方が誤りで、全く教育を受けていない父のほうが正しかったことに気がつき始めた。そして「それは何世紀にもわたって培われてきた道徳的価値がまさに崩壊寸前にあるとわたしたちが感じた最初の兆候だった」と述べている。筆者にとって仏教は心の拠り所であり、フーオット・タット長老から精神面で少なからぬ影響を受けたようだ。この長老は筆者たちと別れて間もなく処刑される。1976年1月に制定された憲法では宗教は禁止される。クメール・ルーージュは、革命は罪を犯した人間に対しては宗教よりも迅速に個人を「浄化」し、処刑できると考えていたと思われる。

「プットの予言」も興味深い。プットは19世紀の賢者で、「いずれこの国が伝統的価値の全面的転換を経験し、家々からも街路からも人がいなくなり、無知な人々が知識人を非難し、不信心者（タミル）が絶対的権力を持ち、僧侶たちを迫害すると予言した。しかし、人々がカポック（ジャワ綿）、つまりカンボジア語のコーの木を植えれば、彼らは救われるというのだ。コーには『口がきけない人』の意味もある。この謎めいたメッセージの解釈は、この災難に見舞われた時期に聾啞者だけが救われるというものだ。わたしは今分ったが、ここにこそ生き残るための手段が示されているのだ。聾啞者のふりをせよ、ということだ！何も言えず、何も聞こえず、何も分らないふりをするのだ！」

あまりに予言と現実が符合していることに驚かされる。実際筆者は父からも「クメール・ルーージュには決して反論してはならない。馬鹿のふりをせよ」と言い聞かされてきたし、タイ国境付近でクメール・ルーージュに捕まった際にも、魯鈍を装うことで窮地を脱する。

私にとっては、まだポル・ポト時代に関する多くの疑問が残ったままだが、今後も特別法廷の成り行きを注視しつつ、この問題を考えていきたい。『息子よ、生き延びよ』を読まれた感想などをお寄せいただければ幸いです。

【宮崎一郎 (みやざき・いちろう)】

1952年新潟県生まれ。茨城大学人文学部卒。現在、新潟市立万代高校教諭。E-mail:imiya@nifty.com

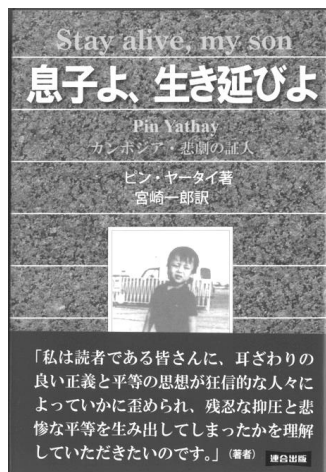
『息子よ、生き延びよ』

連合出版刊

本体価格 2,200 円

【目次】

- 第1章 革命
  - 第2章 強制退去
  - 第3章 解放区
  - 第4章 「浄化」の始まり
  - 第5章 ゴーストタウン
  - 第6章 死にゆく人々の森
  - 第7章 オンカーの懲罰
  - 第8章 ドンエイからの逃亡
  - 第9章 敵意の炎
  - 第10章 森の中へ
  - 第11章 孤独
  - 第12章 自由
- エピソード



「私は読者である皆さんに、耳ざわりの良い正義と平等の思想が狂信的な人々によっていかに歪められ、残忍な抑圧と悲惨な平等を生み出してしまったかを理解していただきたいのです。」(著者) 連合出版

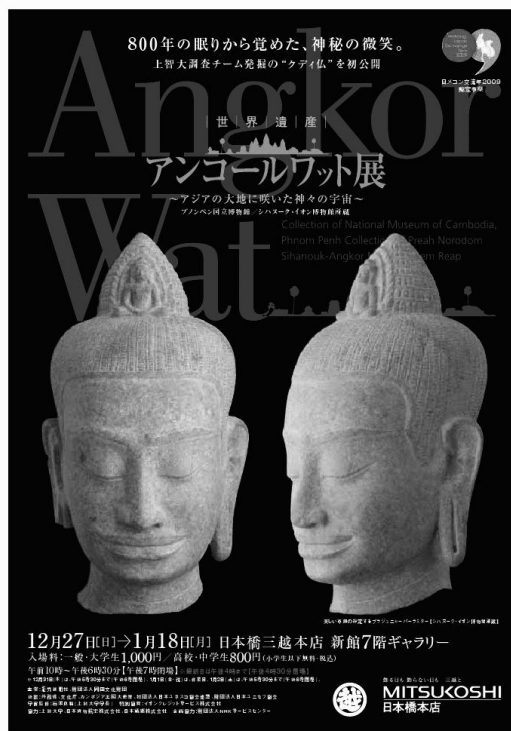
『カンボジアジャーナル』バックナンバーのご紹介

- カンボジアジャーナル創刊号(2009年8月15日)  
カンボジア・ジェムリアップの定点観察(三輪悟)／Cambodia after Paris Peace Agreement to present day and the future(H.E. Mr. Pou Sothirak)／カンボジア和平を振り返って(八尾正博)／遺跡の現地説明会から見えるカンボジア(丸井雅子)／ごまめの歯ざしり(沼口麗子)／構造的暴力とカンボジアにおける人身売買(島崎裕子)／農民の遺伝子が宿る人びとと制度化が進む社会(山崎勝)／私の中のカンボジア(山田里香)／カンボジアの変化 岡林明子／徒然思ひ(小野和彦)／アンコール遺跡の政治性、その二十年(笹川秀夫)／現代カンボジアに出会うまで、出会ってから(波田野直樹)
- カンボジアジャーナル第2号(2009年11月14日)  
古き良きカンボジア(岩噌弘三)／一枚の写真(波田野直樹)「東南アジア考古学特講」という名の大風呂敷～豊かさを求めて～(隅田登紀子)／カンボジアの妖怪アープ(井伊誠)／どのようにカンボジアと出会い、関わってきたかについての個人的な覚え書き(波田野直樹)／アンコール日本人会の設立経緯とその活動(三輪悟)

カンボジアジャーナルPDF版ダウンロードはこちらから  
<http://www.angkor-ruins.com/cambodiajournal/cambodiajournal1.htm>

世界遺産アンコールワット展のお知らせ

シハヌーク・イオン博物館、プノンペン国立博物館所蔵のアンコール王朝最盛期の美術工芸品を中心に67件を公開。出品作品の中には、2001年に上智大学アンコール遺跡国際調査団がバンテアイ・クデイ遺跡で発見した世界初出品作品11件のほか、三島由紀夫が戯曲の題材にしたといわれる「閻魔大王の像」など、日本初公開品も多数含まれています。パールに包まれたその歴史に触れ、アンコールワットに息づく神々の息吹を感じてください。(パラミタミュージアムの企画展示案内より転載)



- 【2010年～2011年の開催予定】
- 2月4日(木)～3月22日(月・祝)
- 山梨県立博物館 (山梨県笛吹市御坂町成田 1501-1)
- 3月26日(金)～4月13日(火)
- 大和香林坊店 (石川県金沢市香林坊1丁目1番1号)
- 4月20日(火)～5月30日(日)
- 岡山県立美術館 (岡山県岡山市北区天神町 8-48)
- 6月5日(土)～7月4日(日)
- 群馬県立近代美術館 (群馬県高崎市綿貫町 992-1 群馬の森公園内)
- 7月10日(土)～8月29日(日)
- 福岡市博物館 (福岡県福岡市中央区大濠公園 1-6)
- 10月19日(火)～12月5日(日)
- 熊本県立美術館 (熊本県熊本市二の丸 2)
- 12月11日(土)～2011年1月23日(日)
- 大分県立芸術会館 (大分県大分市牧緑町 1-61)

※都合により、スケジュールや展示作品は変更になる場合があります。

## カンボジアの結婚式

船越 ちひろ

2009年11月、初めてカンボジアの結婚式に参加した。花嫁となる彼女と私は初対面で、私の日本人の友人の紹介だった。もともと結婚式に行く予定はなく、私は観光のためにシェムリアップに行き、彼女の働くホテルに部屋をとっていた。シェムリアップに着いた翌朝彼女と会うと、「3日後に結婚式をするので参加してほしい」と突然言われた。友人からのメールでは式は来月と聞いていたのでとても驚いた。



旅行の日程は長くとってあったので参加するのは問題なかったが、私がすぐに思ったのは“着ていく服がない！”ということ。旅行で来ているのでカジュアルなものばかり。どんな服を着ていったらいいのかも分からないので、とりあえず翌日、結婚式でも大丈夫そうなワンピースを市場で買った。

1日目。彼女の兄弟が私の泊まるホテルに6時半に迎えにくると約束して、当日まで彼女とは会えなかった。当日、“今日は夕方まで時間あるし遅寝しよう”と思っていた私は、前日遅かったこともあり、ぐっすり寝ていた。ドアを叩く音で目が覚める。時計を見ると朝の6時45分。カンボジアの結婚式をまったく知らなかった私は夕方からの披露宴を想像していたのだけれど、結婚の儀式は朝早くから行われるものらしく、彼女は私をそれに招待してくれていたのだった。準備で忙しいであろう花嫁からも心配の電話がかかってくるし、大慌てでカメラをカバンに詰め、部屋を出た。服はジーンズで普段着、化粧もする時間がなくすっぴん。ホテルの玄関を出ると、迎えに来ていた花嫁の兄弟は時間がないため先に家に戻ってしまっていて、私はホテルで働く花嫁の同僚たちと一緒にバンに乗って会場に向かった。彼女たちは皆カンボジアの伝統衣装を着て、メイクもしっかりしていてすごくキレイ。ひどい格好の自分

は完全に浮いていてなんだか申し訳なくなった。とても隣には並べない。“これじゃあ私はゲストではなくカメラマンとして会場に居るしかないな”と思った。

花嫁の家の近くのちょっと広がったところに、花婿と参列者が集まっていて、布で飾られた椅子に座っていた。それぞれ銀の器にフルーツや豚の頭など食べ物をのせて、音を奏でながら花嫁の家に向かう。専属のカメラマンが2人もいて、一眼レフとビデオカメラで写している中、私も負けじと一番前まで行って写真を撮った。

花嫁の家に着くと結婚式の派手なテントが並んでいた。以前、乾期にカンボジアに来たときに何度か目にした事があった。なんだかわくわくしてきた。車が家の前に止まり、さっきまで皆が座っていた椅子が慌ただしく車からおろされて、高床式の家の1階部分にすぐに会場が作られた。

ピンクの服をきた男性が司会のように、写真撮影しながらの儀式が始まった。花婿がアメリカ人のため、司会の男性はクメール語と英語を交互に話す。花婿と私以外は全員カンボジア人で、クメール語のところで時々笑いが起こる。私は英語もあまり出来ないのでもんなことを話しているのかわからなかったが、話し方がお芝居のようでなんとなくおもしろかった。

着席した参列者から男の子と女の子がフルーツを集めて花嫁の両親に渡す。音楽は生演奏、歌もその女の子が歌い、独特の手の動きで踊りながら集めていく。いくつかの儀式のあと、いよいよ花嫁の登場。2階から降りてきた彼女は、私の姿を見るなりニコッと満面の笑みを見せてくれた。きっと彼女は私が来られないと思っていたんだろうな。ジャスミンの花のシャワーの中花婿のもとへ歩いていく。彼女はしっかりメイクされ、綺麗な伝統衣装を着ていた。すごくきれいだった。すごく嬉しそうな表情をしていた。こちらまで笑顔になってしまった。

いくつかの儀式のあと、親族のみ2階へ。他のゲストは下で食事となった。私も2階へ上がらせてもらう。部屋の中はピンクやオレンジで飾られていて、写真用に照明もたくさん置いてあった。新郎新婦と付添い人



は衣装チェンジ。儀式が続き、合間合間に衣装チェンジがある。そのたびに写真とビデオ撮影。私も、花嫁の日本の友人たちのためにたくさん写真を撮ろうと思い一緒になって撮っていたが、途中でカメラマンに邪魔だと怒られてしまった。その後は花嫁が気を利かせてくれて、カメラマンが撮ったあとにそれぞれ私が撮る時間を作ってくれた。

儀式の途中、彼女は私にメイクと着替えをさせてくれた。結婚式のためにプロのヘアメイクさんが数人来ていて、私のヘアメイクをしてくれた。思いがけずカンボジアメイクをしてもらい、とても嬉しかった。服もカンボジアの衣装を貸してくれたが、私は日本人のなかでも大きい方で、服のサイズが小さかったため着るのは3人がかりだった。

着替えた後は周りのカンボジア人の私を見る目が変わったのがおもしろかった。おばあさんたちは（おそらく）「カンボジア人みたいだ」と言って私の手をさすってくれたり、クメール語でいろいろ話しかけてくれた。皆驚いてくれた。

合間に下に降りて朝ごはんのお粥を食べ、儀式は続く。新郎から花嫁の両親に贈り物や、指輪交換ではたしか3個くらい花嫁に指輪がされ、枕をはさんで両親と対面したり、アブサラのような格好をした新婦が新郎の足を洗ったり、日本とは大きく違っていた。それぞれいいポーズのところで止めて写真を撮るためとても長かった。

私がいいなと思ったのは、新郎新婦の手首に参列者が2人ずつ順番に赤い糸を結わえるところ。いままで“儀式”という感じだったのが、この時は皆笑顔で言葉を変えたりしていた。

14時すぎに式は終わった。とても疲れた。私が疲れているのだから新郎新婦はもっと疲れているだろうと思う。親族が着替えて部屋でリラックスしている間も、近所の玄関先を借りて花嫁の写真撮影は続いていた。下で皆で昼食をとった後、部屋の片づけをする。はじめ慌ただしく、あとはのんびりフルーツを食べながらの作業。小さい子と遊んだり、おばあさんがバナナをくれて“これをつけて食べるとおいしい”と教えてくれたり、おばさんに普通にクメール語で「チュオイ・ボンタイツ（ちょっと手伝って）」なんて言われたり、なんだか昔からの知り合いのような打ち解けた感じで接してくれるのが心地よかった。

片づけのあと夕方まで皆で昼寝をして、ホテルまで送ってもらった。明日は披露宴とのこと。

2日目。朝7時半に迎えが来てくれて、花嫁の家に行く。午前中はお寺とアンコールワットに行くよう。今日も普段着で来ていた私を花嫁が気遣ってくれて、メイクさん達に髪をセットしてもらい、昨日の服をまた貸してくれた。親戚の人たちは伝統衣装の人も、普段着の人もいた。親戚十人くらいでバンに乗り、市内のお寺へ行ってお参りと写真撮影。新郎と私は外国人のためこの後アンコールパスが必要で、ホテルの部屋に取りに戻ってからアンコールワットへ。新郎新婦と付添い人はリボンで飾られたウェディングカーで向か



う。西門のヴィシュヌ像のところで先に写真撮影が始まっていた。今日も何度か衣装を替えていた。着替えるところがないため隅の方にメイクさんたちがスタンバイしてそこで衣装を着替えていたので驚いた。花婿はジャケットを替えるだけで済んだりしたが花嫁は大変そうだった。2人は観光客に大人気で、特に参道で撮影していた時は人だかりができていた。天気もよく、アンコールワットをバックに原色のきらびやかな衣装を着た花嫁が映えてとてもきれいだった。

市内のカフェの庭に移動し、また写真とビデオを撮る。ここでも庭先でウェディングドレスに着替えるのに驚いてしまった。学校帰りの小学生の女の子たちが、ちょっと離れた所からじーっと花嫁を見ていたのが印象的。花嫁の家族たちはのんびりしていて、おやつを買ってきてみんなで食べたりした。

一旦家に戻って昼食をとり、みんなで昼寝をし、15時から披露宴のための支度が始まった。私も花嫁と一緒にメイクをして髪を巻いてもらい、服も違うものを貸してくれてそれに着替えた。部屋には女性ばかりで、大人も子供もきれいに着飾っていた。

夕方、家族とバンに乗って披露宴の会場となる大きなビュッフェレストランへ。一角が結婚式用に飾られていた。次々に参加者が増え、みな思い思いに料理をとっていつの間にか宴会が始まっていた。ビールが足りなくなると誰かがバイクで調達してきて会場の窓から直接運び入れていた。男性は普段着の人も多かったが、女性たちは伝統衣装やドレスを着てお化粧もして、とてもきれいで見ていて楽しかった。



新郎新婦は友人が到着するたびに写真を撮っていて、食事をする間がないくらい忙しそう。付添人として男女2人ずつが新郎新婦と揃いの衣装を着ていて、白いタキシードに白いドレスなので3組の合同結婚式のように見えたのが不思議だった。

メインイベントのケーキカットの時にはクラッカーやスプレーで皆大盛り上がり。生クリームが豪華なケーキには英語とクメール語で文字が書いてあり、新郎新婦をかたどった砂糖菓子がのっているところは日本と同じ。ちょっと違うと思ったのはケーキカットの後、花嫁が旦那さんにケーキを食べさせるのではなく両親に食べさせていたこと。その後はダンスがあるということだったが、だんだんと人が帰り始め、私も会場を後にした。

後日、カメラマン撮影のDVDを見た。あれだけ長かった結婚式がうまく編集され、私もちょこちょこ写っていたりして、いい思い出になった。偶然が重なって結婚式に参加することができて、とてもいい体験ができたと思う。大切な2日間に呼んでいただいた2人に感謝。異文化のなかで戸惑うことも多かったけれど、私が一人にならないように話しかけてくれたり、花嫁や彼女の家族が私を気遣っているいろいろ助けてくれて、皆とても温かい人たちだった。彼女に出会わせてくれた日本の友人含め、皆さんに感謝です。(写真も筆者)

【船越ちひろ(ふなこし・ちひろ)】

趣味は写真。「アンコール遺跡群フォトギャラリー」で写真を展示中。

『アンコール遺跡群フォトギャラリー』のご紹介

このウェブサイトは2000年1月に開設しました。その後の変化は、トップページの画面を見ていただければわかると思います。



2001年9月



「カンボジアジャーナル」もカンボジア勉強会もこのサイトから生まれました。

サイトは遺跡の写真が中心ですが、現代カンボジアについてのコンテンツも載せています。

現在の課題としては、掲載した写真の撮影時期が古くなってきていることでしょうか。

アンコール遺跡をめぐる環境も変化しつつあり、掲載されている写真の中には今では撮影不可能なものがかかりふくまれています。こうしたコンテンツを楽しんでみるのもいいかもしれません。

その意味でおすすめのコンテンツとしてはアンコールワット第3回廊の中央塔周囲にあるデヴァターのおそらく全部の写真があります。今ではこの中央塔の周囲はもちろん、第3回廊そのものへの立ち入りが規制されているわけで、その意味では貴重だと思います。

コンテンツからいくつかご紹介すれば：

「Maps & Illustrations」のページには多くの遺跡について平面図のイラストが掲載されているので遺跡の概要を把握できます。

「Boat trip on Tonle Sap」は今ではすたれてしまったスピードボートによるトンレサップ湖経由の旅の記録。

「Hindu Temples in South India」はアンコール文明に大きな影響を与えた南インドのヒンドゥー寺院の写真のコレクションです。写真はタミルナドゥ州で撮影されました。

これらの所在はサイト内検索で探すこともできます。

そのほかたくさんコンテンツがありますから、思いついた時サイトの中をあちこち探検してみてください。おもいがけない出会いが待っているかもしれません。(波田野)

## 自転車オヤジ、カンボジアに行く

平戸 平人

今、私の机の上にボロボロになったカンボジアの旅行地図がある。2007年に東京駅前の八重洲ブックセンターまで行って買った地図だ。あっちこっち破れた大きな地図は旅先での書き込みと擦り切れた部分の補修で小汚い。メンディングテープは全面に張られている。私の小さな宝物だ。

## カンボジアとの出会い

私がカンボジアを初めて訪れたのは今から4年前の2006年であった。友人と2人で東南アジア4国を1ヶ月間の短い期間に駆け足旅行した。

その時、友人がアンコールワットの写真を撮りたいと言ったのが訪問のきっかけだった。当時の私はほとんどこの国に観光客としての関心以上のものはなかった。同国内の状況も内戦や虐殺というイメージが強く、この国の印象を悪いものにしていて、まだ不安定な危険な国としか認識していなかった。

観光客としてタイのアランヤプラテートからシェムリアップへ入った。驚いたのはその悪路だった。当時、悪名高かった未舗装の6号線である。道路の穴で真っ直ぐ走ることができない悪路にゆられた痛い尻をかばいながらシェムリアップで2日を過ごした。

そして我々は3日後、バスでプノンペンを経て、ベトナムのホーチミン市へ入った。我われはデング熱を恐れる友人の希望のまま、その日のうちにベトナム南北鉄道のコンパートメントの乗客となっていた。私の心は既にフエやハンロン湾に向っていた。

## 2007年の自転車旅行

次の年の4月26日、私は一人でタイのコラートにいた。東京から自分で整備した古い日本製の自転車を持ち込んだ。ここから海沿いにカンボジアへ入り、シェムリアップへ向うつもりだった。大まかな計画はあったがカンボジア国内の状況や都市などの手に入る情報は余りにも少なく、計画は変更や撤退もあり得るといふ曖昧なものだった。

トラート→クロンヤイ→ハット・レック国境を越えカンボジア・コッコンへ。コッコン→シアヌークビル→カンポット→タケオ→アンコールボレー→首都プノンペン→コンポンチュナン→プラサット→バタンボン→シソポン→バンテアイチュマール→シソポン→シェムリアップ=アンコールワットを実際に走った。

約2週間、約1500キロを走り目的地、シェ

ムリアップへ無事到着した。アンコールワット西参道の橋の前でコッコンから走ってきたことに感心してくれた現地の警察官に記念写真を撮ってもらい前半の旅は終わった。

主に舗装された国道を走った2週間に物足りなさを感じた。ビザが半月残っている。日本のガイドブックには出ていない奥地へ行くことにした。実際に走った行程は結果として次のようなものになった。①シェムリアップ←→アロンベーン←→プリヤ・ビヒヤ②シェムリアップ→ベンメリア→プラサット・プリヤカーン→スダウ→クレーン→コーケー→ベンメリア→シェムリアップ

4月から5月にかけての1ヶ月でカンボジア国内を2千数百キロ走った。57歳になるこの年まで自転車で旅行した経験はなかった。前々年に会社を退職するまでは普通のサラリーマンだった。勿論、カンボジアという国に熱心な関心を持つ者でもなかった。

この紙面では、この自転車の旅の中でも思い出に残るシェムリアップからコンポントムのプラサット・プリヤ・カーン遺跡を訪れた際の記録を振り返ってみたい。私の自転車旅行の一端が理解していただけるかもしれない。

## プラサット・プリヤ・カーン遺跡へ

日本のガイドブックには載っていない巨大遺跡がシェムリアップ北東130キロの田舎の密林にあるという。それがプラサット・プリヤ・カーンだ。まともに車が走ることができる道路がないので、観光客も簡単には訪問できないのだ。地元ガイドをつけると200ドル(2万1千円)だが、自分で行けば30分の1から20分の1だ。

2007年5月19日、ゲストハウスを早立ちして遺跡に向かう。今回も速攻のため、最低限の軽量、軽



5月10日、アンコールワット到着

装の装備で挑戦する。前回プリヤ・ビヒヤから南下してコーケーとこの遺跡を訪れる計画だったが、プリヤ・ビヒヤへは無事に到達したものの、帰りのジャングル道で迷い南下に失敗している。前回の轍を踏まぬよう、心を引き締めてかかることにする。途中のベンメリア遺跡までは以前と同じ道だ。その先、東のプリヤ・カーンまでは更に70キロくらいある。

走り出すと、昨晚、ゲストハウスで同年輩のオーストラリア人たちとヨット談義をしながら飲んだビールで二日酔い気味だ。今ひとつ調子が出ない。

走り慣れてきた国道6号線を東進する。プノンペンへ向う国道を左折して、ベンメリアを目指して北へ向かう。

この田舎道でタバコの行商をする青年と一緒にいる。自転車で後になり先になり、また、一緒に並んで走り、あれこれ話す。彼も退屈なのだ。売物のタバコをすすめてくれるが、吸わないので残念だ。昔の日本と同じように、この国の男同士の間では、どうやら「一服どうだ」というのが礼儀のようだ。このお兄さんの出現に励まされながら、午前10時近くにベンメリアへ着いた。

### 王道を往く

ここでタバコの行商人とは互いに手を振り別れた。彼はバンテアイ・スレイへ向って行った。この後の旅でも自転車のパン屋さんと何度かカンボジア人の優しさに助けられることになるのだが、このときはまだあまり実感はなかった。

ベンメリア遺跡の入口で休憩する。遺跡の管理人たちは一週間前に私が自転車できたことをおぼえていて声をかけてくれた。遺跡前の食堂で2ドルの高価でまづい朝飯兼昼飯を食べる。

日本語のできるガイドが「どこまで行くのか」と話しかけてくる。日本語は3週間ぶりだ。目的地をいうと「本当にこれからその自転車でこの道を通ってプリヤ・カーンへ行くのか」と驚いている。「向うに宿はないよ」といつてくれるが、気にしないことにする。今回も野宿は辞さない覚悟だ。先を急ぐ。この道路は地方道66号線というらしい。かつて地方とアンコールの都を結んだ「王道」である。

走り出すと、あっという間に悪路に突入する。「王道」沿いの村を通り抜け、林の中に巨大な寺院の遺跡を見たり、古い石橋の欄干のナーガ（蛇）像を見たりしながら、どんどん進む。道は砂礫になったり、粘土質や石ころだらけになったり、むき出しの岩盤になったり、めまぐるしく変化する。林を抜け、草地の中の道を走る。草地には姫菖蒲のような白い花が咲いている。この花は葬式の野送りのときに持つ花、シカバナに似ていて気持ちが悪い。黒と茶色の大きな鳥がギャ

ーギャーと鳴きながら、行く手を横切る。

小さい川を何本か渡る。川が近づくと竹林が現れるので川が近いことが分かる。この竹は鋭いトゲを持つ。無理をするとシャツがトゲで破れる。小川の岸では色とりどりの蝶の群れが砂地の上で水を飲んでいる。靴のまま自転車を押して水に入る。

地雷原の標識が現れる。赤地に白抜きのどくろマークのおなじみの標識だが、どこまでが地雷原なのか、その範囲は分からない。怖いと言えば怖いのだが、道から外れないように注意して前進する。

走るのに疲れてくると「何でこんなところまで来てしまったのか」と考える。道はあるところでは道の全面を覆う大きな池や川になる。はるか彼方に乾いた道が見える。仕方なく自転車を押して、水に入る。また、向う脛の化膿がひどくなりそうだ。

### 王道で遭難一救いのバイク登場

突然、自転車のクランク（ペダルがついた金属の腕）がガクガクする。拙い。クランクをとめるナットが緩んでいる。ついにクランクも緩み、ペダルをこげなくなる。クランクを石で打ちつけ、持っているスパナとプライヤーでクランクシャフトへナットを締め付ける。数キロ走ってはこれを繰り返す。整備の不良も自分の責任だ。夕暮れになるが焦ってもしかたがない。

自分は決して運がいいほうではない。しかし、この日は違っていた。

日は落ちて林の中は薄暗い。目的のプリヤ・カーン遺跡は近いらしい。遺跡の一部の大きな石の壁の前で佇み、「道具らしいものはないが・・・蚊帳を吊り野宿だ」と決めた。その時、今まで走ってきた道からブォーンとバイクの音がする。バイクの灯が林の中でチラチラしている。近づいてきたバイクには青年2人が乗っている。

近くに人家のない遺跡の中で私の姿を見つけて驚いている。バイクを止めて「どうしたのか」と聞いてくる。「遺跡を見に来たのだが、今日はこれ以上進めないで、ここで野宿する」と応えると「ここでは危険だ。お前と自転車を運んでやる」という。ありがたいのだが、バイクが見るからに小さい。

それに、行くなら一人で行きたい。一番怖いのは人間だ。「次の村までどのくらいの距離があるか」と聞く。「後10キロくらいだ。バイクで約1時間かかる」との返事だ。自転車では2時間はかかる距離だ。勧めに従うか、断るか迷う。

結局、彼らと一緒にいくことに決める。やはり、山の中に1人で泊まるのは怖い。自転車のクイック・リリース・レバーを倒し、手早く前後の車輪をはずす。運転手と一緒にいる青年に車輪2個を持ってもらい、自転車のフレームを自分が持つ。

バイクが走り出して、ハンドルに取り付けたサイクリメーターが無くなっているのに気がつく。水溜りを避けるための藪漕ぎで外れたらしい。これからは走行距離は計れない。バイクは先に進む。探しに戻る余裕はない。

### 村へ到着

悪路と池のような水溜りと川が続く。3人乗りで越えられないところではバイクを降りて歩く。池のような水溜りでは膝まで水に浸かる。迂回路は藪の中だ。腕や脚に引っかき傷ができる。

3人で協力し、何とか道を探しながら先を急ぎ、午後7時過ぎ、最後の大きな池を歩いて渡ると、真っ暗な中に小さく暗い明かりがポツリ、ポツリと見える。村へ到着した。

バイクの運転手はこの道に慣れていらしく、村に入ってすぐ、道路の傍の農家を訪ねて家の人と話している。そして、今夜の泊まりはここだと言う。一緒に



道はどこだ？

泊まれということだ。

バイクの運転手は簡単な英語を話す。彼らもシェムリアップからやってきたのだった。バイクの2人の青年と宿の主人と奥さんの4人の顔が暗い部屋のかすかな明かりの中で輝いている。灯りは石油ランプの小さい炎だ。このランプ、我々が目にする立派なランタンではなく、その光源は小さな赤い火種だ。ガスライターの火の方がよほど明るい。

### 農家の晩飯

村の名前はタ・セング (Ta Seng) という。村はかなり大きくて人口がありそうだ。

泊めてもらった高床式の家の下には家の財産である牛と豚、鶏がいる。家の人の奨めで食事の前に外の暗い井戸から水を汲んで身体を洗い、足をすすぐ。農家の人が子供たちの寝床を空けて、急な客のために寝床

をつくる。

その間に暗い中で、奥さんが嫌な顔もせず、夕飯を準備してくれた。白飯と魚とキノコの2種類の汁物だ。何が入っているのか見えない闇鍋状態だが、キノコの煮物は日本のキノコにはない高貴な香りで特に美味しい。その食事は、大きな皿鉢に料理が盛られており、そこからスプーンでめいめいのご飯の上に料理を分けて食べる。その傍らで、梁や床をネズミが走る。やせた飼い猫の親と子猫が周りに現れる。餌が欲しいらしい。

バイクの青年によれば、この家の若い優しい当主は元々は象使いなのだそうだ。象は隣国のタイが有名だが、カンボジアに象がいるといわれてもピンと来ない。かつてはカンボジアでも象を使っており、象使いも多かったという。

食事の後、唯一持っている塩味クラッカーを子供たちに配る。基本的に食料は持たないのだ。こんなことなら甘いお菓子をもってくればよかった。村に店はあるが、菓子は高嶺の花だ。

旅人3人で蚊帳の中に入り、疲れた身体を横たえるとあつという間に寝入ってしまった。

### バイクの青年たち

翌朝、家の井戸で顔を洗う。井戸のそばには女郎クモが巣を張っている。朝露が降り、水滴が巣の糸をたるませている。

綱つきのバケツを井戸へ投げ込み、水を汲み上げる。井戸は浅く水は濁って白い。井戸の底にはカエルが数匹浮いて、こちらを見ている。

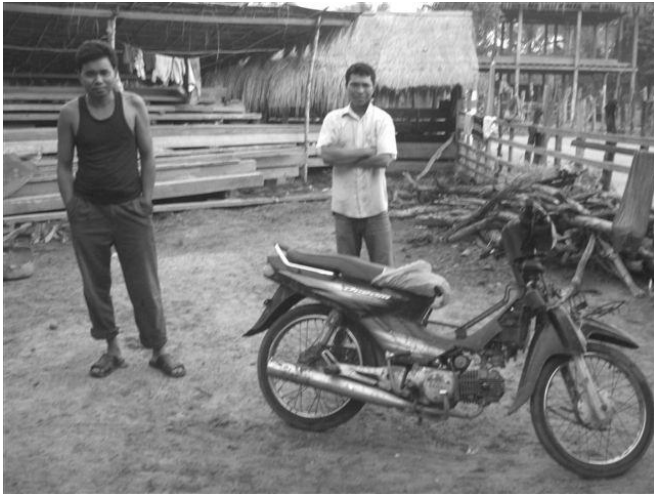
昨夜はバイクの2人の顔はよく見えなかったが、明るい青年たちだ。この朝、シェムリアップに戻るといふ。悪路から救出してくれたお礼をした。遠慮してなかなか金額を言わない。結局、4ドル(480円)にする。自転車の車輪2個を運んでくれた若者にも1ドル渡す。

二人は何やら相談して、バイクでどこかへ消えた。家の若い当主が市場へ行ったと言っている。しばらくして、二人が戻ってきた。話を聞くと、もらった金で買い物をしてきたとのこと。どこに市場があるのか分からないが、買って来たものは、茶色の大きな蛇で、1.5メートルはある。30センチの陸亀、それから白いアヒルだ。それぞれ麻袋に入っている。勿論、食用だ。うれしそうだ。「グワッ、グワッ」と私がアヒルの真似をすると皆が腹を抱えて笑う。

彼らは一服して昨日来た道をシェムリアップに戻っていった。彼らの姿が林の中に消えるまで見送った。食材を買うのが仕事なのだろうか、最後まで彼らがなぜここに来たのかは分からず仕舞いだった。何れにしても私にとって彼らの出現は天佑であった。

この日は日曜日で朝から向いの村長の家で集会が行われていた。向いの家に来た村人たちに会う。好意的だ。この村がかつてポル・ポト派が牛耳っていた村だったと聞いても表向きは何も分からない。

数人の村人が集会の始まる前に訪ねてきてくれて、



バイクの青年たち

私の乗ってきた自転車にまたがって試乗会となった。「ほう！この自転車でシムリアップから来たのかい」と言っている。

同じ農家に今晚の宿を頼み、目的のプラサット・プリア・カーン遺跡の見学に行くことにした。

### 青石の寺院遺跡

石造りのクメール遺跡は確かに人を魅了する。旅を続けているうちに遺跡のとりこになった。どどこを訪れたという旅の証を無意識に求めているのだろうか。

朝の涼しい田舎道を8キロ戻る。紅土の山道でタイヤがザザーッと音をたてる。道の分岐で昨晩暗い中で見たクメール文字の看板を発見。読めない。が、絵が描いてあるので遺跡の看板だと分かる。

遺跡へ行く前に、昨夜、サイクルメーターを落とした場所まで戻る。藪の中をガサガサと目を凝らして探すが見つからない。現地では入手が難しいので痛手だ。これから先の走行距離は地図で確かめることになる。旅の初めにシアヌークビルで取り付け付けた距離計は確か1850キロを示していた。あきらめて遺跡へ行くことにした。

遺跡の案内板も資料もない。手探り状態で見学だ。小さい祠が左側の丘に見える。

その先で突然、小さい寺院が右側に出現する。プラサット・プリア・ストゥンだ。四面仏尊顔が1つ寺院の中央に屹立しているのが大きな特徴だ。自転車を横たえ、後日一番の思い出となった記念写真を撮る。廃寺跡の中に入ってみる。石組みは崩壊している部分もあるが、形はよく残っている。無音の静寂の世界にい

る。

さらに進むと右手の田んぼの奥にこげ茶色のラテライト石の長大な壁が連なっているのを発見する。

あの壁までは300メートルはある。入るにはどうすればいいかと考えていると、牛車で農作業に来ている家族に会う。中学生くらいの兄妹だ。「あそこへ行きたいが案内して欲しい」と身振り手振りで頼む。笑顔で応じてくれた。

今、その壁を見ながら立っているのは昔の「王道」だ。砂利交じりの赤土が田んぼよりも高く盛られている。稲は刈り取られた後だ。壁まで耕された灰白色の粘土の田んぼが続く。田に降りる小道の両側には赤地に白抜きドクロマークの地雷原の標識が見える。

慣れた彼らは道を下り、田んぼの中をすたすた歩く。早い！自転車を置いて追いかけても、ついて行くのが大変だ。歩きにくいのと、地雷が心配なのだ。15分くらいで石壁に到着し、壁を回り込む。

草むした石畳の参道が現れる。目の前に特徴のある仏尊顔のある門がある。門をくぐると眼前にプラサット・プリア・カーンの本殿を取り巻く石壁が現れる。長大だ。

壁は青碧の水成岩でできている。見事な深い青緑色だ。色と石質は砥石そのものだ。手作りの木の栈道を上り、石壁を越える。四方を壁に囲まれた本殿のある場所は草が生え荒れ果てている。広い。塔やその他の建物の遺構が見える。ところどころに崩壊した建物の石材が積み上がっている。

遺跡はフランス、日本が資金援助して地雷が除去されているというが、安心はできない。歩けるところも限られている。

「聖なる剣を安置する寺院」を意味する「プラサット・プリア・カーン」別名「大プリア・カーン」は2キロ四方以上の広さを持つ。衛星写真でも遺構を見ることができの大きさだ。

この遺跡もアンコールワットのように初めはヒンズー教の寺院として建てられ、その後仏教寺院となったのだろうか。それとも初めから仏教寺院として建てられたのだろうか。デバーダ（女神）像が建物に彫られている。石に彫刻された彫像は仏像のようだが。遺跡は明るく、開放感がある。大らかだ。遺跡に大木がないのもその理由だ。

かつて信仰心は巨大な寺院を建立させ、賑う街を形成した。しかし、今は、廃墟がひっそりとジャングルの中に佇んでいる。素晴らしい遺跡を独占できるのは贅沢だ。静寂が遺跡を支配している。静けさで耳が痛い。この遺跡は、道路事情が悪いため訪れるのが難しい遺跡の中の1つだ。だが、これだけの規模の遺跡ならば、立派な道路ができて、観光客が頻繁に訪れるようになるのには、そう時間はかからないだろう。次回

はできればもっとゆっくり訪ねたいものだ。

そして遺跡を去る時間がきた。青石の巨大な壁の前で案内してくれた兄妹の記念写真を撮る。後ろを振り返りながら、元の道に戻る。戻る参道の側面にはサムハ＝鷲鳥だろうかガルダ（想像上の聖鳥）だろうか巨大な鳥のレリーフがある。どれほどの人がこの参道の上を歩いてきたのだろうか。

先ほど田んぼに降りた場所に戻る。案内をしてくれた兄妹の父親と小さい弟たちが迎えてくれた。遺跡を撮ったデジタル画像を見せ、喜んでもらう。それからポケットの中を探り、兄妹にささやかなお礼をする。家族がそろって大喜びしている。遺跡の本殿を見学できた余韻を味わいながら、タ・セング村へ戻る。

一息ついて勧められて水浴をする。爽快。当主にデジタル画像を見てもらう。「これはプラサット・プリア・カーン遺跡ですか」答えは「すべてがプラサット・プリア・カーン遺跡だ」という。兄妹の写真を見てもらうと、よく知っている子供たちらしい。まあ、ちゃんと遺跡を見たことが確認できた。

### 宿代を支払う

夕食後、夫婦2人がいるところで宿泊料の話をする。「お金を払いたい」というと、当主は、奥さんの顔を見る。日本と同じで、面倒なことはしっかりした奥さんがするのだろう。しかし、奥さんは手を横にふり「金は要らない」という。やり取りを15分続けた、一晩2ドルということになった。今夜の宿泊分とあわせて4ドル渡して、さらに奥さんに1ドル渡そうとすると、これも要らないという。おいしい料理を作ってもらい、親切にしてもらったので受け取って欲しいと身振り簡単なことばで、5分くらいやりとりして受け取ってもらう。カンボジア人はハニカミ屋さんが多い。一度遠慮するのも礼儀だと聞く。英語とカンボジア語と日本語で交渉だ。身振りが言葉の足りないところを補完してくれる。

彼らの暮らしぶりは単純だ。50年前の日本の田舎と変わらない。朝日が昇ると働き、夜になると寝る。テレビもゲームもここにはない。生活は質素だ。拝金教もこの地までは及んでいない。日が暮れると部屋は暗い。出発の準備はすませた。蚊帳に入り、すぐ熟睡する。自転車旅行の毎日の生活は単純である。」

(注：「自転車オヤジ、カンボジアに行く」雑誌「財形福祉」2000年8月号～2009年8号<(社)財形福祉協会発行>へ掲載した記事を引用し、一部を書き改めました。)

### 旅のその後

2007年のカンボジア自転車旅行のハイライトを紹介した。タ・セング村を去った後、私は悪路をたど

り隣村のスダウへ向い、更にスダウからクレーン、コーケー遺跡を経てシェムリアップへ戻った。時計も、カメラも水に漬かりだめになった。

前年の雨季が殊更雨が多かったのか、あるいは5月で雨季に入っていたのか、この年は行く先々の轍道が池や水溜りで覆われており、何度も行く手を阻まれた。その後も同じ時期にカンボジアを訪れているが、この年ほどの水を見ることはない。

5月下旬、シェムリアップからタイへ出国し、コーラート、ピーマイを訪れ、さらにウボンラチャタニーへと主にバスで移動。ウボンラチャタニーから自転車旅行を再開し、ラオスへ。

パクセー→チャンパサック→アトプー→ボロベン高原、タ・テング、パクソン→パクセーと走り、ウボンラチャタニーへ帰還。バンコクから帰国した。体重は2ヶ月間で15キロ減っていた。

### なぜカンボジアへ行くのか

何がカンボジアを目指す動機になったのか。覗き見、野次馬的な興味が自転車という旅行手段とカンボジアの田舎へ行くことを動機付けたと思う。

日本に居ては同国の社会的、地理的な情報が少なく、状況がよく分からなかったということだ。現地では主要な国道を走るのに飽きた私は牛車の道をたどって奥地へ向った。アンドレ・マルロー (Andre Malraux) の小説「王道」(1930年)や平野久美子の「淡々有情」の影響もあるかもしれない。

### なぜ自転車の旅なのか

2006年の友人との旅の途中、ベトナムで外国人サイクリストを見かけた。そのとき友人があんな旅行はしたくないと言ったこと、金がかからないこと、カンボジアの交通機関が未発達で自転車が便利なこと、カンボジアの国土が狭いこと等等自転車旅行をする様々な理由があげられる。

「ヨシ(私)はホンダ(オートバイ)の国から来たのになぜ自転車に乗っているのか」とカンボジア人に聞かれることが多い。私の答え?カンボジアは国土が狭い。オートバイに乗ったら東西南北2日で国土を出てしまうじゃないか、と答えることにしている。

### 肌身で感じる時代の変化

カンボジア人の生活の変化は激しい。1年ぶり、2年ぶりに訪れる奥地は近代化の波が及び、農業を基盤とするこれまでの伝統的な生活は大きく変化している。

2007年の奥地行では山中でライフル銃や自動小銃を携行する農民たちにも会い、銃嫌いの私はヒヤリとした。その後は奥地で銃を持つ人たちに会う機会も減ってきた。ラオスの方が銃を持つ人が多い感じだ。

人々の顔から人を刺すような目つきと殺気が消えたような気がする。

昨年（2009年）4月、再度、私はタ・セング村を訪れた。2007年に泊めてもらった農家を再び訪れて2泊した。その2009年の旅行記の一部を以下に紹介したい。

### 一山当てたお父さん

セン一家（泊めてもらった家）の生活がガラッと変わっていたのには正直なところ驚いた。もちろん貧しいままでいいとか貧しいのが当然だと言う考えはないのは言うまでもない。

昨晚、隣に寝た家の主は酒に酔っていた。遅くなったから帰宅。友人や兄弟と飲んでいたらしい。

この日、彼の友人が来て話すには、夫君は昨晚、飲みすぎて友達を乗せたバイクごと田んぼにはまったという。頬に擦り傷ができていた。

セン家の主人は36歳。子供は3人。その昔は象使いをしていたという。2年前に会ったときは大人しい優しい農夫だった。今もその優しい顔は変わらない。

以前に床下で飼っていた大事な家族の財産だった牛はいない。高床の家の下にはバイクと耕運機がある。家は最近新築し、かつて小さく暗かった石油ランプはバッテリーが駆動する蛍光灯へ変わり、テレビのある生活へ変化していた。

乏しい語数のカンボジア語で夫君と話をした。11ヶ月間、近隣の宝石採掘場で仕事をしたという。大きな掌を見せてくれたが、タコとひび割れが掌を覆う。その皮は厚く硬かった。放水と掘削作業のためだと彼は言う。

カンボジアではルビーやサファイヤ、ダイヤモンド、金も採れる。早い話がお父さんは兄弟と宝石を掘りに行き、一山当てたらしいのだ。その金で現在は毎日朝から兄や友達と酒を飲んでいるという。

（「続・カンボジア自転車旅行記/わたしが出会った人びと」雑誌「財形福祉」2009年10月号掲載記事の一部）



わが愛車

### 自転車旅行で何を知ったのか

テレビ、モバイル、自動車の波及も早い。奥地の開拓によりジャングルは激減して自然も変化している。これまで家がなかったところへ道ができ、家ができて、村が出現する。

変化は激しいが、訪問するたびに、奥地ではカンボジア人の素朴な素顔がまだ生きていると感じる。祭りに出くわし、泊めてもらった一家と村祭りへ参加し、一緒に踊ったり、酒を飲んだり。お経を聞いたりもする。

村に一人か二人英語を話す青年がいる。彼らを通じて村人が日本人は仏教徒かとか食べ物はどうだとか、聞いてくる。多分、日本人を見るのは初めてだろう。

山奥の村で盛装した年配の夫婦に出会った。私は自転車から降り、被っていた帽子を取って挨拶した。彼らも鳥の羽がついた山高帽を脱ぎ、丁寧な挨拶してくれた。出会いの初めの挨拶でも酒の席でも、別れの挨拶でも、私が子供のころ福島県の田舎で躰けられた礼儀作法で不都合を感じたことはない。ここではよく理解してもらえるのだ。ささやかな交流だが、そんな彼らとの触れ合いが東京へ戻ると懐かしくなる。私が生まれた郷里にも既ない風景がそこにはまだ現存していることを知るのだ。

### 旅が与えたもの＝雑感

2008年、2009年もカンボジアの奥地を訪れた。紅土の道に入ると「おーい！帰ってきたぞー」と人がいないところで叫んでいる自分がある。その旅は毎回、自分の肉体の五感を最大限に使った旅なのだ。

カンボジアの魅力は、当初、これまで見たことがない風物だと思っていた。最近ではカンボジア人そのものにあることに気がついた。

勿論、よい人間ばかりには会えないのがこの世の常だ。問題のない国はない。

が、カンボジア人が時として見せる底抜けの人の良さ、明るさ、その素顔に魅力があり、毎年この国へ足を向けさせることに気がついた。

10語しかカンボジア語を知らない私が身振り手振りで宿を請いながら奥地を無事に旅行できるのも優しい彼らのお陰である。

ある小学校の校舎ではそのモルタルの壁に道路から見えるようにカンボジアの地図が描かれている。隣国、タイ、ベトナム、ラオスも描かれている。この地図、カンボジアだけが実際の比率よりことさらに大きく描かれているのだ。子供たちに国の誇りを持ってもらおうとする意図は分かるのだが、思わず笑ってしまった。かつての日本も自らの国を大きく描いていたのだろうか。熱中症にかかり身振り手振りで彼らの家に泊めて

もらい、介抱してもらったこともある。そして時として10代後半から20代前半の現代のアプサラ達に出会うこともあるのだ。人嫌いだった私が今はカンボジア人たちに関心をもっている。私の友人たちは2歳から74歳まで。田舎で友人を作ることが最大の楽しみだ。遺跡を含めて新奇、珍奇なものを見ることにさほど関心がなくなった。

奥地で探鉱活動を行っているベトナムの鉱山会社の基地に行き当たり、一晚泊してもらったこともある。忽然と現れる80人のベトナム村の出現は、単なるカンボジアの国策の一端としての資源開発なのだろうかとかベトナムへの借款返済の一部なのだろうかなどと、疑問をもたせる。そして、カンボジアの周辺国との関係へも眼が向くようになった。

タイ、ラオスも自転車で旅行する。国ごとの持ち味は夫々異なる。カンボジア人は私の印象では素朴。タイ人のような世渡り上手の器用さはあまり持ち合わせない。カンボジア人と親和性が高いラオス人の性格はまだよく分からない。3国に共通するのは女性の主権が強い社会だということだ。母系制のためなのだろうか。カンボジアもラオスもタイもベトナムも実生活では男性の影は薄いと思う。もっとも3国へ行かなくても日本でもそうなのだが。独断だが、女性の果たす役割から見ると男性が少ないラオスが第一位で、タイ、カンボジアの順で女性が偉いような気がする。共通して寡婦も多いような気がする。好奇心の強い彼女たちは一様に年寄りの私には親切である点も共通する。

話がそれだが、次には歴史に眼が向くようになったことだ。カンボジアとタイはなぜ仲が悪いのか。1909年のフランスとタイの領土確定条約締結、それ以前の両国の領土状況などを知るようになるとプリア・ビヒヤを巡る領有権争いをどうみるべきか、など難しい問題に突き当たる。単純な私の頭はそれらの難しい問題を避け、机上のボロボロの地図を眺め、庭で自転車の整備を始めることになるのだ。今度はどの道を走ろうかと想像しながら。

【平戸平人（ひらと・よしひと）】  
サイクリスト／トラベルライター。

## カンボジアジャーナルを作りながら考えたこと

この小さな雑誌もなんとか3号を出すことができた。原稿を提供して下さる方もなんとか途切れることなく続いており、ありがたいかぎりだ。

ところでいつも自問しているのは、こういう試みに意味があるのかどうかということで、これには論理的な答がみつけれないけれども、感覚的感情的にはある程度の納得が私の内部にあり、だから続けているわけだ。

ではその正体はなにかということだが、個人的にカンボジアのあれこれを雑誌のかたちで読みたいということがあるのはまちがいない。今や出版というのは大変な困難に直面しており、よほどの大手でも雑誌を維持していくのに苦労している状況だから、カンボジア専門誌などというすきまのメディアは紙ではやっていけないのは明らかだ。

だからというわけでもないけれども、こういうミニ雑誌をやってみていると、いろいろと面白いことがわかってくる。それはひとつにはカンボジアにかかわる人々のことであり、それから自分の内面のことだ。

これはごく個人的な関心にすぎないのだが、「彼らはなぜカンボジアが好きか、なぜかかわっているのか」という疑問が昔から私の中にあって、それは常に一種の人間観察となって具体化する。

カンボジアにかかわる人が特殊だという意味ではないけれども、人間はなにかの契機があってはじめて行動し、関係を持つ。その意味で契機としてのカンボジア、関係をゆだねる対象としてのカンボジアというのはどういうものなのか、その人の中でどんな像を結んでいるのかが知りたい。もちろんそれはひとりひとり違うわけだが、共通している部分もあるような気がする。カンボジアにかかわる人の精神世界、心の中の像、行動の規範といったものをかなり野次馬的にのぞきこんできたこの十年だったと思う。

ではわたしはどうか。自分なりの分析はあるけれども、他人からどうみられているかについては悲観的だ。私はカンボジアに「はまっていない」といってもなかなか信じてもらえないのだが、このことが私の内面におけるカンボジアの位置、私のかかわり方の核心なのだと自分では思っている。

脱線したけれども、カンボジアジャーナルは8号までは出すと以前も書いたと思うけれど、その計画は現在のところ変更はない。なぜ8号かといえば2年という有期限であればこそ意欲が持続できるということ、また有期限のやるせなさをいつも感じていられるという感情的な要因もありそうだ。

(波田野直樹)

カンボジアの日本語フリーペーパー事情

西村 清志郎

フリーペーパー…身近な生活情報などを掲載し、限定した地域の家庭などに無料で配布する新聞や雑誌。また、駅頭や街角に置いて、自由に持ち帰ることができる新聞や雑誌。発行や配布にかかる経費は広告収入でまかなわれる。特に、雑誌の形態をしたものはフリーマガジンとも呼ばれる。(引用：大辞泉)

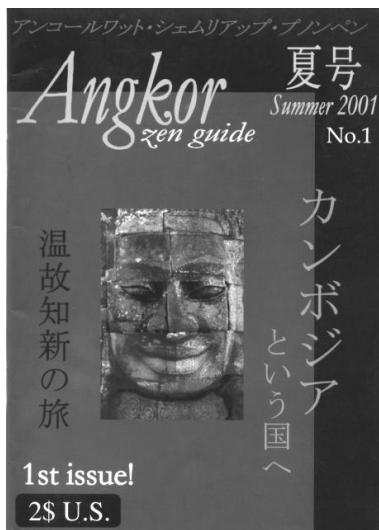
2010年1月現在、カンボジアで定期的に発行されている日本語フリーペーパーは3誌(不定期・未定分を含むと5誌)ある。在住日本人が僅か900人程しかいないこの国で3誌も発行されているというだけでも驚きなのだが、公表されている年間配布総数は14万部となっていることにも驚かされる。その理由は年間16万人(2008年度)という日本人旅行者の数にある。

ちなみにフリーペーパーと一口にいっても大まかに二つに分けると新聞スタイル、雑誌スタイルに分かれる。また雑誌スタイルでも毎号違ったコンテンツが提供されるマガジントイプ、基本内容はほとんど変わらないが、情報は常に更新されるガイドブックタイプ、そしてその合併型となるものがある。それらが様々なジャンルに分かれるため、きっちりとしたカテゴリー分けは難しい。ただはっきり言えることとしてマガジントイプは毎号違った切り口で特集を組む必要があり、マンパワーが必要となるのに対し、ガイドブックタイプは若干の差し替え等はあるものの一度デザイン、レイアウトを決めるとそれを更新するだけでいいため、少人数で制作できるという点である。

JAFNA(日本生活情報誌協会 Japan Free Newspapers Association)の発表によると、現在日本で発行・配布されているフリーペーパーが697紙、フリーマガジンは432誌となり、1209紙・誌にも及ぶ紙媒体が街中にあふれているというが、毎年新しいものも多く現れるかわりに、多くのものが姿を消していつているそう。もちろんその中にはカンボジアを含む世界全土で発行されている日本語雑誌は含まれていない訳であるが、ウェブサイトを検索してみると200種以上は発行されているようである。

各国様々な特色をもったフリーペーパーが在住日本人、観光客、ビジネス客等をターゲットとして、週間、月刊、隔月、季刊誌ベースで発行しているわけではあるが、出版社のセンス、営業力、他社との競合、バックグラウンド等はもちろん、マーケットの動向、つまりその国独自の問題発生や近隣諸国の影響によりその国への訪問者数が大きく増減することにより、休刊・廃刊に追い込まれていたりする。

カンボジアもご多分に洩れず過去いくつかのフリーペーパーが姿を消していった訳であるが、自分の知っている範囲で創刊号発行日順に紹介していきたいと思う。

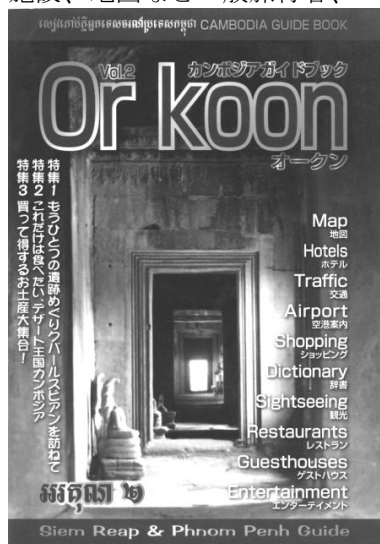
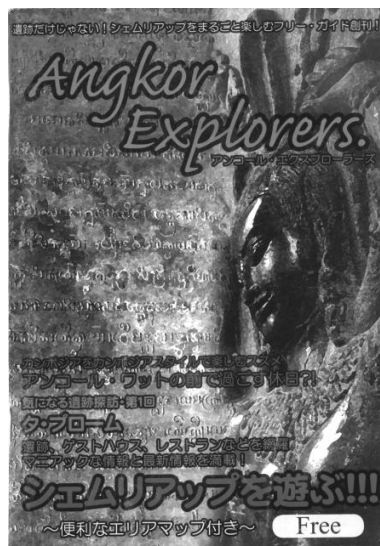


1998年以降、現地で最初に発行された日本語フリーペーパーは「ロンパオ(1998年4月創刊)」となる。プノンペンを基点としたバックパッカー向けの新聞タイプのものであり、現地新聞・雑誌から見つけた怪事件等が面白おかしく紹介されていたが、第6号(1998年10月)で廃刊となった。発行人・著者共、有名

なクローン黒沢氏である。しばらく期間があいた後、一般旅行者向けに制作された「アンコールゼン(2001年4月創刊・初号のみ有料販売、2号目以降無料)」が発行された。年三回発行、観光省のお墨付きマガジントイプのフリーペーパーであり、ショッピング、ダイニング等旅行者に役立つ情報と共に、毎号有名・著名人のスペシャルインタビューが掲載された人気マガジンであったのだが、第7号(2003年冬号)を持って休刊となっている。

「アンコール・エクスプローラーズ(2002年9月創刊)」は、観光客の多いシェムリアップを紹介することに重点を置いた構成となっており、観光の基本情報、見所、宿泊施設、地図など一般旅行者、バックパッカー共に楽しめる雑誌であったが、第3号(2004年1月)をもって休刊となった。

「オークン(2002年12月創刊)」は、旅行者にとって必要な情報をカテゴリー分けにし、日本語と英語を併記させたガイドブック寄りのフリーペーパーであった。年四回発行予定だったが、第2号(2003年3月)発行分以降確認されていない。\*第3号(2003



年6月)も一部配布されたという情報もあるが、市内では見かけていない。



カンボジアでは一番息の長いフリーペーパーとなる「ニョニュム(2003年10月創刊)」は、在住日本人及び一般旅行者をターゲットとした隔月発行(初号から12号までは月刊)の生活情報誌である。毎月違ったテーマを取り上げ、在住者ならではの情報を定期配信している。最近では日本語だけでなく、英語併記(一部カンボジア語併記あり)も始め、様々な試みで雑誌を盛り上げている。



2002年度後半から2003年度頭までが第一期カンボジアフリーペーパー隆盛期であったが2003年4月頃に問題となったサーズ発生により観光客が激減、この時期に多くのフリーペーパーが姿を消した。

2004年、2005年度と鳥インフルエンザ問題も浮上したが徐々に日本人訪問者も増え2006年度に入ってやっと新しく「はうとう@かんぼじあ(2006年1月創刊)」が創刊された。

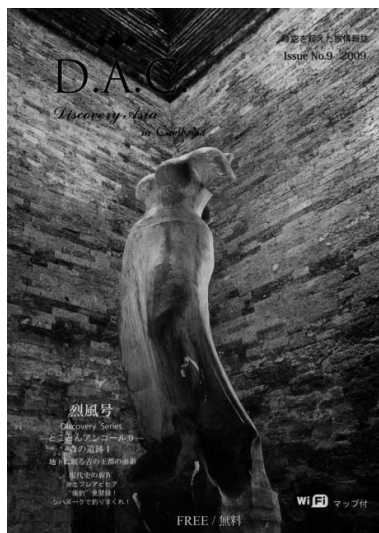


同誌は、かなりしっかり作られたガイドブック型フリーペーパーであり年3回発行(2008年4月発行の7号から、2009年4月発行の8号までは年1回、次号発行日は未定)となっている。カンボジア各省の大臣にインタビューしながら、様々なテーマ・問題点を取り上げている。また雑誌の内容はウェブサイトにも反映させ、

バックナンバーは丸ごとダウンロードできるなどカンボジア初の試みも多い。

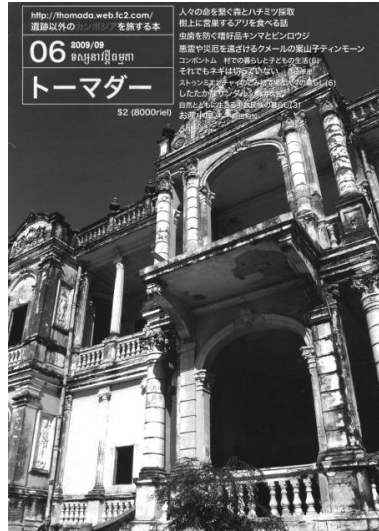
2006年から2007年度にかけ他に4誌が創刊、合計6誌が競合することとなる第二期カンボジアフリーペーパー隆盛期が訪れた。

「クロマートラベルガイドブック(2006年9月創刊)」は半マガジン、半ガイドブックタイプの季刊誌(年4回発行)であり、ベトナムの「スケッチトラベルガイドブック」とは姉妹誌となる。毎月2~3種の特集を組み、各分野の専門家、在住日本人からの寄稿を特徴としている。また同社は旅行会社という側面も持つため、記事のほとんどが同様の体験が出来るようにツアーになっていることも特徴の一つと言える。同社の補足業務として日本の出版社(主に旅行雑誌関係)からの制作受注し、インバウンド業務として「ドラえもん(小学館)」「クレヨンしんちゃん(双葉社)」のクメール語版正規ライセンスを取得し現地で販売を行っている。



「D.A.C(2006年10月創刊)」は、「アンコールゼン」を踏襲した雰囲気を持つマガジンタイプの雑誌である。年4回発行となっているが、実質年3回発行に止まっているようで現在最新のものが10号(2009年10月発行)となっている。発行当時はA5判サイズであったが、同時期に発行されていた「はうとう@かんぼじあ」

「クロマー」が同じサイズであったことから差別化を図り少し大きめのB5判へと変更、室内で読みやすい雑誌へと生まれ変わった。コンテンツの特徴としてはカンボジアだけでなく近隣諸国にもフォーカスをあてニュース形式で紹介、また前号から新号までの間に行われたイベント等の結果報告や紹介にも力を入れている。また「クロマー」同様にバックグラウンドが旅行会社となるため、記事がそのままツアーとして催行できるように時間等が詳しく紹介されている点も旅行者にとって非常に役立つことになるだろう。



「はうとう@かんぼじあ」が同じサイズであったことから差別化を図り少し大きめのB5判へと変更、室内で読みやすい雑誌へと生まれ変わった。コンテンツの特徴としてはカンボジアだけでなく近隣諸国にもフォーカスをあてニュース形式で紹介、また前号から新号までの間に行われたイベント等の結果報告や紹介にも力を入れている。また「クロマー」同様にバックグラウンドが旅行会社となるため、記事がそのままツアーとして催行できるように時間等が詳しく紹介されている点も旅行者にとって非常に役立つことになるだろう。フリーペーパーではないが、「トーマダー(2006年11月発行)」は不定期(年1

～3回程度) 発行されている有料日本語雑誌 (2US\$程度) である。カンボジアの文化、伝統、生活などを深く掘り下げた内容となっており、かなり読み応えがある。一番新しい6号 (2009年9月発行) には休刊の案内が出ているため今度継続されないようである。



最後に創刊された日本語フリーペーパーが「カンボジア・ザ・ライフ (2007年6月創刊)」となる。初期発行分は英語とカンボジア語の併記であったが3号以降は英語、日本語、カンボジア語と三つの言語で発行されることになった。カンボジア全土から毎号違った話題を取り上げ、非常に面白い切り口で紹介していた。

はっきりとは確認できていないが手元に残っている15号 (2008年8月) 以降、日本語表記はなくなり、英語とカンボジア語のみで発行されたとされる16号 (と思われる) 以来、市内で配布確認はされていない。同誌は不動産会社がバックグラウンドにあった為、2008年9月のリーマンショックを受け世界経済が不況に入ったとたんに姿を消すことになったようである。

リーマンショック以降、カンボジアでも不況の波がはっきりとおしよせフリーペーパービジネスもかなり厳しい状況へと入った。また先にあげたものは全て日本語フリーペーパーであるが、現地には英語、フランス語、韓国語など各言語で数種発行されており、少ないパイを取り合ってビジネスを行っている。

カンボジア産の日本語フリーペーパー。その数ちょうど10種類、うち7種類 (一部有料、一部未定) が既に休刊・廃刊となっている。各出版社がそれぞれの特色をもって、その当時ならではの様々な情報・写真・データ等を残していたが、その多くはウェブ等でも残されておらず、それらを直接目にするには難しい。せっかく創り上げた貴重なものが誰の目に留まることなく消えていく、再利用・再活用されずに埋もれていくことは非常にもったいないことであると思う。できれば、本当にできればだが、各出版社でネットワークが強化され、お互いが持つ貴重な情報・データの共有を行い、もし出版社がなくなることになっても、それから後の人々に活かされるようなシステムが出来れば良いと思う。

カンボジア日本語フリーペーパー一覧  
(一部有料分あり、創刊順)

- ロンパオ (龍包)  
1998年4月創刊、月刊紙。 <http://www.hehehe.net/pao/>  
アンコールゼン
- 2001年4月創刊、初号のみ有料 (2US\$) 販売、2号目以降無料。A5判、年3回発行。  
アンコール・エクスプローラーズ
- 2002年9月創刊。A5判、不定期発行。  
オークン (Or Koon)
- 2002年12月創刊。A5判、年4回発行。日本語と英語併記。  
ニョニユム (NyoNyum)
- 2003年10月創刊、隔月発行。初号から12号までは月刊。  
はうとう@かんぼじあ
- 2006年1月創刊、A5判、年3回発行。  
<http://www.howtocambodia.com/>
- クロマートラベルガイドブック  
2006年9月創刊、年4発行。 <http://krorma.com/>  
D.A.C (Discovery Asia in Cambodia)
- 2006年10月創刊。B5判、年4発行。  
トーマダー
- 2006年11月発行。A4判、不定期発行。有料1.5\$～2\$  
<http://thomada.web.fc2.com/>



1998年以降、現地で最初に発行された日本語フリーペーパー 『ロンパオ (龍包)』

【西村清志郎 (にしむら・せいしろう)】

編集・ライター・フォトグラファー。シエムリアップにて無料配布されている現地ガイドブック「クロマー」の編集長を務める。稚拙なカンボジア語とお気に入りのダートバイクを駆使し、カンボジア全土の見所、ビジネス、投資情報を収集。将来の目的は、カンボジアで編集プロダクション、デザイン事務所を設立し、カンボジア人デザイナーを育てる事。高知県出身。サイト <http://krorma.com/>  
ブログ  
[http://blog.arukikata.co.jp/tokuhain/siem\\_reap/](http://blog.arukikata.co.jp/tokuhain/siem_reap/)  
メール [magazine@krorma.com](mailto:magazine@krorma.com)

カンボジアジャーナル原稿募集

原稿を募集しています。ご希望の方はメールでお問い合わせ下さい。この人に書かせたいという推薦・情報提供もお待ちしております。

『日本カンボジア研究会』を立ち上げました！

小林 知

昨年11月、日本カンボジア研究会を立ち上げました。これは、カンボジアの国、社会、文化、自然、歴史をより深く理解したいと考える人びとを集め、2007年に降年に一度京都でおこなってきた研究会の参加者を中心としたコミュニティです。参加者のカンボジアとの接点は、研究上の関心を持ったり、仕事で関わったりと様々です。研究会という名称ですが、会則はありません。会長をはじめとした役職者もおきません。地理的な拠点や定点をもたず、最低一年に一度開かれる「研究会」を中心に存在し、継続し、成長することをめざす組織です。

カンボジアに関する研究会、カンボジアを研究する専門家のコミュニティ、という紹介をここまで読んで、皆さんはいったい何を想像するでしょうか。その助けとして、過去の研究会の様子を紹介しましょう。大学や研究所で催される研究会には、通常、何らかのテーマ設定や、話題提供者の選抜があります。しかし、この研究会では、特定のテーマを設けたり、そのテーマに関連した論者を選抜したりすることは事前にしていません。すなわち、社会・文化、政治、経済、開発、歴史などカンボジアに関わったテーマなら何でもアリという姿勢で、自分の考えていることを披露し、それについて他の人から意見を聞きたいと希望する方の自主的なエントリーに任せてきました。幸いなことに、これまでは、日本各地の大学院の院生や若手教員を中心として毎回7～9人の発表者が集まり、都合二日間にわたって濃密な時間を過ごすことができました。

さて、いま、このような研究会を構想し、発足させた最大の理由は、近年のカンボジア研究者の増加・多様化と、それにもかかわらず個々の研究者・院生が集まって積極的に意見交換する場がないという状況への反省です。カンボジアの社会が、1993年の統一選挙を境に「復興」の道へと進路を転じたことは皆さんよくご存知だと思います。実は、カンボジアについての研究も、ほぼ同時期に「復興」を始めました。（記憶によると）日本政府が内戦の間ストップさせていた日本人留学生の派遣を再開させたのが、1993年でした。アジア経済研究所の天川直子さんが農村調査に着手したのも、同じ時期でした。現在はそれから15年余が経ちました。そして、特に2000年を過ぎた頃から、日本の大学院などに所属してカンボジアへ調査に赴く研究者（院生）の数が急増し、また、そのそれぞれが取り組むテーマも大きく多様化しました。しかし、残念ながら、これらの人びとが自身がカンボジアでおこなってきた仕事・調査の成果を報告する機会は、所属する大学機関のゼミや各自が専門と考えている学会だけでした。カンボジアに関心をもち、現地にでかけて調査・

研究を行ってきた研究者・院生が一同に会し、「今日のカンボジア研究」の全体像を確認する作業は、この研究会により、いま始まったばかりなのです。

ところで、日本カンボジア研究会の設立には、もうひとつのねらいもあります。それは、主として研究者（院生）に対してのもので、「いったい対象を理解することとは何か」という問題を一緒に考えたいという願いです。学術活動としての研究の世界は、一定のルールに乗っ取った専門化が進んでいます。ディシプリンと呼ばれるそれぞれの専門領域のなかでは、先達から知識と概念を継承し、それを使いながら新しい何かを発見し、付加し、次の世代の研究者に受け渡そうとします。そのために、専門用語や方法論において、領域ごとに独自の形を発展させています。ただし、あまりに専門化した議論は、その専門の世界ではすばらしいことだとしても、「同時代」の現実空間で生をとりにしている人々を「対象」として仮想化しすぎる傾向があるのではと思います。カンボジアに関連していれば何でもアリ、とすることで、専門とする分野に即した立場から、議論の焦点が甘くなると指摘する意見もあります。しかし、大学機関や、専門領域ごとに分断され、個別に議論されてきた「カンボジア」をより広い俎上において討議すること（すなわち、“学際的”な環境で議論すること）で、同時代のカンボジアの人びとの生活、歴史経験、そして将来の道に関する理解の活性化が期待できる、と私は確信しています。

この研究会は、冒頭でお知らせしたように、実体としての組織をもちません。参加者が共有するのは、メーリングリストとブログページ

(<http://cambodianstudies.blogspot.com/>)のみです。このような組織形態は、システムとして定点を見出しがたい現代社会に適しているといえますが、課題もあります。それは、以上に述べてきたような「姿勢」を、核としていかに共有し、維持させるか、という問題です。この点では、一年に最低一度は開かれる「研究会」での、真剣なエネルギーのぶつけ合いこそが力となります。「カンボジア研究の全体像」を明らかにする作業とさきにも書きましたが、それが、一回の研究会で達成できることは到底ありません。「継続は力なり」をモットーに、これから一年一年、着実に活動を続けていければと思います。

この研究会に関心をもたれた方は、ぜひ、ブログページをチェックしてみてください。毎年の「研究会」の情報も、そこにお知らせが載ります。どなたでも参加可能ですので、お気軽にお問い合わせください。

【小林知（こばやし・さとる）】

1972年生まれ。1998年から2002年までカンボジアに長期滞在し、農村で住み込み調査を実施。ポル・ポト時代以前からのカンボジアの農村社会の変化を、生業と仏教実践を軸に追っている。最近、タイやベトナムのカンボジア人にも関心を広げつつ、1990年代の市場経済化がカンボジア社会にもたらした変化を総合的に捉えようとしている。

思い出のカンボジア～1959年から1962年ごろ  
までの良き時代を振り返って～

川瀬 生郎

## 1. カンボジアとの出会い

[はじめに]

1959年7月から1962年7月までの3年間、私はコロ  
ンボ・プラン派遣日本語教育専門家としてプノンペン  
に滞在しました。コロンボ・プランというのは、南ア  
ジアや東南アジア地域の経済開発を推進するために  
1950年にコロンボで開かれた英連邦外相会議で提唱さ  
れ、翌年発足した経済協力機構のことで、コロンボ計  
画とも言います。日本は1954年に加盟して、この地域  
の開発途上国に様々な援助をしてきました。私が赴任  
したころのカンボジアは、長いフランスの植民地統治  
からの独立を果たしたシハヌーク殿下の指導の下に、  
近代国家への道を歩みはじめたばかりの平和な良き時  
代でした。この地に27歳の若さで派遣された私は貴重  
な経験を得る機会に恵まれました。

ここでは、当時の学生たちのこと、日本語教育のこ  
と、アンコール遺跡解説案内書作成のことなどを、個  
人的感想を混じえながら述べたいと思います。

### (1) 国際学友会と来日カンボジア留学生

[新前日本語教師になって]

当時私は、外務省外郭団体の財団法人国際学友会日  
本語学校の専任教員をしていました。国際学友会は  
1935年に近衛文麿を会長に迎え設立された留学生世話  
団体です。太平洋戦争の始まる前から東南アジアを中  
心に世界各地からの留学生の世話と日本語教育を実施  
してきました。同会日本語学校は、行政改革の一環と  
して2004年に、日本学生支援機構東京日本語教育セン  
ターになりました。私が国際学友会に勤務したのは、  
1955年4月で、東京大学文学部を卒業してすぐの時  
でした。恩師である国語学者時枝誠記教授の推薦による  
ものでした。新前(新米とも)日本語教師の私は、主任  
教授の鈴木忍先生はじめ先輩教員の指導を受けながら、  
無我夢中で仕事に取り組んでいました。

[若き留学生との出会い]

その頃私が教えた学生は、タイ、ベトナム、インド、  
ビルマ、インドネシア、カンボジアなどからの私費留  
学生、政府派遣留学生・技術研究生が主でした。その  
ほか、アメリカ人や在日大使館員の家族などもいま  
した。本誌第2号(2009年11月発行)に寄稿された岩増弘  
三氏の「古き良きカンボジア」の中に出てくるゴーホ  
ンブー君は、通信技術研究を目的に来日した私費留  
学生でした。私が日本で最初に出会ったカンボジア人  
でした。記憶に間違いがなければ、確か同君は明電舎で

研修を受け、日本人と結婚して帰国したはずで  
す。王族の血を引くノロドム・キリラット君もその頃来日  
した私費留学生です。音楽研修が志望で、新宿大久保の  
声専音楽専門学校にギターを携えて通っていました。  
歌手三橋美智也の大ファンだそうで、文字どおりの遊  
学と見受けられました。

[カンボジア政府派遣留学生]

カンボジア政府が計画的に政府派遣留学生や技術研  
修生を送ってきたのは1956年ごろからだったと思いま  
す。工業技術院名古屋工業試験所で窯業を研修したタ  
ルン君、同じくゴーエンライ君、群馬で織物技術を習  
得したエンリーセン君、産業振興を学んだリーギー  
リャン君等の若者たち、新宿の国立病院でレントゲン  
技術を学んだ医者の子サムディ氏、カンボジア地理  
局の地図作成技師等、シハヌーク殿下の指導する近代  
化推進政策の下に、多くの学生・研修生が次々と国際  
学友会の門をくぐりました。希望に満ちた彼らの瞳と  
熱心に日本語を学習する姿を見て、私は教える喜びを  
ひしひしと感じました。だれだったか忘れましたが、  
アンコール遺跡バイヨン寺院の観世音菩薩四面像の写  
真をくれた人がいました。名刺判ぐらいの小さな白黒  
写真でした。カンボジアの有名なところだと説明さ  
れても、アンコール遺跡の「ア」の字も知らなかった私  
には何の写真なのか、見当も付きませんでした。

### (2) カンボジアへの赴任

[羽田空港からの出発]

国際学友会では、主務官庁の外務省と相談し日本語  
学校の教員をアジア各地の新興国に派遣する計画を検  
討していました。当初は、私をインドネシアに、慶応  
大学大学院出の同僚教師伊藤芳照氏をタイに派遣する  
予定でした。近い将来の派遣に備えて、私はインドネ  
シア語を、伊藤氏はタイ語を、それぞれ勤務終了後に  
学んでいました。ところが、急にカンボジア行きの話  
が持ち上がり、その候補者として私が指名されました。  
急遽インドネシア語学習をフランス語学習に切り替え、  
お茶の水のアテネ・フランセに通ったり、あるフラン  
ス人に個人教授を受けたりしました。フランス語は大  
学の第2外国語で履修しただけだったので、まったく  
自信がありませんでした。伊藤氏も当初予定された  
タイ派遣の前にインドネシアからの要請があり、先ずは  
インドネシアへ赴任することになりました。予定はあ  
くまで予定、人生何が起こるか分かりません。

それはさて置き、冒頭に記したように1959年7月に  
家族や国際学友会の教職員大勢に見送られて羽田空港  
を出発しました。生れ育った東京を長く離れ、一人で  
暮らすことになる不安と、初めての海外生活に対する  
期待が入り混ざった落ち着かない妙な気持ちで機内の  
人となりました。搭乗した航空機はエアフランスで  
したが、当時もプノンペンまでの直行便はなく、途中マ  
ニラを経由して、ベトナムのサイゴン(現ホーチミン  
市)でベトナム航空に乗り換えなければなりません

た。サイゴンに着いたのは夕方暗くなってからで、外国初めての夜を、いかにも伝統のありそうな古い大きなマジスティ・ホテルの一室で過ごしました。まんじりともせぬ一夜を明かし、乗り遅れたら大変と、翌朝早くにタクシーで空港に駆け付けました。

#### [プノンペン・ポチェントン空港での困惑]

乗客もわずかなベトナム航空の双発プロペラ機が、プノンペン・ポチェントン空港に着いたのは朝8時過ぎでした。日本大使館からの出迎えがあるはずでしたが、だれも来ていませんでした。後で聞いたところでは、何か連絡の手違いがあったとのこと。小さな空港は最近改修したばかりのようでしたが、空港バスもタクシーもなく、手続きを終えた客はそれぞれ迎いの車で姿を消していきました。大使館に電話をしようと思いましたが、電話ボックスも見当たりません。もちろん携帯電話などない時代のことです。係員に聞くと電話は航空関係専用のものでしかないとのことでした。困り果てていると、幸い航空関係従業員を市内に運ぶマイクロバスが出るとのこと、便乗させてもらい大使館に無事着くことができました。

### (3) 元留学生の帰国後の状況

#### [各分野で活躍する元留学生たち]

日本留学を終えて帰国した元留学生・研修生の内、私の知る何人かの消息・状況を記しておきましょう。彼らの多くは、近代化促進の若き技術者、時代を担う知的エリートとしてシハヌーク政権に迎えられ、政府関係機関の主要なポストに就きました。前述のゴーホンブー君が情報省所管の通信放送関係の技術者として活躍したことは、岩増弘三氏が本誌第2号で述べられたとおりです。

ヤンリーセン君は、コンボン・チャムに中国の援助で新設された織物工場の工場長に就任しました。小柄で丸顔の同君は、いかにもやり手という感じの青年で、自信に溢れているようでした。

リーキーラン君は帰国してしばらくの間は産業省に勤務していたようですが、クラチエ州に中国の援助で創られた製紙工場の責任者に迎えられました。彼は提供された現地の官舎まで、公用車で私を案内してくれました。公用車といっても、それはソ連製のごついジープでした。ジープでなければ通れないような未舗装の道や泥沼のような湿地帯を抜けて行かなければならなかったのです。途中彼は、思ってもみない辺境の地に転出させられた不運を嘆いていました。小さな村で休憩した時、彼が用意してきたアメリカ製の清涼飲料水セヴン・アップを飲みながら、孵化しかけた雛の入ったあひるのゆで卵、ポンティアコンを私は初めて食べました。この卵はプノンペンの中央市場でも売っていましたが、たいていの日本人は気味悪がって食べませんでした。それはともかく、案内された工場では、クラチエ州に産出する竹を原料に藁半紙のような粗末な紙を生産していました。中国援助でできた工場へソ

連製の車でカンボジア人が日本人を案内するということは、この国の置かれた国際関係の構図を如実に示しているのではないかと思います。

#### [メコン河での想い]

帰途は、メコン河に面するクラチエの波止場から、一人定期運行船に乗りプノンペン王宮近くの波止場まで帰りました。船はディーゼル・エンジンでスクルーを回す古びた貨客船でした。大きな荷物を甲板に積み上げる半裸の男やら、生きた鶏を数羽縄で繋いだ黒衣の女やら、山型のベトナム編笠を被ったアオザイ姿の若い女性やら、自転車を船中に持ち込む人などで、船内は喧騒を極めていました。やがて船が出航して時間が経つに連れ静けさが戻ってきました。

メコン河は、神々の住むと言われるヒマラヤの山中・チベット高原に源流を発し、中国、ラオス、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムを経て南シナ海に注ぐ大河です。悠然と流れるこの大河メコンの波を見詰めながら、私はこの国が将来どうなっていくのか、一人思いやっていました。

#### [ケップの海岸とカンポットの森で]

ゴーエンライ君はカンポットの煉瓦工場長に就任しました。自宅に招いてくれた彼は、カンボジア随一の景勝地ケップの海岸を案内してくれました。水着など用意していなかった私に、サロンと呼ばれる格子柄の男性用腰巻を巻かせて、海へ導いてくれました。腰巻を巻いたのは生れて初めての経験で、ちょっと恥ずかしく感じましたが、慣れてくると快適なものです。またライ君は、カンポットの森へ鹿を打ちに連れて行ってくれたこともあります。この時は、日本大使館の今川幸雄氏(当時外務省の理事官・語学研修生、後にカンボジア大使)も同行しました。深夜森の中を歩む我々の前後には鉄砲を持った軍人が付き添ってくれました。残念ながら、この時は賢い鹿たちに逃げられ、馬鹿をみたのは私たちでした。

#### [日本に亡命したライ君]

プノンペンでは、奇遇というか幸運というか、ゴーエンライ君の次兄に当たる方がカンボジア文部省の役人をしており、公私にわたり私の面倒をみてくれました。私の身分証明書を作成してくれたのも彼です。カンボジア語の個人教授を引き受けてくれたのも彼です。さて、ゴーエンライ君はその後、カンボジア内戦が始まると日本に亡命し、しばらく日本に滞在して、高級ホテルのレストランでアルバイトなどをして過ごしていました。戦乱が激しくなると帰国を諦めてフランス・パリへ渡りました。パリには反クメール・ルージュの組織があるとのことでした。おそらくその組織に入ったものと思われませんが、その後の消息は分かりません。元日本留学生のほとんどが内戦で、クメール・ルージュに殺害されたり、行方不明になったとのことですが、彼は生き残った数少ないエリートの一人でした。

[保健大臣になったお医者さん]

医者のみーサムディ氏も生き残った一人です。彼はプノンペン市のモニボン通りにあった中華病院の近くに居を構え、保健省に勤めるかわら自宅でも診療業務をしていたようです。後に、ヘンサムリン政権の保健大臣に就任したということです。

## 2. カンボジア最初の日本語教育

カンボジア政府が組織的な日本語教育を開始したのは、1959年7月、私の着任を待ってからです。実際に授業を開始したのは学校側の都合で9月になってからでした。その間私は文部省へ何度も出向き、担当官と基本的なカリキュラムの作成、受講生と授業時間、教材等について検討・調整を行いました。

私が担当した日本語講座は、①リセ・プレア・ユーカントール高校、②コレージュ・プレア・ノロドム女学校、③在カンボジア日本国大使館主催日本語講習会の三つの講座です。帰国後の1962年7月に関係機関に出した古い報告書の写しが手元に残っていたので、それを参照しながら概略を記しておきます。

なお、カンボジアの学校制度はフランスの制度を踏襲して、初等教育6年、中等教育前期課程4年、中等教育後期課程2年、大学予科1年となっていました。そして、中等教育前期課程4年制の学校を「コレージュ」、前期課程から後期課程と大学予科までの7年制の学校を「リセ」と称していました。当時、総合大学は1校もなく、官吏養成のための法科大学と医者育成のための医科大学の二つの単科大学と、僧侶の研修機関である仏教大学がただけでした。

### (1) リセ・プレア・ユーカントール高校における日本語講座

[日本語講座開設の経緯]

リセ・プレア・ユーカントール高校(以下ユーカントール校と略す)に日本語講座が設けられた理由は、カンボジア文部省が1959年に発表した新カリキュラムに基づいて、中等教育課程で第1外国語のフランス語のほか、第2外国語として英語またはその他の現用語の一つを履修することが決定されたことによります。英語はすでに正規授業時間に取り入れられていましたが、この決定によって、この年からロシア語、ドイツ語、中国語、日本語が自由選択科目の課外授業として開始されました。当初は、プノンペン市の中心部にある伝統校のリセ・シソワット高校で開講される予定でしたが、どうした訳か分かりませんが、ロシア語のみが予定どおりシソワット校に設けられ、他の3外国語はユーカントール校で授業が開始されました。ドイツ語と中国語の講座は、受講者の減少、脱落を理由に翌年廃止され、日本語講座だけが長く存続し、定着しました。ユーカントール校は、1957年に4年制のコレージュとして創設されたものですが、1961年から7年制のリセに昇格しました。

[受講生、授業内容などについて]

次に、受講生、授業時間、使用教材、授業内容について記します。

受講生は、リセ・シソワット校、リセ・ユーカントール校、リセ・サンクムネアストルニジュール校の3校から選ばれました。この国立3校の外に、特に許可を受けた私立校の者も若干いました。当初は、受講希望者が300人ほどいるとのことでした。講師は私一人だけなので、とても対応できる人数ではありません。文部省と交渉して人数を絞るように求めました。担当官は「せっかくの希望者を選別するわけにはいかない。心配する必要はない、授業についていけない者はかまわず落としてよろしい、すぐ人数は減るだろう」と応えました。妙な平等主義とフランス流エリート教育の考え方によるものかと私は思いましたが、それ以上の議論はしませんでした。受講者の数は、文部省担当官の言うとおりに、開講2か月後には半減しました。なかには、珍しい日本人の顔見たさに来たと思えないような者もいました。

[おんぼろ中古車を入手して]

学校の所在地は、モニボン通りを南下した市の外れにありました。夕方には、校庭に大きな蚊柱が立つような場所でした。私は最初のうちは、シクロと呼ぶ人力三輪車でホテルから通っていましたが、やがて電動モーター付き自転車を使うようになりました。その後、カンボジア自動車免許証を取得し、フランス製のおんぼろ中古車、シトロエン・オンズシュボウ(11馬力)を入手して、颯爽と通勤しました。これで私は、外国人講師の面目が維持できたと内心密かにほくそえんでいました。

[ノート代わりに石板を使う子供]

貧しい家庭の子供はノートが買えないのでしょうか、教室に石板を持ってくる者もいました。石板というのは、黒くて硬いノートぐらいの大きさの石板に蠟石の棒で文字を書く道具です。布で拭けば字が消え、石板は何度でも使えます。日本でも明治・大正時代までは、一部の子供たちの間で文字練習や遊び道具として使われていたようです。雨季になると、降雨を理由に遅刻したり、欠席したりする者もいました。一般に雨傘をさす習慣がないようでした。スクールも少し待てば止むし、濡れた衣服もすぐ乾いてしまうからでしょう。

リセ・シソワット校の学生コンタン君は、国際学友会の『ISI月報』(1960年11月号)に、「にほんのみなさんがみをください」という題で、文通を求める日本語の手紙を送っています。

参考までに、1961年度の7月開講時と3月修了時のクラス別受講者数を記します。クラスの名称は、習熟度別に便宜的に付けたものです。上級:3人-2人、中級:22人-12人、初級A:79人-18人、初級B:71人-17人、計:178人-49人です。修了者は開講時の三分の一以下に減りました。

[開講2年目に講師が増員される]

開講2年目の1960年度からは、山田基久氏がやはりコロポプラン専門家として着任し、講師が2人になりましたので非常に助かりました。山田氏は日仏学院の卒業生で、フランス語は並ぶ者がいないほど達者でした。本誌創刊号(2009年8月発行)に寄稿した歌手の山田里香さんの父君です。

授業は、月曜から金曜の放課後に行われ、各クラス1週3時間でした。学校は、最も暑い4月から6月まで夏季休暇に入ります。この時期には日中の最高気温が40度以上になることもあります。それに各種祝祭日の休みが多いので、各クラスの年間授業時数は90時間から100時間程度にしかありません。授業効果を効率的に得るためには短期集中教育方式が良いとされますが、とても理想とは程遠い条件でした。それでも、最後の上級クラスまで熱心に受講する者もあり、それなりの成果を得ることができました。

使用教材としては、国際学友会日本語学校編『よみかた』、同『日本語読本巻一』を使用しました。授業内容は、初級では日常会話を主とし、日本語の基本文型に習熟させると共に、仮名文字を習得させました。中級では基本文型をより広範に習得させると共に、平易な文章を正確に読む力、書く力を養うことに意を注ぎました。上級では当用漢字約300字を習得させ、読み書き能力、作文能力を高めることに努めました。

(2) コレージュ・プレア・ノロドム女学校における日本語講座

[伝統ある唯一の国立女学校]

コレージュ・プレア・ノロドム女学校(以下ノロドム校と略す)は、古い伝統を有する唯一の国立女学校でした。場所はプノンペン市の中央部にあり、ノロドム通りに面した広い敷地を有していました。校門を入ると、美しい花壇と国旗掲揚台のある中庭を囲んで、校舎が建てられていました。校舎の裏手には地方出身者のために寄宿舎が設けられ、その周囲にはバナナの木や椰子の木が植えられていました。敷地の四周は道路に面していましたが、黄土色の漆喰で固めた高い塀に囲まれて、外部からは中の様子がまったく分かりませんでした。まさに「隠れた女の館」といった趣でした。生徒のほとんどは、徒歩通学か自転車通学でしたが、中には車で送り迎えされる者もいました。

[日本語講座開講の経緯と受講生]

当初は本校の生徒も、ユーカントール校で日本語を受講することになっていましたが、受講希望者の増加と女子生徒の立場を考慮して、1961年度から本校でも日本語講座を開設することになりました。受講生はノロドム校の女子生徒のみに限られました。本校でもユーカントール校の場合と同じく、開講日には教室に溢れんばかりに詰め掛けた生徒が、2・3か月後には激減しました。参考までに1961年度の開講時の受講者数と

修了時の数を記しておきます。クラス初級A:80人-11人、初級B:22人-10人、計:102人-21人でした。小人数クラスになっただけ学習効果が上がったのは間違いありません。きらきらと輝く可愛い目をしたあの女学生たちは、その後どうなったのでしょうか。

授業時間、使用教材、授業内容等はユーカントール校の場合とほぼ同様です。

(3) 在カンボジア日本国大使館主催日本語講習会

[ベランダ教室から会議室へ]

本講習会は、一般の日本語学習希望者を対象に、1959年8月に開講されました。会場は当初、日本人会が借り上げていた一戸建て住宅の広いベランダを臨時の教室として使用しました。間もなく日本人会は、中央市場西側のモノボン通りに新築されたビルの中に移ったので、講習会の会場もそちらに移動しました。日本人会の部屋は、広い会議室と囲碁将棋などのできる談話室などからなっています。談話室にはバー形式のカウンターも置かれ、商社員や滞在者がくつろいで過ごすことができました。講習会の教室には会議室が当てられました。蚊の襲撃に悩まされたベランダ教室とは雲泥の差でした。

[様々な受講生]

受講者には、日本との貿易に従事する華僑、日本商社に勤務する者、日本留学希望者、新聞記者、工員など、種々の職業に携わる者がいました。当時プノンペンにあった日本商社は、三井、三菱、住友、日綿、伊藤忠、鹿島、大南公司など大手・中堅合わせて12、3社ぐらいでした。ほとんどの商社が日本人駐在員を一人置くだけで、現地の若い人を1、2名雇用して仕事をしているようでした。受講生の国籍は、中国、ベトナム、カンボジアの3カ国ですが、中国系がほとんどでした。年齢も10代から50代にまでわたっていましたが、20代の青年男女が多くを占めていました。1961年度の開講時と修了時の受講者数は次のとおりです。クラス上級:8人-8人、中級:20人-16人、初級:45人-25人、計:73人-52人でした。この数値から、カンボジア学校の講座に比べ、脱落者が格段に少ないことが分かります。その理由は、漢字系の中国人が多かったことも一つの要因でしょうが、なんと言っても各受講者の学習に対する強い動機付けと旺盛な意欲、それに熱心な学習態度があったからだと思います。

[授業時間、授業内容とその成果など]

授業時間は月曜から金曜までの夜間7時半から9時半まで、各クラス1週3時間ずつ行いました。使用教材は国際学友会編日本語学習書を用い、初級は『よみかた』、中級は『日本語読本巻一』、上級は『日本語読本巻二』を主教材としました。授業内容は、初級はユーカントール校初級と同様、中級はユーカントール校上級と同様、上級では当用漢字約800字を提出し、日本語の手紙・電報文の書き方、電話のかけ方など実

用面の指導もしました。この講習会では授業の進度も内容も、私が予定したとおりにほぼ行われ、期待した効果を上げることができました。1959年度の第1期生が初級を修了した折に、日本大使公邸でお祝いのパーティが行われました。その折受講生たちが、大使館員の方々と片言ながら日本語で会話を交わしたり、謝辞を述べたりしました。大使はじめ館員の方々は「短期間によくもここまでできるようになったものだ」と感心していました。

#### [受講生の消息]

受講生の多くは、悲惨なあの内戦で犠牲になったものと思われまふ。生き残って日本に逃げ延びたり、難民として来日したのはごくわずかな人です。私の知る何人かのその後の消息を次に記しておきます。

#### [東京本社で研修を受けたチャンキンビン君]

1期生のチャンキンビン君は日本商社丸紅飯田に勤務していました。日本語講習会を受講した時は弱冠18歳、紅顔の青年でした。日本語の上達は同期生の中で一番でした。丸紅の事務所では日本語文書の解説や翻訳もできるようになったと駐在員の方から聞いたことがあります。後に、東京本社から研修の名目で招かれ来日したこともあります。内戦後の消息は不明です。

#### [難民センターで通訳をしたチャウトウラップ君]

チャウトウラップ君は東京銀行プノンペン事務所に勤めていました。内戦を逃れて生き残った者の一人です。彼は難民として来日し、神奈川県大和の難民センターに収容されました。その時、何年ぶりかで彼と会いましたが、やせて青白い顔をしていました。何かにおびえているようで、人が変わったような印象を受けました。難民センターでは、日本語ができる唯一の難民ということで、日本語通訳をしたり、難民たちの日常生活の面倒をみたりしたそうです。その後、伝手を頼ってオーストラリアに移住したとのことでした。

#### [日本人会のボーイ、ディエップホーネン君]

ディエップホーネン君は日本人会のボーイをしていました。日本人会の各部屋を掃除したり、会員に回覧板を届けたり、種々の雑用をこなしていました。最初は教室の後ろの方で聴講していたのですが、2期生として正式に応募しました。片言の会話ができるようになると、明るい性格の彼は日本人駐在員からも可愛がられるようになりました。日本大使館の援助を受けて、講習会受講者のためのバス旅行を毎年行ないましたが、ケップ海岸往復の大型バスの借り上げや、屋根上への荷物の積み込み等は、彼が率先してやってくれました。事の真偽は詳らかではありませんが、内乱が起こると、彼は集金した日本人会の会費をすべて持ち逃げし、クメール・ルージュ側に入ったとのことでした。

#### [180キロの道を歩いて逃げたヨーアインさん]

2期生のアインさんは、大使館員のお手伝いさんをし

ていました。代々の参事官や書記官などの家庭で家事を任されていました。真面目で誠実な人柄と上手な料理の味が好まれたのでしょう、どこの家庭にも信用され、長く勤めていました。受講前には、日本語は挨拶と簡単な応答しかできませんでしたが、熱心な学習の結果でしょう、日本語の習得には目を見張るものがありました。彼女は、クメール・ルージュにプノンペンを追い出され、隣国サイゴンまで約180キロの道を歩いて逃げ延びました。そして、やっとの思いで日本にたどり付き、今川幸雄氏の世話で秋葉原の大手電器店に就職することができました。私は彼女の在日保証人を引き受けました。

#### [日本姓に改名したタンシーフォン君]

アインさんが来日したころ、同期生のタンシーフォン君も日本へ逃れて来ました。彼は電気関係の仕事をしていました。赤い糸の結び付きでしょうか、同君はアインさんと日本で結婚しました。やがて二人は、日本国籍を取得し日本名に改姓して、現在千葉県松戸市に住んでいます。

#### [新聞記者だったリーフッケン君]

リーフッケン君のことは、どうしても記しておかなければなりません。同君はカンボジア中国新聞の記者をしていましたが、日本のことが知りたくて講習会を受講しました。私がアンコール遺跡に興味を持ち、次項で述べるような解説書の執筆を始めたのを知ると、ちょうどその頃中国新聞に連載された「真臘風土記」(新聞での標題は「真臘風土誌」とある)の切り抜き原文を、A5判の紙6ページに貼り付けた手製の冊子にして、寄贈してくれました。「真臘風土記」というのは、アンコール王朝時代、西暦1295年に中国元朝が派遣した使者の随行員、周達観が記した貴重な記録です。周達観は当時「真臘(チェンラの漢字音訳)」と称したカンボジアに3年間滞在し、見聞した風土・国情・城郭・産業・人物等について詳しく記しています。私は初めてその内容に接し、欣喜躍動したのを今でも覚えています。

頭脳明晰なリーフッケン君は日本語がみるみる上達し、成績は優秀な受講生の中でも一・二を争うほどでした。日本大使館は、彼の人柄と日本語能力を見込んで、情報文化担当の助手に採用しました。しかし、あの内戦で彼も追われる身となり、日本に亡命してきました。彼も今川氏の世話で、香港領事館に一時臨時雇員として勤めましたが、その後台湾の交流協会事務所の現地採用職員となり、定年まで勤務しました。彼も日本語講習会の受講生と結婚した一人です。相手は次に述べるウーチーランさんです。

#### [良妻賢母型のウーチーランさん]

3期生のウーチーランさんは、リーフッケン君と結婚しました。彼女は、日本語はあまり上手になりませんが、物静かで親切な人です。良妻賢母型の女性と

いっていいでしょう。後に、私が台湾の東呉大学大学院で客員教授として講義を担当した折には、交流協会に勤務していたリー君と夫婦そろって宿舍まで来てくれ、買物の世話や市内の案内をしてくれました。台北市の北部にある陽明山の温泉で、リー夫妻と楽しい一日を過ごした思い出は忘れられません。リー君は定年後、お子さんの住む米国に夫妻共ども移住し、家族幸せに暮らしています。

### 3. アンコール遺跡解説案内書の作成

#### (1) 解説案内書作成の経緯

##### [芳賀大使の勧め]

今川幸雄、山田基久両氏と私は、アンコール大遺跡群の魅力にとりつかれ、暇さえあればシヤムリアップを訪れていました。私は10数回アンコール遺跡群に足を運んだと思います。1961年10月ごろ、当時の在カンボジア芳賀四郎大使から「三人で協力して日本人旅行者のための案内書を作ってはどうか」というお話がありました。怖いもの知らずの私たちはさっそく分担を決めて執筆に取り掛かりました。第1章から第4章まで、カンボジアの国土・住民、歴史、遺跡群概略については今川氏が、第5章・第6章のアンコール・ワット、アンコール・トムは川瀬が、第7章・第8章の小回りルート、大回りルートの諸遺跡と第9章バンティヤ・スレイ、バンティヤイ・サムレイは山田氏が、第10章ロールオスの遺跡群は川瀬が、付章のラーマーヤナ物語と叙事詩マハーバーラタは、それぞれ川瀬と山田氏が担当することになりました。

##### [資料集めと現地調査]

今川、山田、川瀬の三人は、それぞれ参考資料の収集と入念な現地調査を行いました。私はプノンペン中央市場の近くにある大きな書店の本棚を漁り、アンコール関係の書籍をほとんど購入しました。また、プノンペンにある国立図書館に通い、フランス人学者の著作を辞書片手に読み漁ったりしました。資料調査に際しては、フランス語の達者な山田氏から多くの教示を得ました。今川氏は仏教図書館に通ってカンボジアの歴史や宗教について調べていました。

##### [専門研究者からの助言と励まし]

その頃プノンペンを訪れたサンスクリット語の権威であるインド学研究者の平等通照先生と、東京国立博物館美術課長(当時、彫刻室長)の千沢楨治先生からは、種々の御助言・御教示をいただきました。

平等先生は、「アプサラ」は正式には「アプサラス」と言うべきだ等々、神々の名称やサンスクリット用語について指導してくださいました。平等先生は第2次大戦中タイ国バンコクで日本文化会館の館長もしていた方で、戦争中は日本語教育にも関与したとのこと。千沢先生からは、石造建築の装飾浮き彫り紋様の美術的価値等について教えていただきました。

両先生から親切な御指導と温かい励ましの言葉をいただいて、私たちは調査研究の意欲をいっそう高めました。

#### (2) 現地調査とその成果

##### [人身事故ならぬ牛身事故]

山田氏と私は教育関係の仕事をしていたので、学期末などにまとまった長い休暇をとることができました。その機会を利用して何度もいっしょにアンコールの地を訪れ、遺跡調査に専念することができました。

現地調査のため、山田氏の所有するフランス製の中古車シトロエン・キャンズシュボウ(15馬力)で、国道6号線をシヤムリャップへ向かっていた途中のことです。プノンペンからシヤムリャップまでは315キロ、車で約6時間ほどの行程ですが、途中大きな都市はコンボン・トム市があるくらいで、小さな町や村落を除けば、なにもない原野と田圃を左右に見ながら走るだけです。

地平線のかなたまで、どこまでも一直線の道路を時速100キロで走る車の遙か前方に、突然黒い小さな影が見えました。あつと言う間に、その物体は大きくなりました。それは水牛でした。道の真中を悠然と歩いていたのです。急ブレーキを掛けたので車は停止寸前でしたが、間に合いませんでした。ドスンという鈍い音がして水牛にぶつかってしまいました。人身事故ならぬ牛身事故です。水牛はしばらく道路に倒れていましたが、やがて遙かかなたに見えるニッパ椰子の方へ、荒野をとぼとぼと歩き出し、いずこともなく姿を消してしまいました。この間、人っ子ひとり姿を見せませんでした。当方の車はいかにと、ボンネットを開けてみるとラジエターがへこんで、水がポトポト漏っていました。幸いエンジンは無事で車は走行が可能です。途中とところどころで冷却水を補給しながら、シヤムリアップの修理工場にたどり着くことができました。

「牛に引かれて善光寺」という言葉がありますが、こちらは「水牛を倒してアンコール詣で」というお粗末な話でした。

##### [人影まばらなアンコール遺跡]

カンボジア正月や特別な祭日を除いて、アンコール遺跡群で人影を見ることはほとんどありませんでした。早朝か夕方に黄色い衣をまとった僧侶や、線香と供花を捧げる人の姿を見ることはありましたが、その外の人に会うことはめったにありませんでした。たまにアンコール・ワットやアンコール・トムで、カメラを持った外国人観光客と出会うことはありましたが、少し離れた遺跡ではこのような観光客もまれでした。旅行会社が、ツアーを組んで大型バスで乗り付けるなどといったことはまったくありませんでした。アンコール・ワットが世界文化遺産に登録されてから急激に観光客が増え、現在は年間200万もの人がこの地を訪れるといえます。

当時私は、だれも通らない静かなアンコール・ワット第一回廊東面南側の浮き彫り「乳海攪拌」の前に一

人佇み、静かに天地創造の神話に想いを馳せる至福の時を得ることができました。

[参道に這いつくばって]

調査といっても素人がやることですから、たかは知れています。持参したのは、巻尺と懐中電灯、カメラと三脚、メモ帳とフランス人研究者の作成した小型案内書ぐらいのものでした。山田氏は手製の写真撮影用銀板も用意しました。汗を流しながら参道に這いつくばって石畳の長さを図ったり、回廊隅の暗い天井裏を懐中電灯片手に覗きこんだりもしました。このような姿を見る人がいたら、滑稽に感じたり不審に思ったりしたかも知れません。当時は、警備員も遺跡係員もいなかったもので、不審尋問などに会うことはありませんでした。

[「乳海攪拌」もう一つの図を発見]

私にとっては、いろいろな発見がありました。発見というのは、そのことにだれも気が付かなかっただろうと思われることに遭遇することです。例えば、アンコール・ワット第一回廊南西隅、十字型回廊の北側西部(窓の上部)の薄暗い壁面に、あの「乳海攪拌」の図が描かれていたことです。懐中電灯で狭い壁面を探さねば見つけられないような場所です。この図の天空には、対称的な位置に日月が描かれています。第一回廊東面南側の壁面 50 メートルにおよぶ有名な浮彫りの方は、何万もの人が見たでしょうが、こちらの図を見た人はこれまでいなかったのではないかと思います。

[石造建築工事現場の図を 2 箇所で見発見]

アンコール・トムの中心部にあるバイヨン寺院第二回廊西面南側でも珍しい浮彫りを見つけました。それは、寺院建築の様子を描いた図です。石に綱を付けて引っ張る石工、やぐらを組み、挺子の原理を応用して石を積み上げている人の図です。巨大な石造遺跡の建築過程を知る上で貴重な図です。建築の工事現場とその過程を描いた浮彫りは、この壁面と第一回廊西面南側の 2 箇所にしかありません。第一回廊の浮彫りは、腹のつき出た棟梁が石工たちを指図している図です。削られた石は綱で引かれ、やぐらにつるして積み上げられています。ピラミッド型に積み上げられた石に彫刻をほどこしている職人もいます。仕事をなまける石工は棟梁に腕をとられ、罰を受けています。

今では多くの方がこの浮彫りを見ているでしょうが、当時その存在に気がついた人はほとんどいなかったのではないのでしょうか。

[森本右近太夫のもう一つの遺筆]

アンコール・ワット第一回廊と第二回廊の間にある正面中回廊、千体仏の置かれた西側の石柱に有名な森本右近太夫の墨書が残されています。私が見つけたもう一つの遺筆は、第一回廊と第二回廊に囲まれた中庭、寺院正面に向かって左側の経蔵にあります。遺筆は経蔵南側階段を上った入口左側の壁面、胸の高さの位

置にあります。どちらの遺筆も筆跡・内容共に同じです。肥州の住人森本右近太夫は、寛永 9 年(1632 年)正月三十日にこの地を訪れ、父の菩提を弔い老母の後生を祈るため、仏像 4 体を奉納したことを 12 行(1 行 17, 8 字)にわたり記しています。ところどころ欠損したり判読しにくい箇所もありましたが、墨書の趣旨・内容は十分理解できました。

[「落書き」は止めましょう]

最近のアンコール遺跡案内書の中には、「森本右近太夫の落書き」と紹介したものがあります。この「落書き」という言葉が気になってしかたがありません。落書きといえば、暴走族や一部の悪童連が町の看板や電柱に書きなぐったものを思い浮かべます。書いてはいけな場所は無断で書き残した点では、右近太夫の遺筆も落書きには違いありません。江戸時代には「落書(らくしょ)」とか「落首(らくしゅ)」という言葉がありましたが、これも現在の落書きとはニュアンスも用法も違います。「落書き」なら消されてしまっても文句は言えません。右近太夫は、17 世紀前半にアンコール・ワットを訪れた日本人がいたことを示す貴重な証拠を残してくれました。日本カンボジア交流史研究のためにも遺跡と共に長く残さなければならないものです。私は解説案内書の中で「遺筆」とか「墨書」という語を使いました。「落書き」は止めましょう。

#### 4. アンコール遺跡の解説案内書 3 種の上梓

今川、川瀬、山田の 3 人は、アンコール遺跡に関する次の 3 種の共著を刊行しました。

- ①『アンコールの芸術—カンボディア王国遺跡めぐり—』1963 年 11 月、大塚巧芸社(自費出版、非売品)
- ②『アンコールの遺跡・カンボジアの文化と芸術』1969 年 3 月、霞ヶ関出版
- ③『カンボジア民族の文化遺産・アンコールの遺跡』1996 年 4 月、ばんたか

この項では、これら著作の上梓についての思い出を記しておきます。

#### (1)『アンコールの芸術—カンボディア王国遺跡めぐり—』について

[自費出版、非売品の珍書]

本書は私が手がけた最初の著書として、最も思い出深いものです。上梓の時、今川、山田両氏はまだプノンペンに在任していましたので、編集・発行の仕事はほとんど私がやりました。A5 判 112 ページ、横書きの冊子です。写真や図を多く採り入れ、読者の興味をそるよう図りました。写真のほとんどは私の写した素人写真ですが、さすが美術印刷を得意とする出版社だけあって、巻頭の口絵写真など見事な出来栄でした。出版社を紹介してくれたのは、はっきり覚えていませんが、確か国立博物館の千沢先生だったと思います。綿密な現地調査に基づいて、詳しくアンコール遺

跡群を日本で紹介したのは、おそらく本書が最初だろうと思います。なお、奥付に発行年が昭和37年とありますが、これは38年の誤りです。この本は自費出版、非売品なのでお持ちの方はごく限られた人だろうと思います。好事家にとっては珍書と言えるでしょう。

(2)『アンコールの遺跡・カンボジアの文化と芸術』について

[海賊版の原本]

前書が好評だったので、市販してほしいという声が聞こえるようになりました。改訂増補し、より良い内容にして出そうということで、本書が作られました。体裁もB5変形判217ページ、縦書きとし、記述も図や写真も改めました。本書の写真は今川氏が主に追加提供しました。千沢先生が新たに序文を執筆してくださいました。これがまた評判となり、旅行社の案内書の記事などにも使われるようになりました。ところが出版元の霞ヶ関出版が、どういう事情からか倒産してしまいました。当然本書も絶版となったわけです。日本では主要な図書館でしか見ることができなくなりましたが、カンボジアでは発刊前後から本書の海賊版が出回り、今でも安く入手できるそうです。先日、アンコール遺跡の入口で本書を売っている子供から購入したという方にお会いしました。初めてその海賊版を見せてもらいましたが、原本に勝るとも劣らぬ立派な装丁でした。原本の表紙カバーには、アンコール・ワットの壁画浮彫り、ラーマーヤナ物語の戦闘場面を使用しましたが、海賊版ではアンコール・ワットの寺院全体を正面から写した写真が使われています。

(3)『カンボジア民族の文化遺産・アンコールの遺跡』について

[美しいカラー写真を採り入れて]

日本でも入手できない前書が、カンボジアでは海賊版として堂々と観光客に売られているとはどういうことかと、著作権もなにも無視している現地の状況に今川氏は憤慨していました。日本人が安心して購入できるようにしたいということで、新たに改訂増補した新版を出すことになりました。本書の編集・刊行はもっぱら今川氏の努力によります。四六判345ページとページ数も格段に増えました。前書での写真は表紙カバーを除きすべて白黒写真でしたが、本書では口絵には美しいカラー写真が使われました。巻頭には、ノロドム・シハヌーク国王、王妃夫妻の写真と、同国王から日本国特命全権大使今川幸雄閣下あての、本書刊行に対する謝意・序言が掲載されました。

## 5. 追記と謝辞

[あとがきにかえて]

初めての任地カンボジアでの思い出は、生涯忘れることができません。あんなことがあった、こんなこと

もあったと、次々に若き日の思い出が走馬灯の絵のように浮かんできます。現地で出会った数多くの方々からは、親切な助言・教訓をいただき、二度と得られぬ貴重な経験をしました。関係者の皆様に心から御礼申し上げます。最後になってしまいました。内戦で犠牲となった多くの方々の御冥福をお祈りすると共に、苦難を乗り越えて生き残った人の後生幸あれと切に願っています。

ところで海賊版の件ですが、現地で無断作成され、日本人観光客に売られていることを聞いて、最初は私も不快の念を禁じえませんでした。しかし、その胴元はどうあれ、売り子の貧しい子供たちにとっては、大切な収入源になっていることは間違いありません。私たちの本がそのような点で役に立っているとすれば、ありがたいことだと思います。またどんな形であれ、多くの人に著書が読まれることは執筆者として嬉しいことです。私たちの本は、限られた少数の人にしか購入してもらえないだろうと予測していました。もし将来、増版を重ね印税が入るようなことがあったとしても、その印税はすべてカンボジア支援のために寄付することにしよう、私たちは合意していました。

本稿は、波田野直樹氏のお勧めで執筆しました。内容も分量も制限しないから、昔のカンボジアのことを自由に書いてほしいということなので、思い付くままに記しました。何分にも半世紀も前のことなので、記憶違いや錯誤もあろうかと思えます。大方の御寛恕・御叱正をお願い申し上げます。貴重な紙面を提供くださった波田野氏には心から感謝いたします。どうもありがとうございました。

(2009年12月26日脱稿)

【川瀬生郎(かわせ・いくお)】

拓殖大学名誉教授。1932年東京に生れる。1955年東京大学文学部卒業、同年国際学友会に入り、1959年から1962年までカンボジア国立ユーカーントール高校、同ノロドム女学校、在カンボジア日本国大使館主催日本語講習会講師。その後、インドネシア国立パジャジャラン大学客員講師、国際学友会日本語学校副校長、東京外国語大学附属日本語学校教授、国立国語研究所部長を経て、1985年東京大学教授、1993年定年退官、同年拓殖大学教授、1994年同大学留学生別科長、1997年同大学大学院言語教育研究科教授・日本語教育学専攻主任、2002年台湾・東呉大学大学院客員教授。2003年拓殖大学定年退職、同大学名誉教授。  
著書：『アンコールの芸術』(1962)、『アンコールの遺跡』(1969)、『カンボジア民族の文化遺産・アンコールの遺跡』(1996)、『日本語教育学序説』(2001)等、著書・論文多数。

## 遠藤俊介さんの思い出

高瀬 友香

## &lt;出会い&gt;

遠藤さんに私が初めて会ったのは、2006年8月26日、「カンボジア勉強会」の会場でした。上野の閑静な住宅街にある旧市田邸で開かれているこの勉強会にぜひ行ってみたいと思っていたところ、友人のカンボジア人女性が来ませんかと誘ってくれたので、喜んで出かけました。

8月の蝉が鳴く天気の良い暑い日で、勉強会が始まり皆さん団扇を片手に熱心に聞き入っているところへ、遠藤くんがふらっと現れました。友人が「SHUNさんだよ」と、そっと私に教えてくれました。ああ、この人があのSHUNさん。「SHUN」という、カンボジア好きの人たちの間ではなかなか知られた名前を、私はインターネット上で知っていました。

遠藤くんのすぐ後ろに座っていた私は、大きな声、大きな体、オーバーアクションで話す彼の背中を見ながら「存在感のあるパワフルな人だなあ」と関心していました。この日本人ばなれしているともいえる人見知りしない明るさとおおらかさ、ユーモアを忘れない態度は彼の一番の特徴で、人懐こいけれどどこか繊細な少年っぽいところも持っていました。旅慣れた人特有の、力強い印象も。10代からずっと写真が好きで、旅行が好きで、カンボジアを知ってから知り合いをたくさんたくさんつくり、撮り続けられたのも、この人となりがあったからできたことなのかもしれません。

## &lt;発病&gt;

勉強会の後、上野駅前の大衆レストラン「聚楽台」で恒例の食事会がありました。道すがら遠藤君にネットで質問に答えてくれたお礼を伝えると覚えていてくれ、私の友人がもともと彼と仲良しだったこともあり、すぐに意気投合してカンボジアのNPOや教育問題について熱く話し合ったのをよく覚えています。

そのときふと、右手首の腫れ物を見せて「これなんでしょうね。2、3ヶ月前からできて、最近増えてきているんです。体調は元気なんですがね。」と言うのです。私は、すぐに大きい大学病院のようなところで精密検査をしてくださいとすすめ、彼も明日行きます、と言っていました。このときはまだ本人も、皮膚科の何かだろうと思っていました。それから1ヶ月間、検査しても病名がわからなかったのですが……。

私は飲食会での話の中で、SHUNではない「遠藤俊介」のことを知りましたが、自己紹介で「カメラマンです。でも、カンボジアしか撮らないカメラマンです。」と言った時の真剣な表情をよく覚えています。実際は仕事やプライベートでいろいろ撮っていましたが、彼の本当の気持ちはそうだったのだと思います。

その日からずっと、毎日自分たちのことをたくさん

話し合いましたが、なぜカンボジアが好きか、なぜカンボジアを撮るのか、ということはお互いに一度もたずねたことはありませんでした。暗黙の了解というかんじで、同じ目線でカンボジアを好きな人のことは、不思議とわかるひとでした。「カンボジアが好き」がなければ絶対にお付き合いすることのなかった二人だったでしょう。

## &lt;告知と入院&gt;

「夜明けのアンコールワットに足を踏み入れたとき俺が一番乗りでね、その頃は入場時間の制限がなかったからうんと早く行ったんだ。クメールの人にお前は幸運だって言われた。参道に並ぶ物売りのろうそくがゆらゆら浮かび上がっていてね、いまは物売りは禁止されてもう見られないけど、もう一度見たいんだ。」本人のブログ「エンドー帝国」や写真集にも同じことを書いています。もう一度見たいと何度も言っていました。トンレサップ湖に映る満月を見ながら飲むビールのおいしさといったら！行こう行こう！ともよく話していました。

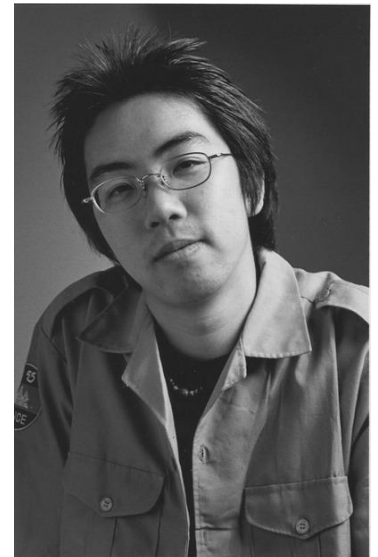
カンボジアで戦争が起こったら俺はすぐに飛んで行く、とも言っていましたね。そのとき一之瀬泰三さんのことも話していましたが、何より自分が一番愛した国と人たちだから、と言っていました。長期になったら私を連れて行くからシムリアップで家と子供を守って待ってて、というようなことも言っていました。

とにかくロマンチストでした。大真面目で一緒にシムリで死にましよう、と言ってから自然と子供は何人、など先の話をするようになりました。

戦後の回復期で、刻一刻と変わっていくカンボジアを、どう記憶に留めるか、それが問題だと話し合っていたときに、あなたには写真がありますね。と私が言うと、「そうですね、これからもずっとカンボジアの国と人を記録していきます。」と。写真があることを、ずっとやってきてよかったね、うらやましい。と私が言うと、

「いや、写真なんかやってしまうと、撮らなければいけないって強迫観念から逃げられなくなっちゃうものですよ、大変なんですよ。」と苦笑いしていました。このあとも、彼をみていて「俺が今、撮らなければ。」という使命感をいつも感じましたから、本音だったのでしょうか。

彼ほど今を生きている人を私はほかに知りません。二度とない今の一瞬をつかまえようとするような生き方を、常にしていました。写真の神様に愛されたのわかる気がします。こうして出会ってから一ヶ月間、



遠藤俊介 25歳頃の肖像

ほぼ毎日会っていましたが、遠藤くんの赤い腫れ物は全身に広がっていきました。会う度に悪化していくので、二人とも先のお話を急いだというのはあると思います。幸せと不安とでよくけんかして二人とも泣いたものです。

総合病院の皮膚科では、異常がなく原因がわからないと一ヶ月間もいわれていたのが、旧に悪化したのを見て血液内科ではないかということになり、骨髄検査を受け、告知の日が決まりました。彼はご家族にも私にもはっきり言いませんでしたが、実はこのとき白血病かも知れないから覚悟をとかなり匂わされていたから、俺はわかっていたが認めたくなかったから、後日言っていました。

告知の日が私が病院に付き添いました。急性骨髄性白血病でした。緊急入院が決まり、その支度のために病院から15分ほどの彼の実家に戻りましたが、家に着くまでの記憶が私にはありません。遠藤君は病室に持ち込むノートパソコンの準備などをてきぱきとしていましたが、数人のお友達に電話をしたときは大泣きしていて、ほんとうに直視できないくらい痛ましく、こちらもつらかったです。遠藤君のお母さんが、毅然として私のことも励ましてくださいました。その後私はいったん自宅へ帰ったのですが、夜電話で「友香ちゃん、お願いだから俺を助けてよ」といわれました。そこで一緒に闘病する同士になる約束をしました。

10月3日に入院し、抗がん剤治療が始まってから、ところどころ毛が抜けるのがいやだからといって看護婦さんに坊主にしてもらい、自分でおどけて写真を撮っていました。そのあともアフロのかつらをかぶったり、基本的にどんなときもユーモアだけは忘れたくない！というひとでしたから、看護師さんをいつも笑わせて楽しく過ごしていました。

入院が決まったときに、私は彼の記録を毎日撮ってあげたい、と思いコンパクトデジカメを買いました。彼も大変それを喜んで、「一日最低100枚は撮らないとだめだよ」と、たくさん撮ることをすすめました。印象的なのが、私が遠藤くんを撮ろうとすると、離れたところからレンズの向きを見ただけで、「あと3ミリ上、あと2ミリ右」と指示をくれるのです。それでぴたっと迫力のある構図になるのでいつも驚きました。

普段からコンパクトデジカメを肌身離さず携帯して、寝るときは枕元、目が覚めたら一日中なにかしら撮っていました。記録のため、覚書きのため、といって電車の時刻表からコンビニのレシートまで何でもです。入院してからもそれは変わりませんでした。

愛機のCanon EOS 20Dを病室に持ってきて、といわれたのは一回目の抗がん剤投与が終わり、経過良好となった頃でした。病室の窓から見える大きな月を、部屋を真っ暗にして熱心に撮り、看護師さんに驚かれました。その後一時外泊で千葉へSLを撮りに行ったり、横須賀の家の裏山や海を撮りながら一緒に歩きました。とにかく主治医も驚くほど体力があり足腰の丈夫な人で、私もタフでいくら歩いてもまったく疲れのないのを、「これならカンボジアのどこでも行けるよ」と言ってとても喜びました。春になったら行こ

の過去の写真を、文を書き直してアップするようになりました。写真ひとつひとつの撮ったときの状況を細かく教えてくれました。

#### <写真集制作>

一度経過良好となった後、再発し、3月になり、病状は悪化しましたが、楽しみにしていた桜を見せてあげたいと主治医にお願いしたところ、車で行くならと許可が出ました。いま思えば、最後の外出になるかもしれないと先生も考えていらしたのでしょう。実際、これが彼が外でカメラを持つ最後の外出になりました。

毎年必ず桜を撮りに行っていた近所の公園へ、桜並木を見に行き、思わぬ外出にととても喜んでいました。この日はEOSを私にも持たせ、露出のあわせ方のコツなどを丁寧に教えてくれました。彼は人にもものを教えるとき一番「いいひと」だった気がします。

丁寧で根気良く、とてもやさしいところがありました。自分より何かの知識のレベルが低いひとに、いらついたりすることのない性格だったと思います。相手が素直であれば、かもしれませんが。人の感情の機微に敏感な人でした。連合出版社長の八尾さん、波田野さん、大学の恩師大石芳野先生のおはからいで、初めての写真集を出せることになり、少しずつ体調の合間を縫って進めていましたが、手がうまく使えなくなってきたので、細かい作業を私に手伝わせてくれました。

表紙の写真は、「これでいいかなあ、相談に乗って」と、とずいぶん迷っていました。プロなのに、私のような素人にも信頼していれば相談してくれるところが嬉しかったです。スキャナを病室に持ち込んでプリントアウトし、本に巻いて見せたりしました。

私が、表紙は何年たってからでも「ああ、あの表紙の写真集でしょう？」と人々の記憶に残るような、印象的なのがいいよと言ったところ、数日してからじゃあこれがいいと思うんだけど、と出してきたのがあの女の子のアップの写真でした。女の子の瞳に彼が映り込んでいることにすぐ気づき、すごくいいね、決まりだね、となりました。

写真集ができあがり、私の自宅に届けていただいた最初の50部を、急いで病室に持って行きました。お母さんと弟、体調の悪い本人にかわり色校正を手伝ってくださった、大学の酒井先生が待っていました。この日にはかなり体調が悪く、本を持つのもつのも辛そうでしたが、ゆっくりと1ページ1ページ確認していました。彼が天国へ旅立ったのは、このわずか3日後のことでした。

#### 【高瀬友香（たかせ・ゆか）】

北海道小樽市出身、日本写真芸術専門学校映像科卒。現在はフリーのアロマセラピスト。

## 天女の舞を目指して

～カンボジア舞踊を日本で習う～

松室 三重

ゆるやかな体の動き、口元に浮かぶクメールの微笑み、流れるような視線……。観光ツアーで訪れたシェムリアップのディナーショーでの踊りに魅了され、食事を忘れて見入ってしまったのが私のカンボジア舞踊との出会いである。その衝撃についてバスの中で隣席になった女性と語り合った。特に激しい動きもなく、歌詞も踊りの意味も全く判らないのに、何にそんなに惹きつけられるのか。五人の女性が揃って同じ動きをしながら、生まれて初めてその踊りを見る私にとっても、あきらかに中心の人が上手に見えるのはなぜなのか。多分高校生ぐらいであろう踊り手たちに、女性らしい魅力が溢れてみえる秘訣は何なのだろうか……。

その後折に触れて思い出し、あの踊りは何だったのだろうかと思いつつも正確な名前も判らず二年ほどそのままに。それがたまたまネットサーフィン中に引っかけたあの踊りの教室があるとわかった時は、まさか日本で、とむしろ驚愕した。存在を知ったものなかなか時間の都合が付かず、実地に参加したのは2008年の秋からである。この一年ほどで教室の生徒として私が学んだカンボジア舞踊の秘密と、習ったからこそわかる魅力を記したいと思う。

私の参加している山中ひとみ先生主宰のカンボジア舞踊教室 SAKARAK (サカラッ) は、現在日本で唯一カンボジア舞踊を習える場所である。飯田橋と横浜でそれぞれ月二回、三ヵ月六回のコースを年三回行い、残りの三ヵ月は先生がカンボジアでの研鑽に行かれるために休講となる。一回の稽古は一時間半。舞踊の基本となるストレッチ(プット・クルオン)から始まり、前回までの復習、新しいフレーズの習得を重ね、三ヶ月で一・二曲を踊れるようになることを目標としている。初めて参加した日は「芽が出る→葉になる→花のつぼみが出る→花が開く→果実が弾けて落ちる」という手の五つの型を教わり、それだけでも嬉しくて帰りの電車の中でずっと繰り返していたものだ。

カンボジア古典舞踊はプット・クルオンと一時間ほどの基本練習曲で基礎的な身体の使い方を学ぶ。古典舞踊には手の動き・足の動きなどを組み合わせた四千以上とも言われる型があるが、一つ一つの型は基本練習曲を実際に踊りながら覚えていく。長く口伝で伝えられてきた踊りは師匠に手取り足取り教えてもらい習得するのだ。

本国では踊り手は男役・女役・鬼役に振り分けられるが、SAKARAKでは主に女役のみの演目から稽古を始めている。女役のみの演目の踊り手は奇数を旨としており、型を最も正確に美しく踊れる者が中心に位置して踊りの主役となるのである。

SAKARAKでは初心者が始めやすいよう五分の短い基本練習曲と簡単な入門曲で型に取り組んでいる。初めての者には短いフレーズを覚えるのも一苦勞であるが、慣れていくと「この動きは前回の曲にあった」というようなこともあり、ある種の規則性が見えてくる。例えば右手を上げて左足を前に出すときは左肩が下がって頭も左に傾く、というように。これが型であり、一つ一つの型が人を美しく見せる規則性に基づいている。つまり型を習得すれば踊っている者の体型の違いなどに関わらず揃って見えるようになるのだ。

型を美しく見せる動きを三つ取り上げてみたい。一つはソンコット・クロリアンという腰の構えで、尾てい骨を後ろに引き上げるようにする。骨盤が前に傾くことで骨盤の動きを制限し、体が左右にぶれるのを防ぎ、下半身が定まる。また足を前に上げられる角度が狭くなり、足の運びがゆるやかになる。いざやってみるとソンコット・クロリアンを常に意識し続けることが一番大変で、レッスンの後はイタタタと毎度背中を丸めることになる。

二つ目は背中中の筋肉を使うこと。特に小円筋など肩甲骨を支える筋肉を八の字に回すようにして、神聖な蛇ナーガが這うようにと言われるなめらかな動きを生み出す。普段全く意識していない筋肉なので動かせるようになるまで時間がかかるが、動かせることが気持ちよく、肩こりも改善した。肩の動きに連動させて



山中ひとみさんの指導を受ける筆者

首も八の字に回し、正面から見たときに目尻が切れるような角度に顔を傾けることであの流れるような視線を作り出す。

三つ目は手と腕の動き。手指と手首を特に意識してしっかり力をこめる。肘は円を作るようにして手指・手首と背筋の動きにまかせる。その結果体軸と同じように余計な

ぶれが少なくなり、見る側の視界に雑多な動きが入らない。繊細な指の動きに視線を集めることにもなる。

これらは観客としては見えなかったところで、やってみて初めて理解できた。だが判ることとできる事は全く違い、理解したつもりでも前回と同じ事をまた注意されることが何度もある。これは個人の動きの癖とも関連していて、その癖を無くして全員が同じ動き方を身につけることが美しく統一された踊りを生み出すのだが、現実にはなかなか難しく訓練あるのみである。

衣装もいたるところに美しく見せる工夫がある。ブラウスはびっしりと並んだボタンで締め上げるように着るが、これはウエストを細く見せる工夫である。着たときにウエスト部分が少しでもつまめるとその部分を縫い縮めるよう指導される。私が参加する前に行われたSAKARAKカンボジア舞踊旅行では、現地の師匠オム・ユヴァンナー先生にその場で縫い縮めるよう針と糸を渡されたとのことである。その衣装を練習時も毎回着ることによって、自然とウエストの細い女性らしい体型に変わっていく。また4メートル弱の一枚布を独特の方法で巻きつけたクバンというスカート兼ズボンのような衣装は、結び目から流れるプリーツ部分をふっくらと広げることで腰の張りを美しくみせ、対照的にウエストを更に細く見せる効果がある。

そして印象的な微笑は口ではなく、目元で笑う、と表現される。目をぱっちりで見開き、頬の筋肉を意識して持ち上げることで自然と口角が上を向き、アンコール遺跡に多く見られるクメールの微笑を生み出すのだ。

習うだけでなく公演や各地のイベント、年に一度の生徒発表会などで舞台に立つことも多い。練習では上手に踊れたつもりでも、手足に複数のアクセサリをつけて踊るとまた勝手が違う。

特に初回の発表会とはまどってあっという間に終わってしまった。一通り覚えた踊りも完璧とは程遠く、舞台上で踊る度にもっともっと踊りこまないと、と稽古を重ねる重要性を痛感する。舞台袖ではできていた笑顔も、舞台上では意識が踊りに集中してしまうため思うように浮かべられず、反省しきりである。

毎週木曜日、入門時、そして舞台の前に必ず行われるお祈りの儀式ソンプア・クルーは師匠へ捧げる祈りである。師匠を育てた師匠、そのまた師匠へと連綿と続く魂に礼を捧げるとともに、魂が宿ると信じられている冠やお面、また神々に舞台の成功を祈るものだ。舞台に上がる者が日常との意識の切り替えを行う大事な時間であり、天界にいる天女アプサラと自分を一体化させるための大切な時間である。こうして立った舞台では、目の前にいる観客に向けて踊るのみでなく、舞を奉納することで天上の世界へと意識を向け、天界と繋がることをも目的としている。そのため視線の動きも観客を見るようにしながらも、直接目は合わせな

い。観客を視野に入れつつ、天上を半分意識してあの世とこの世を繋ぐ存在へと自分を高めていくのだ。残念ながら私はまだその境地へと達したことはないが。

2009年秋に参加したSAKARAK自主公演「天上の散華Ⅲ」では、カンボジアの先生方と過ごした舞台裏の時間も貴重な経験となった。クバンを巻きつける手つきの鮮やかさ一つをとってみても、常に身近に舞踊が存在している方との違いが身にしみた。ちょっとした首の傾げかたにも表れる継続の威力を間近に見て、芸を磨き続けることの意義をまざまざと感じた。先生方との会話を通じて、ポル・ポト政権下の内戦の話が主に取りざたされる日本では知らなかった、今生きているカンボジア人が今感じていることに触れられたのも良い思い出である。

舞踊は現在に生きる生身の人間の肉体が作り出すものだ。しかしその影に存在する脈々となつながらの伝統が、

長い歴史をかけて舞踊を磨き上げ結実させるに至るのだ。高度に洗練されたカンボジア舞踊を生み出したカンボジア人の感性は、どこからどうやって生まれ、どのように伝えられ舞踊を精練してきたのか、それについてはまだ解明の途中である。

私が最初に感じたカンボジア舞踊に惹かれる秘訣の解明は、こうして今も少しずつ進んでいる。

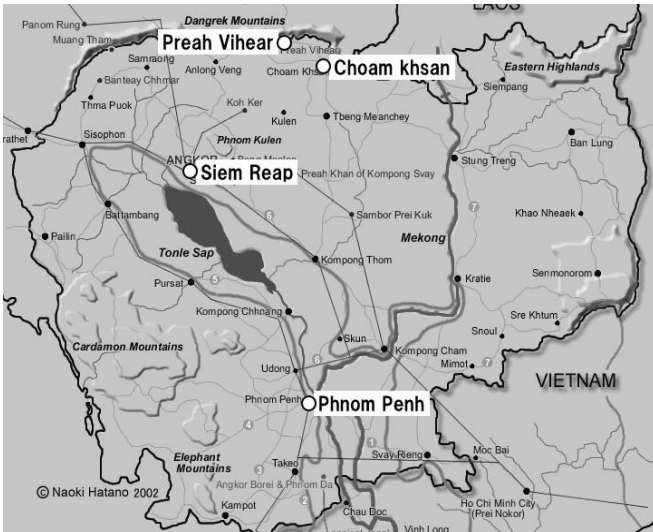


『天上の散華Ⅲ』公演終了後の集合写真。前列左端が山中ひとみさん、その右がユヴァンナー先生。後列右端が筆者。

#### 【松室三重（まつむろ・みえ）】

カンボジア舞踊教室SAKARAK生徒。1972年生まれ 埼玉県出身。2005年にカンボジア・シェムリアップへのツアー旅行に参加。大学時代に生物学を学んでいたこともあり、カンボジア舞踊の美を生み出す肉体の構造・作用に興味を持つ。現在カンボジア舞踊教室SAKARAKに参加中。

## 資料編 チョムクサンへの旅の備忘録 04年～08年及び周辺の遺跡 高橋勲



## はじめに

プノンペンの遙か北、タイ国境に近い所にチョムクサンと言う町がある。全網羅型か一部の冒険系ガイドブックくらいにしか載ってない様なありきたりな地方の町。そんな所に何度も通う様になったきっかけは、01年末の旅の帰りに買った仏人学者によるサンボールプレイクックの調査報告書の一般向書籍の中に所載されていた、小さな遺跡分布図だった。その図には所謂5大都市遺跡群にも劣らぬかの様な扱いで見知らぬ遺跡群が表示されていた。それに興味を持ち、様々に調べていくと、その遺跡群のメインはNeak Buosと言う名で、最寄はチョムクサンと言う町である事が判った。後は最初の一步を踏み出すか否かであり、私はその一步を踏み出す事を選んだ。そうして02年末から始まったチョムクサンへの旅も既に8回を数えるに至った。これはそんな旅のうち2004年～08年末の旅の備忘録です。

## 旅の備忘録 2004年～2008年

## 2004年 12/26～27

朝日本発。バンコク経由。夕方、プノンペン着。ここで1泊。翌27日朝、GST社のシェムレाप行きバスに乗る。7時半頃発。途中、朝食休憩を挟み10時半頃にコンポントムで下車。ベンランへ向かうが、既にプレアヴィヘア方面行きは出払った後。昼過ぎ遅くまで粘るが乗客集まらず。あっち方面行きたいならもっと早い時間じゃないかとまで言われる。諦め、ここで1泊する事に。03年半ばに潰れたが、オーナー変わって改装し再開店したばかりの元NeakMeasこと現ARUNASホテルにチェックイン。扇風機とエアコン付、お湯シャワーで1泊6ドル。改装したてなので当然綺麗。当たりだと思ったが、夜になって重大な欠点が判明。…1階に有るカラオケレストランの音や歌声が最上階までズンズンと響きまくりで深夜0時半過ぎまで眠れず。ああ…。

## 12/28

6時半までにはチェックアウトのつもりが目覚めた時には既に8時半過ぎ。落ち込みながらベンランへ。トベンミアンチェイ行きタクシーを探して交渉し、妥結したまでは良いが、客があまりに少ない為にタクシー間でその少ない客の奪い合いが熾烈になり、お互いが発車定員に達しないという事態に。そんな中で昼も過ぎた頃にはなんとか定員に達し出発。トベンミアンチェイまでの道路状況は予想通り去年より悪化していた。平均時速は40キロ以下。途中、トベンミアンチェイから36キロ地点の、Preah KhanKompongSvay方面への分岐で大規模な道路工事中。Phum Da (遺跡への道の途中に在る大きな集落)への道の改修なのか、シェムレापーKoh Ker間の様なバイパス建造なのか。後者なら良いなと思う。(注：現66号線の事)

コンポントムを出発してから4時間以上かかって夕方、トベンミアンチェイ着。MAY27ゲストハウスにて1泊。TV付ファンのみ水シャワーで4ドル。

## 12/29

朝の5時頃、寒くて目が覚める。温度計見ると14度。その後二度寝してしまった為、8時過ぎチェックアウト。ベンランに行くのと去年乗ったピックアップと同じ人がおり、チョムクサン行きはまだ暫く出発しないとの事。その間にのんびりと朝食を済ませる。9時半頃に出発。今回は前回と違い、クーレン方向へは向かわずに市内からすぐにセン川を渡河して、そのまま北上するというルート。このルート、一部のガイドブックには紹介されていて知ってはいたが、想像以上に凄いいルートだった。初めてチョムクサンに行った時の道よりも遥かにアドベンチャー。尤も運転手が途中道間違えした事もあるのだが。この道、利用頻度は意外に高い様で、道中において4WDトラック3台バイク7台とすれ違う。

この道、PhumChheah近くで、というよりPrasat Kantopのある小丘の所でストゥントレンからの幹線である211号線に合流し、チョムクサンのベンランには13時半頃着。そこで大半の荷物と客を降ろし、Khonさんの家まで送ってもらう際、ある事に気付く。荷台に機関銃2丁と弾薬箱が3箱置いている。前回乗った時にはこんなの載せて無かった筈。Khonさんの家に着き、荷物ほどいた後でこの話をする。「この所物騒だから。俺も念の為に持って行ってる」と。…うへえ。少し経ってからKongさん来訪。再会の宴会がてら遺跡の情報や明日からの行動のアドバイスをしてもらう。そして21時頃に就寝、したかったが、どこからか洋物のトランス音楽が響きわたってなかなか寝付けず。



チョムクサンの町

## 12/30

結局、どこかからのトランス音楽は夜通し鳴り続けて寝不足。本日は先回行き着けなかったThnalSvayへ。出かける前にKongさんより注意有り。何でもあの辺り毒蛇が多く居て被害も出るとの事。その為に蛇避けの草の汁とやらをズボンや靴に摺り込んでから9時半頃に出発。ルートは前回とほぼ同じ。違うのは目的地周辺の森にも伐採の手が入った為に、典型的牛車道からトラックも通れる様な走り易い道に。最も、ソフトで深い砂地路なのは変わらず。途中、仕事場に向かう一団と行き会い、彼等から大体の位置を教えて貰い遺跡へ向かう。が、途中の分岐で迷ってしまい、結局、追いついて来た先の一団の一人に近くまで案内してもらって遺跡域に到着。出発からほぼ1時間半程。この遺跡は小丘の緩やかな斜面を利用し、その北の麓の楼門から南の頂上部の主祠堂に至ると言う構成の様だ。…なんかプレアヴィヘア寺院の構成に似てる？楼門の前は急斜面。下の地面まで5～6m程の高低差。その低地部、楼門跡の前の左手には何かの建物跡。その右手には斜面を削り取り接する様に作られた周壁と回廊と塔を持つ、これだけが砂岩製の遺跡。第一祠堂と主祠堂間の真ん中ほどに、かつての参道列柱の名残の？柱。エントランスを持つ主祠堂。その右脇5mくらいの所に並んで2箇所、1辺2m程の四角形の何かの人工物の跡。丘の最南端下に溜池(Trapeang)。そうして1時間程見て回りバイク置いてた所まで戻る際に大きな蛇に遭遇。動かず様子見てると蛇、どこかにいってくれる。暫く様子見後、注意しながらバイクの置き場所へ。後は一目散に家に戻る。戻った後、Kongさん達と写真や資料、地図を見ながら会合。ThnalSvayと地図上のPr. TrapeangSalaという遺跡と場所的に、そして書籍資料による位置や構成はおおよそ一致したものの、幾つもの疑問点も残り、本当にあそこがそうだとの確信に至らず。寝不足もあり、本日はこれで終了。(注：当時の使用資料の一部情報には、それはChoamKhsanの北北東

に存在する、ともあり、地図上にもその情報とおおよそ合致する位置、Pr. TrapeangSalaより東北東7キロほどに名称不明の遺跡(ChavKommunの事。当時未訪問)が記されていた為に確信を持つ事が出来なかった。)

12/31

今日はPr. Krabeiへ、のつもりだったが朝、KongさんからPr. Krochという遺跡へ行く事を勧められる、というより既にそこへのモト運転手兼ガイドの人(名はChhtm氏)が手配済み…。ならば、と行く方向の途中にあるThmonPeang?遺跡にも寄りたいたと話す、「全部壊れて見る物は無い」という答。後で判ったがその辺り、04年半ば頃に政府軍の基地が出来た為に色々となるようで「危ないから近寄らない方がいい」という事の様。出発は8時頃。家から幹線を西へ30分弱の、プレアヴィヒア寺院方面とトベンミアンチェイ方面への分岐を少し過ぎた辺りで道から外れ、少し森に入った所でバイクを置いて、あとは徒歩で。大体一時間半程だそう。道らしい道は無く、草叢や木々の間を縫う様に歩き続ける。そうして2時間も経った頃



Prasat Kroch

Chhtm氏曰く、「確かにこの辺の筈なんだが…。一旦戻って出直すか」…一気に脱力。そして、来た道を引き返す。途中、枯れ河に掛かる細い丸木橋渡ろうとして今回は出来ず、一旦河床に飛び降りて少し離れた所の上がり易そうな溝に向かう。そこを上がろうとした時、物凄い大声で制止される。地雷、罠が有ると言う。後退し良く見ると、確かに何かの仕掛けが有る。ゾッとする。とにかく丸木橋の下へ戻り、気を落ち着かせてからその河壁を何とかよじ登り、また歩き出す。その戻る途中の道すがらにおいても、すぐ脇に幾つもの地雷や罠が存在する事を知らされ、またゾットした。バイクまで戻り、幹線を町方向へ10分程戻った辺りの集落へ。そこでもう一人、更に詳しい人を紹介してもらおう。名はBunny氏。そしてそのChhtm氏の家で一服兼昼飯をご馳走になる。なんかの干し肉、美味し。13時頃出発。今度は3人で先の所から再び森の中へ。ビクビクしながらも今度は1時間程で遺跡到着。大きな一つの基壇の上に東向きに祠堂が3基。南の1基のみがほぼ健在。中央は西面が後ろへ形のまま倒れる様に崩壊し、正面も無し。左右だけ残る。北は南面が割れて中央に寄りかかる様に建ち、上部には樹が生えている。基壇の南北には階段。東には突き出したテラスらしき跡。一通り見て帰路に。その道すがら、あの遺跡は以前は陣地になってた事もあり、周囲には今も当時の地雷や罠がそのままになっている、等の話を聞く。途中、先の集落でBunny氏を降ろし、家には15時半頃。時間的に今日中にPr. Krakbeiへ行くのは無謀。明日以降に。とはいえまだまだ日没まで時間あるので、Chhtm氏に謝礼支払い後、家から北に2キロ弱の所にあるらしい飛行場跡に徒歩で行ってみる。去年、国境方面へ行く際に通った時は全く気を付けてなかった為。結果、道の片側の原っぱに飛行場の滑走路跡と思われるものは見つけたが、それ以外は何も無し。後は強い日差しで気持ち悪くたっただけだった…。



Prasat Neak Buos

2005年 1/1

昨日の疲れか、朝14度、昼27度以上というあまりの気温差に負けた体調不良。無理せず休息日に。とはいえ、家のマダムの仕事、ガソリン販売やら携帯電話スタンドの店番やらの手伝いはしていたが。(チョムクサン周辺、携帯電話が使用可能になっていた)昼、Kongさん来訪。彼よりPr. Krochに関する新情報を聞く。あの遺跡にはSneng KrabeiとPr. Krabeiの関係と同

様に、兄弟にあたる遺跡が有ると言う。何でも幹線を挟んで北に徒歩1時間半くらいの場所に有ったそう。今から行ってみるか、と聞かれるが体調不良もあり後日の課題とする。

1/2

今日はPr. Preah Neak Buosの再訪とPr. Krabeiへ。まずはPr. Preah Neak Buosへ。朝7時半出発。最寄の家には10時半頃着。途中の、最後の分岐の有る道沿いに2年前には無かった新しい家や集落が幾つも出来ていたり、草木の繁茂の為など道の様相が随分と様変わりして道に迷った為、前回より時間がかかった。最寄の家も、以前は駐在所と関係者の家の2軒だけだったのが6軒に増え、小集落と言えるくらいになっていた。だが、以前に私を牛車に乗せて連れて来てくれた御爺さんや、案内してくれた警官達は誰も居なくなっていた。現在の住人に道順を聞いて遺跡へ。まず小集落から東に少し行った草原の中の遺跡へ。ほぼ正方形の周壁の中に連子格子窓付の入り口を持つ小祠堂。二つ在る支寺院の一つで砂岩作り。Neak Buos本体はここから北方向へ2キロ先。モトドップはこれがTa Rosだと主張してたが、どうだろう?。そこから草原の中を北上。途中もう一つの支寺院跡をスルーし、遺跡本体へ。2年前は深く樹木に覆われ全容が判然としなかったが、今は周辺に伐採の手が入って全容が判り易くなっていた。ただ、草は茫々で歩きにくい。まず一段高くなった寺院域への入口階段を上がり楼門まで。楼門は崩壊状態の為、その脇をよじ登って境内へ入り最初に主祠堂へ。その前に転がっていた獅子像の一つが見当たらない。盗掘なのか?それから兼外周壁?の回廊沿いに反時計回りを見て回る。伐採のおかげで遺跡の構成が良く判る。しかしその弊害も。前回撮影した副祠堂の碑文等に、伐採時の下草処理の炎によると思われる焼損や崩落が見られた。そして帰路に。11時頃発、チョムクサン12時半少し前に着。いつぞやのカフェで昼食休憩。13時少し過ぎ出発。Pr. Krabeiへ。途中の道すがら遺跡の場所を聞きながら進む。森の中、以前に比べ伐採が進んでいるのと道沿いに東屋や小集落と言える物が出来ていた。だがいずれも人の気配は無く、場所の特定が出来ぬままの



Prasat Neak Buos

にモト運転手は先へ先へと進もうとする。そうして入り込んだ草原でバイクにアシダカ。帰路にかかる時間も考え、ここが潮時と判断。バイクを押し歩きで道に戻り始める。その際、道傍の東屋に人の姿を見付けたのでそこに応急修理できる道具有るか聞きに行く。何とかなりそう。その主の御爺さんから、モト運転手が応急修理してる間に近くの、Sneng Krabeiに案内してあげようかと言う話有り。こんな形で再訪かあ、と思いつつも厚意に甘え案内してもらおう。モト運転手も応急修理もそこそこにバイクを置いてそれに付いてくる。そうして案内してもらった先は、なんとPr. Krabeiだった。御爺さんに何で?と聞くと、二つのSneng Krabeiのうち、近い方に連れて来たけど。今回はもう縁が無かった、と思っていただけに望外の喜び。遺跡は東向きにレンガの祠堂が3基、周壁等は無し。比較的綺麗に残っているが、リントルは3基とも祠堂の前面に落下している。獅子像の一部と思いき、足の一部分の残った台座もあった。中央祠堂の中には何かの大きな台座が半ば埋もれていた。南祠堂の数m南に大きな溜れ池。Trapeang Krabeiと言う名で、昔の沐浴池跡の様。西側からも見ようとするが、密集した藪が壁のようになって回り込めず。ここまでだ、と東屋へ戻る事に。その際に御爺さん、遺跡のレンガを幾つも拾ってクロマに包んでいる。何を?と聞くと、竈や砥石に使うという答。複雑な気分。東屋に戻り何とか応急修理を終え、主に謝礼をして帰路に着く。家には17時過ぎ頃着。

1/3

今日はチョムクサンを去る日。Khonさんは31日にコンポントムに買出しに出かけて今日こっちに帰って来る為、マダムに乗る車を手配してもらおう。幸い通常のトベンミアンチェイ停まりでなく、コンポントムまで行く便に乗れる様、手配してもらおう事が出来た。マダムや子供達、Kongさん、偶然買い物に来てたChhtm氏に再会の約束と別れの

挨拶して8時半頃、出発。いつもの道をトベンミアンチェイへ。この道の状況も更に悪化。来る時の道の方がまだましに思えるほど。その途中、あっちから戻ってきた Khon さんの車と行きあったので、氏と次回の再会を約し再び出発。トベンミアンチェイには11時半頃着。昼食休憩の後12時半過ぎ出発。コンポントムには17時少し前に着。ここで一泊するか、このまま一気にプノンペンまで行くか。プノンペンまで行く事を選択しタクシーに乗る。が、少し後悔。気分は夜のチキンラン。20時頃プノンペン着。

1 / 4

今日はリコンファームと地図の買い足し後、博物館見学。先回との変化点は目立つ所では Phnom Da 出土のハリハラ神像が他所へ移され展示されていない。他にも幾つかが。…なんだかなあ。

1 / 5

なじみのモト運転手とコンボンチャム州に在る遺跡へ。行きはスクンをコンボンチャム方向へ向かって最初の大きな町の、中心の十字路を右折し北へ20キロ行った所で6号線に合流、そこから少し北上した辺りに小さなクメール語で Prasat Boran Preah Theat Teouk Chhaer と書かれた木製の看板。そこを右折7キロ。所々の分岐で道を尋ねながら進み目的地に。そこに遺跡まで350mの看板。モト運転手、TV番組ではこの場所に数多く遺跡が在ると言っていたと見当たらぬ。看板傍の露店のおばさんに聞くと、直ぐそのと、もう一つしかない。まずは近い方へ。かなり壊れているものの、それなりに大きい。経蔵の様にも思える。そこから道を奥へと進む。道沿いにかつての基壇と残った建材を流用した現代の仏堂。先に進むとさっきのより更に大きな遺跡。外周壁跡らしいラテライトの列の向こうにもう一つ周壁。その中に前面に列柱が左右に計8本並ぶ短い参道を持つレンガの祠堂。現代の仏堂としても使われている。現代の寺院の敷地内の為、見学しても何事かと僧侶達がやってくる。私が日本人と知ると、その中の一人が片言の日本語で話しかけてくる。なんでも近くに日本の援助で作られた発電施設が在って、それを作っている時に覚えたのだとか。見学後、その施設を見に行く。太陽電池の発電施設だった。そして帰路に。15時半過ぎ、宿に帰る。

1 / 6

本日は帰国日。だが、出発までかなり時間有るのでプノタマウまで行ってみる。1時間半くらいで着。以前に来た時も見たワットプノタマウの境内の遺跡へ。…やはりガイドブックに書かれている様な年代の物とは…。その後 Thmor Dous をさりと見て、昼前には宿に戻る。後は気付いた事。4日から6日にかけてポト時代やその前後を題材にしたTV番組が目立った。その中で興味深かったのはベトナム言う所の“再解放”時の、各地での記録映像をふんだんに使用したドキュメンタリーだった。夕方、空港へ。バンコク経由で1 / 7朝、帰国。

\*

8 / 4

朝、日本を出発。途中バンコクからプノンペン行きの機内で日本人二人と同じ並びに。何でもカンボジアで会社を経営してるとの事。プノンペン着後、いつもの宿へ。体調あまり良くなく頭痛もする為、飯食わずに直ぐ寝る。

8 / 5

出発間際までバタバタしてしていた為の忘れ物買出し。早々と終わり時間余ったので先回ちゃんと撮ってなかったプノタマウの Pr. Thmor Dous へ。お寺から北西に徒歩6分の所に有るもう一つの頂に在る。レンガ作りで入り口は東。内部には大きな岩が突き立つ様に立ち、これが御神体との事。何でも育つ岩とかの伝説があるそう。プノバセットの向かって左の寺院の事を思い出す。あれもかつては不思議な力を持つという尖った大きな岩を御神体として祀っていて、今の寺はそれを覆う様にして建てられているという話だった。宿に帰り、近くの食堂にて夕食。メニューに「日本飯 (Japan Fried Rice)」なる物が有ったので頼んでみる。…所謂チキンライスだった。これが何故に日本飯？

8 / 6

宿をチェックアウトしてGSTバスでコンポントムまで。10時半頃着。ベンラーンの屋台で軽食。ヌムバンチョック。今回はスムーズにトベンミアンチェイ行きに乗れる。11時頃発。道の状況はプノムダイまでは所々で改修が行われており比較的悪くは無し。だが、良いの

はそこまで。Rovieng 方面へは舗装されているなど、あちら行きが優先されている様でトベンミアンチェイ方面は近づくにつれ状況悪化。橋が壊れて要迂回箇所が二つ。それでも3時間掛からず14時少し前着。チョムクサン行きはもう無くここで一泊。

8 / 7

8時半頃ベンラーン発チョムクサンへ。道路状況は覚悟してはいたものの相当に悪し。多少の改修箇所はあるものの大半がドロスタ。エンデュエロのマディセクション顔負け。何度もスタックし、時には膝まで泥に浸かってトラック押しで脱出の手伝い。そんな中向こうからやってきた Khon さんと出会う。何でもこれからシェムレアプへ行くとかで私と行き違い。あらら。69号線からチョムクサンへの道も半年前が嘘の様な酷い状況。20分程だった行程を1時間以上かかって到着。疲れた。

8 / 8

Kong さんに挨拶に行き先回の写真を渡して今回の予定、プレアヴィヘア寺院の再訪と南に在る3つの遺跡の事を話した後、まずはプレアヴィヘア寺院へ向かう。8時半発でK01には10時頃着。村にはゲストハウスが3軒開店してる等賑やかに。村から上へはこのモトドップに必ず乗り換えなきゃいかんとか。1万R。登山道に入り、道を3分の2行った辺りで登山道を外れ森の中を通過して寺院入口前の市場まで20分程で着。登山道は以前歩いた道を拡幅してコンクリート舗装したものか？かなりの急坂だ。終点は第1楼門横だがそこに停めているのは車だけで、バイクは少し離れた場所に停めなきゃいけないそう。なお入域料はカンボジア側からは無料。タイ側から入る時にだけ5ドルかかる。今回の目的はバンダイステアウェイと日本のとある地雷除去NGOがタイ側から寺院への道沿いに建てたという看板の確認。まずは階段上りバンダイステアウェイへ。第1楼門の少し東の大きな岩の端の下の草叢の中に階段跡？らしい石材が確認できたが、その先へは地雷まみれで進むのは無理との事。第1楼門まで戻り周りを見るとヘリの残骸が無い事に気付く。何でも登山道完成の際に撤去してしまったそう。その跡を見に行くとい前は気付かなかった周壁らしきものが在り、更にその終点部まで見に行く。ナーグプラットフォームまで幅2m程の続く周壁跡。内側は石造の側溝で、周壁の途中に在る集水部？に集めた水を終点で崖から下へ排水する様になっているらしい。次は例の看板探し。カンボジア側ゲートの係員にタイ側への出方を聞くが「そのまま行って良いよ」との事。フェンスを越えタイ側へ出るとタイの警備員が立っているが何も言われず。一応タイ側の検問所の係員にも同様の事を聞いてみるとこちらも「別に問題ないよ」の返答。…ズルズルだな。なのでタイ側の土産物市場？の少し先まで行ってまた検問所の所に戻るを繰り返し看板探すが見付けられず。諦めてタイ側展望台と MoeEDen の浮彫り、Pr. Santhop を一通り見てカンボジア側に戻る。今度も何も言われず。…なんだかなあ。市場前からモトドップで来た時のルートをK01に戻り今度は直ぐ近くの小遺跡へ。集落中心部より南へ200m程。だが付近はHALO トラスト支援による地雷除去作業の真っ最中。一区切り付くまで待ち遺跡を見て回る。1辺10m程の周壁と祠堂。他に何かの建物2つ。名を聞くと Pr. Ko もしくは Pr. Monibong と呼んでいるようだ。これで一区切り、チョムクサンに戻る。途中、雨が激しい為 Sraem で様子見がてら一服。この集落、02年末に来た時はアンロンヴェンからの道との合流点を中心にした本当に小さな集落だったが今はロータリーも有る大きな村になっていた。雨が少し弱まったので出発。家に着く頃、雨再びどころか相当に激しくなり、それが朝まで続く。おかげで雨漏りまで起きてまともに眠れず。

8 / 9

朝まだ雨。10時ころになってようやく雨止んだので、周囲の道の様子を調べに出たり聞いたりする。乾季は行けた道が水没してモトドップでは通行不能な場所が多数。15時少し前からまた激しい雨。昨日濡れた衣類もおかげで殆ど乾かず。今回はこれまでだと諦めて明日プノンペンへ戻る事にする。本日夕、Khon さんシェムレアプより戻る。

8 / 10

朝、まだバラバラと雨。本日朝のトベンミアンチェイ行は1台しか出さずインサイドは既に売り切れ。久々の荷台席で8時45分発。道路状況、予想を超えて悪くトベンミアンチェイに着くまでに6度スタック。その度にトラック降りて押す為に足は泥まみれ。更には道の凹凸で振り落とされぬ様しがみつくのに必死でへろへろになる。トベンミアンチェイには13時少し過ぎに着。雨は朝だけで着く頃には晴天に。コ

ンポントムへは14時半発。17時半に着。疲れたのでここで1泊。

### 8/11~12

昼前までにプノンペン着。いつもの宿にチェックイン後、泥だらけの衣類や靴を洗い干して後は一休み。やはりプノンペンは暑いのか大半の衣類は日が暮れる頃には乾いていた。12日、リコンファームに行き後は休息に充てる。

### 8/13

朝、8時発ソリヤバスでコンボンチャムへ。休憩含め3時間弱で着。そしてモトドップでバンテアイブレインコールへ。(この時点では雨は降っておらず、ハンチェイへも行けると言う話になっていた。)コンボンチャムのバス乗り場からは橋を渡って40キロ程先だそう。道は日本のODAのおかげで綺麗でスムーズ。橋も旅行情報掲示板に書かれていた様な隙間は見当たらず。橋を渡って20分程した辺りで雨が降り始め、強くなる一方なので民家の軒先借りて様子見の雨宿りする。1時間程で弱くなってきたので再出発。が、暫くするとまた雨強くなり再び様子見で雨宿り。30分程待ってみるが、ある程度から弱くなる気配無し。覚悟決めて雨の中へ走り出す。7号線の遺跡域への案内板に着く頃には雨具の下までずぶ濡れになってしまうが、開き直って進む。案内板の所から7号線を右折し、35分位で遺跡の在る寺に到着。寺の人が来て遺跡の事を色々説明してくれるのだが、ずぶ濡れなのと風が強い為に体が冷えてそれどころではない状態。思わず「夏山で凍死」と言う言葉が頭をよぎる。さすがに様子が変わったらしく、モト共々御堂の中に入れてくれると熱いお湯まで頂く。感謝。少し元気出たので再度説明をして貰いながら遺跡を見た後はそのまま街への帰途に。この状態では他の遺跡まで見ていく余裕は無し。雨と風もメコン川の橋を渡る頃になってようやく収まってきて、バス営業所に着くと同時に止む。結局ずっと雨に降られ通しだった。モトに代金支払い後、市場で服を上下一式買って着替え。市場内食堂で軽く食って暖かいコーヒー飲んで暫し一服の後、バス乗り場へ戻ると16時半のプノンペン行き最終便がくる所。大急ぎで乗込む。プノンペン着は20時。宿に戻り直ぐ寝る。

### 8/14~15

14日朝、昨日の今日なので遠出は自重。午前は休み、午後からもすごく久しぶりにトゥールスレンへ行く。トゥールスレン、例の骸骨地図等幾つかの展示物が撤去されていた為か初めて来た時に比べ随分小奇麗な、観光地然とした雰囲気になっていた。思わず吐き気すら覚えたかつての「あの感じ」は最早感じない。単に私の感じ方が時を経て変わっただけ、だろうか。15日夕、帰国の途に。

\*

### 12/24~26

24日朝日本発。バンコク経由プノンペンのいつもの宿には20時頃着。夕方に雨が降ったらしく、路面が随分濡れている。荷物解いて直ぐ寝る。25日、朝、短時間のパラパラ雨。何度目かのプノンバセット行き。26日、朝一でリコンファームし、宿もチェックアウト。今回はいつものGSTでなくRithyMonyバスで。10時半発、13時40分コンポントム着。タクシーに乗り換え14時50分コンポントム発、トベンミアンチェイへ。道路状況は良好。途中、州境付近で一時的雨。17時35分頃トベンミアンチェイ着。ここで一泊。夜、また雨。夜半過ぎまで。…本当に乾季ですか?そんな中近くの食堂に夕飯食べに行く。注文品待てるのと、先客の2人組がジッとこっち見てるんで何だよと思ってるなら、「3年前にタラボリバットに遺跡見に来た日本人か?」と聞いてくる。暫し記憶を検索。遺跡の一つを案内してもらった腰巻の兄ちゃんズだった。席そっちに移り、モトの爺様の事やら色々話しながら飲んで食う。帰る時、彼らの勘定もしっかりとこっち持ちに。あれまー。

### 12/27

9時半頃にチョムクサンに向けて出発。69号線、改修や補修の手が入っていて8月の状況からは改善。だが分岐からチョムクサンまでの道は逆に悪化。全く荒れるがままの状態。掛かった時間の半分は行程の4分の1も無いの間で掛かっている。13時50分頃チョムクサン着。今回もいつもの家に居候させてもらう。14時半くらいからかなりの強い雨。30分以上も降り続く。明日からが思いやられる…。

### 12/28

朝6時起床。外に出て見ると濃い霧が出ていて見通し悪く何が何やら。日が昇った後もしばらくその状態続く。本日はSnengKrabeiとKbalKrabei行きの予定。モトドップ頼み8時半過ぎ出発。前日の雨もあってか、この時期には水量減って渡り易いはずの川の水がまだまだ多く、渡るのに一仕事。それ以外は特に問題なくスムーズにSnengKrabeiに到着。40分弱。2年ぶりのSnengKrabeiは草木に覆われつつあり、かつての見渡しの良い状態ではなく荒れた景色を見せている。私はここから直ぐ傍の東屋の人に案内を頼んで徒歩でKbalKrabeiへ向かうつもりだったが、モト、それを嫌がり町へ戻ると言うので仕方なく一旦町に戻りKongさんに状況報告。その際、一緒に話を聞いてた客の一人より、ここから南に2キロ程行った辺りに在る遺跡、TrapeangThnalの話。案内もしてくれると言うので見に行く。幹線道から50m程雑木林に入った所に在った。祠堂自体は崩壊して痕跡しかないが、とても状態の良いリントルが残る。また戻って報告。今度はTrapeangPrasat (TuolPrasat)とSema再訪。まずはSemaに向かう。先回は南側から入ったが、今回は田圃挟んで北側に在る無人の民家を起点に半時計回りする様に向かい、遺跡を見てまた同様に民家まで戻る。途中、以前にも見た何かの像を刻んだ岩。民家まで戻ると、着た時には気付かなかった使用前?と使用済み地雷が複数、家の傍に無造作に放ってある。…うへえ。次は

TrapeangPrasatへ。細い道を挟んで大きな池が在る事からそう呼ばれているとか。遺跡自体は主にラテライトで出来ていたようだが、崩壊が進んでいて原形が良く判らない。良く見ようにも蟻の大群がいて咬まれまくりでそれどころではない。

早々に町に引き揚げる。その後またKongさんの所で明日の予定を話し合う。その際この地域の遺跡を良く知ると言う古老を紹介してくれると言うので話を聞きに行く。色々貴重な話、例えば地図やリストに無い遺跡の存在や、翁の若い頃の遺跡の状況などを聞かせていただく。その御礼をして家に戻る。夜、またもや雨。12/29

早朝は黒く厚い雲が低く垂れ込めているが、日が上がると共に雲は急速に去り、晴れてくる。本日はThmonPeangと北方の遺跡。モトドップは去年Pr. Krochに行っていた時のChhtmさんに頼むつもりが、私と入違いに他の町へ出掛けしていないとの事で結局昨日と同じ人。で9時頃出発。去年「気をつける」と言われた軍の基地を通り過ぎた辺りで人に遺跡の場所を聞き、森の中に入る。暫く探し歩くが見つからず。一旦幹線道まで戻り、近くで草刈していた人達に案内を頼み今度はスムーズに到着。今は田圃として利用され、稲刈り真っ最中だった溜池傍の島状のマウンドにラテライトの周壁。小さな楼門、南際にエディフィス?ライブラリ?跡。周壁内部中央に下半分が砂岩、上部はレンガ作りだったらしい祠堂跡。一通りの撮影中、案内人から付近の遺跡の話。去年聞いたPr. Kroch北の兄弟遺跡の事らしい。次はそちらへ行く事にして幹線道の方へ戻ろうとした時、近くの例の基地の兵士達が来て「ここで何してる!!」と言われ尋問?される。随分陰鬱な雰囲気だったが何となく凌いだ。次の目的地はChhtmさんの家が在る別の指揮系統の部隊の基地?から西北西へ3キロ。歩いて辿り着いたのは背の高い草叢の中の風化、半崩壊状態のレンガの祠堂一基とその付属石材のみ。一通り撮影し帰途に。その途中、近く小池にいた人達と話したが、彼ら曰く、「幹線道の方



Thmon Peang



Sema

から来れば直線で500mくらいなのに」それ、先に聞きたかった…。一気に疲れを感じる。時間も14時半を過ぎていた為、本日の北方の遺跡行きは諦め。12/30  
 本日は朝から快晴。今日からは別のモトドップ。8時半にプムチャーへ出発。そこで案内人を頼んで付近の見えないを巡る予定。村の入り口の十字路角の人が幾つか知っていると言うので彼にガイドを頼む。まず十字路を北上。この道、NeakBuosへ至るかつての王道を赤土敷いて再整備した物。その道を10分程進んだ辺りで左折し、バイク置いて徒歩で30分程でPr. Somab。楼門持つ周壁内に3基の東向き祠堂に西向きの経蔵？1基。全てレンガ製。崩壊は進んでいるが、まだ見れる状態。西端にトラペアン跡。道へ戻り、今度は十字路越えてトベンミアンチェイ方面へ南下。25分くらい行った辺りの分岐で左折。何十分か走った辺りでバイク置いて森の中へ。徒歩で20分程でPr. DunChalm (DunCheam)の外周壁西側。それを見る限りそこそこ規模大きい遺跡。外周壁越えて中に入ると一部にまだ水の残る環濠跡と内周壁。更にその中に入ると人為的に掘り返された跡。その先に東向きの主祠堂3基。中央祠堂はエントランス付きで損壊激しいがリントルも残る。南祠堂横にも人為的に掘り返された跡。内周壁東側に楼門が崩壊した経蔵跡？がある。他にも何かの建物の痕跡が見て取れる。外周壁だけがラテライト製で、後は全てレンガ製。バイクに戻って、先の分岐まで戻り幹線に入って10分程南下。その辺りで徒歩で森に入り20分でPr. Aunoun。レンガ製で正面は東。資料では祠堂3基とあり、健在1基に半壊の1基と消失1基と思ったが、見てるとレンガ作りの宿駅の形にも見える。これでプムチャーへと戻る。ガイドしてくれた人に謝礼して町に帰ると既に14時近く、さすがにこれからトラペアンクル地区へ行くのは時間的に無理。今回は諦めるしか無し。夕方、Khonさんに事前に頼んでおいた、翌日朝一でKO1へ行くという車を紹介して貰う。

12/31  
 前日に紹介してもらった車でKO1(プレアヴィヘア寺院麓の集落)へ。朝7時半前。8時45分頃着。今度からカンボジア側でも入域料1万リエル取るようになっていた。登山用のモトドップも言値では往復5ドル。便乗値上げ？年末だから？。当然値切り、片道で上る。今回はちゃんと第1楼門の方へ着。直ぐ脇に在る売店でコーラと水買ってまずは一服。さすがにまだ客は多くなく、参道両脇に立ち並ぶ土産物店の呼び込みだけが賑やか。その土産物店の並びに食事できる屋台が在ったので遅い朝飯にする。焼き鳥飯だけでは食い足らず、焼き飯も注文して食べてると白人観光客が私を撮影してるのに気付く。やれ

やれ。食事後のんびりと主神殿エリアまで見て回る。その最中に日本人の女性旅行者と2人組の男性旅行者に遭遇。いずれもタイ側からだが、後者の方はカンボジア側からも来れる事を知っており、当初はそのつもりだったが諸々の事情も有りタイ側から来たのだとか。彼等と話した後、今度ものんびりと第1楼門の参道階段下の市場へ向かう。そして8月同様にタイ側に出て例の看板を探して歩くがやはり見当たらず。そういう事なんだろう。カンボジア側へ戻る。結局、今回の出入りも両方の係員達曰く「問題ないよ」。何だかなあ。市場からモトドップで8月と同じルートで登山道へ入り下山。途中、歩いて上って行くのと降りていく白人のそれぞれ2人組。タフだなあ。KO1からモトドップを乗り継ぎながらチョムクサンへ帰る。15時頃に着。

2006年 1/1  
 チョムクサンを8時45分に出発。その際数分程横並びになった別のタクシーの車内に一人で乗ってる日本人ばい人。はて？。69号線に入ると来る時より道路状況は改善。改修はだいぶ進んだ様で帰りはス

ムース。途中、バイクツアーの一团とすれ違う。9時45分頃。日本のそれかな？。トベンミアンチェイには10時20分頃着。客を待つタクシーの中にプノンペン行きを見つけたものの、出発は13時丁度。あたら。道路状況こちらもスムーズ。未舗装路を100キロ近くで快調にトバス。15時少し前コンポントム通過、17時半頃にプノンペン着。いつもの宿にチェックインし、なじみのモトと翌日の打ち合わせがてら一緒に夕食後、直ぐ寝る。

1/2  
 本日はプノン(アンコール)ボレイへ。8時発。2号線からプノンチゾー方面へ向かい、ブレイクバスを経てアンコールボレイとプノム・ダへ至る道、以前より更に荒れている。過積載のトラックによるものか。その対応の為、ブレイクバスでは町の入口に検問を設けて車の大きさや種類に応じて通行料を徴収し、それを改修費に充てているとの事だ。プノム・ダには11時20分頃着。そこでプノン(アンコール)ボレイの事を聞くと、遺跡は在るが別に見るべき物は無いと言われる。とりあえず向かう。ここから先は雨季には水没する昔ながらの道。プノン(アンコール)ボレイの麓で遺跡の事を聞くと、上の方に在る御堂に在るとの事。なので御堂への階段を上り始めるが、直ぐに牛の群れにとり囲まれる。なにやらこの山は放牧地になっている様。御堂に着いて付近を見回すも居るのは牛ばかりで人の気配は無し。ここの雰囲気や地形状況、何かバ・プノム頂上に似ている様な。そうこうしてうちに老人と牛飼いの子供が上ってきたので、彼等に遺跡の事を聞いてみる。案内してやるというので付いて行くと、御堂から少し離れた所に在る大きな岩2つを指差し、「これが遺跡(PrasatBoran)」と言う。再確認するがやはり同じ答え。半信半疑でその岩を写し、老人に礼を言った後に他の尾根や斜面周辺を見て回るが成果無しのまま下山。麓でもう一度話を聞くが昔の物は「地面の下」だそう。諦め、そのままプノンペンに戻る。

1/3  
 帰国便の時間まで土産物の買出しなど。途中でパラパラと雨振る。うむう。夕方帰国の途に。

\*

12/23  
 いつもの様に朝、日本を出発。バンコク経由でカンボジアはプノンペンのいつもの宿へ。

12/24  
 レンタルバイク屋にバイク借りに行くが、丁度良い借り物が無く暫く店頭で待つ。1時間ほど待って借り物来る。ヘルメットと保険込みで1日10ドル。点火プラグとエアクリーナー(私物の不用品)を自前持込で交

換。その後暫く走らせて状態をチェック。気になった箇所はメンテや調整して貰い、オイルも実費で交換してから宿に戻る。宿の駐輪場にバイクを一旦預け、トゥールトンボン市場にバイクに付属してない車載工具の代用品を買出しに行く。機械部品好きにはたまらない、かも。後は宿に戻り、早めに寝る。

12/25  
 朝一に航空券をリコンファームしてから9時に宿を出発。まだまだ道は混雑中。チュロイチャンワー橋先のレストランエリアの少し先までは40km/hも出せれば良い方。混雑を抜け出してスピードを上げるが、コンポントム着は12時半。給油と昼飯して64号線へ。プレアヴィヘア州との州境まではまたもやデコボコだらけのバンピーな道に。本気で走るとガード類をきちんと装着していて良かった、とつくづく思う。州境を越えると路面状況は途端に改善。トベンミアンチェイまでスムーズ。ただし、スムーズ過ぎてスピード出し過ぎスライドダウン寸前が数回。トベンミアンチェイ着は16時少し前。ゲストハウスは



Trapeang Thnal Chukの破壊されたリントル

事前に調べておいた PrumTep ゲストハウスへ。バイクツアーを催行する旅行会社と提携しているようで、数社のステッカーが貼ってあり、私の他にも3台のバイクが置いてあった。

### 12/26

朝、チェックアウトの際に先の3台のライダーに会う。白人の親子連れと、そのサポート兼ガイドの人。何でもこれから日帰りでプレアヴィヘア寺院へ行って来て明日、コーケー経由でシムレアプに向かうのだそう。彼等はそのまま寺院へ、私は朝食と給油してからチョムクサンへ出発。8時頃。69号線、きちんと改修されていて去年の状況が嘘の様。あまりにスムーズに走れたので、チョムクサンへの分岐を一度通り過ぎてしまったほど。1時間半弱で到着。いつも泊めて貰っている所に荷物降ろしてバイクを洗いにいき、各部の状態をチェック。気になる所はメンテしておく。市場に買い物に出た際に HENHEN ゲストハウス廃業を知る。今年半ば頃の話だそう。22時前就寝。

### 12/27

朝、Kongさんと今回の打ち合わせ。その際、去年見た TrapeangThnal のリントルの盗難とやはり去年お話を聞きに行った古老の訃報を聞く。一気に気分がダウン。前者は2月頃の話でタイへと持ち去られた事が確認されたとの事。後者は私の来る少し前の事だそう。まだ聞きたい事が幾つもあったのだが…。冥福を祈る。なんだかんだでまずは去年から行こうとしていたトラペアンクル地区の遺跡へ行く事に。なんでも近くの軍の基地の偉い人に事前に話を通しておいてくれたとか。今回利用のモトドップもKongさんの紹介で英語塾の元生徒さん。大助かりです。チョムクサンを出発し、まずはプムチャーまで。良い道はそこまででそこから先はプレアヴィヘア州の「普通の」道。日本人の感覚では超悪路なのだろうが、慣れって怖い。そんな道だが何台ものバイク、何人もの人達とすれ違ふ。そして軍の基地までプムチャーからは24キロ。3時間ほどで到着。偉い人に挨拶に行くこと意外な事に先客在り。何でも昔の知り合いでアンロンヴェンから訪ねてきたのだとか。彼等のインスタント写真を写して渡した後、遺跡へ。途中で地雷原の傍を通るとかで道案内に兵士を2人付けてくれる。基地から徒歩で1時間ほど北上した辺り。ラテライトの周壁と内部にレンガの祠堂1基、そして何かの建物の跡2箇所。正面は東。そこから少し離れたもう一つの遺跡はどうにもはっきりしない。草の繁茂した湿地帯(池か環濠跡?)の中に微かに見える瓦礫の一部を指差して「遺跡」と言う。どうも崩壊してその大半が水面下に没してしまった、と言う事の様だが。基地へ戻り、また挨拶してから町への帰途に。17時少し前に帰着。帰着後、何故か警察に呼ばれ色々聞かれる。

### 12/28

本日は2年振りの NeakBuos へ。モトの都合で出発は9時半過ぎ。最寄の集落に到着は11時頃。以前の駐在所?は現在空き家で誰も住んでいないらしい。そこからバイクに乗ったまま10分で手前1キロ地点の支寺院跡へ。棘だらけの藪が凄く、今回もチェックしきれなかった。ここからは徒歩で NeakBuos 本体へ。先回の04年は下草が焼かれたり伐採が行われていてとても観やすかったが、今回は初めて来た02年末の鬱蒼とした状態に逆戻り。なのでさらにと流し見しておしまい。13時までには町に戻る。昼食休憩したあと、14時少し前に TrapeangThnalChuk へ向かう。去年も思ったが、この周辺は随分伐採が進んでる。以前は本当に森の中の道だったのだが。以前入った入口から1、2本南下した辺りで右折し森の中に入る。暫く進むと農作業帰りの人達に行き合う。この道で良いとの事。更に先に進むと行き止まり。その先や左横には新たに開拓された田圃が広がる。遺跡はここから100m程森の中へ入る。そして、到着。とりあえずざっと見る限り以前と変わらぬ様に見える。幾つか写真写したので後で比較してみよう。キエンスパイトメイには行かずそのまま帰る。もう16時近い為。夜、昨日チラシやスピーカーで宣伝してた野外の映画上映会を皆で見に行く。何というか気分は「ニューシネマパラダイス」?。

### 12/29

本日は町の北へ。道路の状況は以前に輪をかけてグチャグチャ。雨季の過積載トラックによるものだろうが、道幅の大半が深い轍で占められてまともな部分が更に減っているし、昔ながらの砂道に完全に逆戻りした箇所も増えている。そんな道を途中で行きあった人達に遺跡の事を聞きながら進む。そんな中の一人が仕事場の近くだから、と案内してくれるそうなので一緒に遺跡に向かう。橋が落ちて久しい大きな岩盤の有る川を越えた辺りには新しい集落が出来ており、周辺も随分

と伐採が進んでいる。そこを少し北上した辺りで道を小道へ左折。暫く行った先の行き止まりの田圃の所にバイク置いてここからは徒歩で。20分くらい行った辺りで最初の遺跡 ChavKombon。正面の東面だけ崩れ、他の面は残る。西面は偽扉、南面にはペディメントやリントル様の物がそれなりの状態で残っている。他にも小さなアプサラ?の石像や彫刻の有る石材が見られる。一通り見て次へ。来た道を5分程戻った辺りで少し北上し到着、ChavKommun。こっちの方は建物は全て崩れ残骸やその痕跡が残るのみ。地図と照らし合わせるとトノルスバイの東北東7キロ地点に表示される物と一致。周囲に残るトラペアン(池)跡の規模から考えて、ここはメボンみたいな場所だったのだろうか。一通り見て回る最中に案内の人が一部が壊れたナーガ像を発見。少し離れた所に有った像の台座に皆で持って行って載せて、往時を想像してみる。ここからバイク置いた所への帰途、田圃の畦に立つ木に古ぼけた弦楽器が立てかけてあるのに気付く。行く時は死角になって気が付かなかった様だ。何やら不気味な雰囲気有り、お互いに顔を見合わせるも固まった様に誰も近づこうとせず、結局スルー。バイクの所に戻り、案内人に謝礼して別れた後はアンセイの国境へ向かおうと考えていたのだが、モトは町の方へ戻り始める。北へ向ってくればと言うがモト、行きたがらず。私自身、以前の経験や先の不気味な楽器の事も有って縁起担ぐ気分になり、結局町に戻る事にする。着くと丁度12時。まだ時間はあるが本日の遺跡行きはこれで終了にする。昼飯食べた後、家に戻って外の小屋で水浴びして出た途端、グリーンズネークに遭遇。非常に驚く。だが落ちていくと既に死んでいる模様。入る時には気付かなかったか?うへえ。念の為、人を呼んで頭をつぶして貰い捨てる。今回の旅、蛇との遭遇率高い。これでもう7匹目。明日は蛇の巣とも言われるトノルスバイへ行く予定にしたのだが嫌な予感が増すばかり。結局今回は行くのをやめて、明日は予定を前倒ししてプレアヴィヘア寺院へ行く事にし、明後日31日にプノンベンに戻る事に決める。

### 12/30

乗って来たレンタルバイクでプレアヴィヘア寺院へ8時半に出発。道、分岐から Sraem までは相変わらず状態が良くない。だがそこを過ぎれば後はスムーズ。KO1には10時少し前着。その入口、以前には無かったゲートっぽい物が出来ている。ゲストハウスも5件に増加している。一応チケット売り場も出来てはいるが、実際には相変わらず十字路の所のカフェがチケット売り場兼モトドップ乗り場のまま。そのカフェで一服がてらモトドップの売込みを待つが誰も来ない。以前には「ここで自分のバイク降りて乗り換えなきゃダメ!」と言ってたから待てるのに。カフェの女将に「自分のバイクで上って良いの?」と聞くと「OK」と言うし、モト達も笑って何も言わぬのでそのまま出発。別に問題なく第一楼門横に到着。そこに置いておいても何も言われないので置いておく。売店で一服後、フェンス向こうの Pr. Santop へ行こうとするが今回はカンボジア側ゲートにもきちんとした警備員がいて呼び止められる。以前は口頭の許可だけでスルーだったものが、今はタイ側に出て戻ってくる為だけのチケットがいるようだ。もっともチケットには2千リエルとあるが、千リエルが良いやとかなりアバウト。ゲートをタイ側へ出ると、前はいいか、いてもだらけた態度の兵士だったのに今回は見違う程キリリとした鋭い目付きの銃を持った兵士がいる。けど何言われるでもなく通過し Pr. Santop へ。一通り写して展望台へ。その手すりのカンボジアに面した方だけに何故か以前は無かった土嚢が積んである。何か事故?それとも戒厳令中の為か?後、例の看板やはり見つけれず。正午、カンボジア側に戻る。警備兵の交替もあるか何も言われず。第一楼門まで戻り、その先の去年御飯食べた屋台で昼飯。また焼き鳥飯と焼き飯と二つ食べる。…去年に続き今度も食事姿撮影される。そんなに珍しいのかねえ。バイクの所へ戻ってチョムクサンへ帰る。その際に蛇2匹に遭遇。これで9匹目。16時頃帰着。バイク洗ってメンテ。夕食後、Khonさんに芸能コンサート?と言うか巡業見に行くか誘われたので付いていく。なにやら大昔のヘルスセンターのショーにプラス緑日みたい。21時過ぎに家に戻る。巡業は23時過ぎても続いている。

### 12/31

本日はプノンベンへ戻る日。まずは皆さんに帰りの挨拶。9時少し前に出発。コンポントムへは15時半頃。給油ついでに洗車。16時頃発、プノンベンの宿には19時半前に着。10時間弱、400キロ超のツーリングだった。

### 2007年 1/1

1日、8月にも行ったタケオ州のプノンデンボーダーまで。宿からは3時間弱。その後、バイクを返しに行く。

1/2

休憩のつもりだったがパプノンへ。

1/3

スレイサントー郡のトゥールバサンへ。

1/4

夕方までアンコールボレイ。途中、VatKomunouで堂守の爺様達より気になる話を聞かされる。何でも日本人？ブローカーの絡んだ出土品の闇売買が横行し問題化しているのだとか。宿に帰着後シャワー浴びて大急ぎでチェックアウトして空港へ。帰国の途に。

\*

12/28

いつもの様に午前に日本発、バンコク経由で夕方遅くにプノンペンのいつもの宿に着。

12/29

今回はバスではなく、乗り合いタクシーで直にトベンミアンチェイまで行く事を計画。プサートメイ近くの乗り場でそっち行きタクシーを見つけて乗車。出発するが、このタクシー、コンボントムで64号線へ入らずに6号線をシェムレアプ方面へそのまま直進。聞くところ荒れた道を嫌い迂回ルートで行くと言う。6号線をシェムレアプ州のDomdekとかいう所で右折し北上。66号線に入り今度は東進。道はシェムレアプ州内は一部を除き舗装されている。プレアヴィヘア州内はコーケーの検問所周辺のみが舗装。だが状態は悪くない。クレーン周辺では拡張工事も行われている。16時頃69号線に合流。ここで再度行き合ったチョムクサン行きのトラックに乗換えて向う。69号線の状況、去年が嘘の様で酷く、それがチョムクサンへの分岐まで続く。そこからSraemまでは改修されている様だ。この分岐の所、去年までは無人だったのに今回は雑貨店兼用の民家が数軒出来ており、新品の学校まで建っている。尤も、未だに未使用のままだそうだが。何やら日本の団体が関わっていると言うのも耳にしたが、いくら何でも、…でも？さて、この分岐からチョムクサンまでの道の状況は去年が嘘の様で酷い。デコボコや路肩崩落のみならず、まるでわざと堀切でも作ったかの様な溝までが出来ている。とりあえず少しずつでも改修は行われているらしいが、一体何があった？19時過ぎチョムクサンに着。時間も遅く、いつもの家に行くのも迷惑だろうし今夜はソクサンゲストハウスにて一泊。だが店はほぼ全てが終業しており食事も出来ず寝る。

12/29

朝起きて、朝食食べに市場へ直行。KhonさんやKongさんへの挨拶もそこそこに食堂へ。…ようやく落ち着く。腹が。その後、宿をチェックアウトして荷物をいつもの家へ。ここまでバタバタしてたので今日はミーティングと休憩に充てる。

12/30

本日は町の南西26~30キロエリアへ。道は車ではキツイがバイクはそうでもない。1時間程で案内してくれる人達のいる小集落へ。話を聞くところ遺跡を3つ案内してくれるとの事。まずはその小集落から徒歩で北へ。何十分か歩いてPrクラホムと言う遺跡。まるきり崩壊して草叢の中に転がったり、埋もれたりした石材が見れるのみ。地図ではかなり大きい周壁や王道跡などの存在も表記されているのだが、一旦小集落に戻り、バイクに3ケツプラス自転車と69号線をしばし北上。また右の森に徒歩で入り次の遺跡へ。またしばらく森の中を歩くと遺跡。凹みは環濠跡？マウンド上に半壊状態のレンガの遺跡。正面は東。建物はかろうじて残る4基と痕跡1つ。名前はKrabei Tradusと言うそうだ。だがCISARKなどではここはPrクラホムとされているので案内人に本当にこれで正しいのか再確認するが、同じ答えが返ってきただけだった。また69号線に戻って少し北上し、また同様に森へ徒歩で入り暫く進む。と3つ目の遺跡。名はBanteayと言うそうだが、遺跡リストにある物とは同名だが全く別の遺跡らしい。形状と構成はNeakBuos 1キロ手前の支寺院にそっくり。これで案内人達に謝礼して町に戻る。途中、武装した兵士を満載したトラック2台とすれ違う。その中に顔見知りいたので軽く挨拶。向こうも気付き反応返ってくる。で、本日は終了。

12/31

本日は去年は取りやめたトノルスヴァイ行き。今回のモトドップは02年に初めてプレアヴィヘア寺院とNeakBuos行った時の、更には03年の挫折したトノルスヴァイ行きの時のおっちゃんその人。いまや雑貨店の主。以前と同じルートで遺跡に向う。その際幾人もの仕事場に向う人達に行きあいすれ違う。そうして以前と同じ場所の到着。だが草が前以上に繁っているうえ、例の蛇の問題も有り暫くうろうろと付近を歩き回ったあげく一時撤退を決めるが、その際に石造りの人口の水路跡を見つける（後で画像確認したら写ってなかった。何故?）。そして別のルートで行こうと考え、少し戻ってさっき追い越したルーモーの人達に聞いてみる。当たり。案内もしてくれると言うので好意に甘える。更に少し戻った所の分岐を右に入り暫く進むとバイク的には行き止まりな場所まで来ると、そこにバイク置いて後は徒歩で林の中へ向う。15分程歩いて北の遺跡正面へ。随分と草木が深くになっている。遺跡も正面楼門脇の建物の損壊が進む。一通り見て写してバイクの所へ戻る。案内してくれた人達に謝礼して町に戻る。帰り道にておっちゃんから「NeakBuosの方、周りの地雷除去やって伐採もして綺麗になったから明日行こう」と誘われるが、ここでの今回の遺跡巡りは本日で終了。それは次回に、と言う事で。

2008年 1/1

本日はコンボントム経由コンボンチャムへ。朝一の便でまずトベンミアンチェイへ出発。その為、バタバタしてKhonさんはじめ何人もの方への挨拶が疎かになってしまった。だがその甲斐もなく今回はタクシーの繋がりが悪く、途中で車に故障まで発生。結局コンボントム着は16時半。本来コンボンチャムへ行く車はもう無いが、交渉の末に割高にはなるがなんとか行ってくれる運転手を頼む事が出来、17時少し前出発。20時過ぎコンボンチャム着。

1/2

コンボンチャムからはソリヤバスでストゥントレンまで。日本のODAやらアジアハイウェイの関係やらで広くてとっても良い道。ストゥントレンへは17時少し前に着。以前と同じセコンホテルに泊まる。オーナー変わって改装終わったばかりで綺麗。けど、値上げしてた。当然か。

1/3

朝、船着場行って渡し船でタラボリバット行き。タラボリバットの船着場に着くと随分綺麗になってた。以前は斜面の地面むき出しだったのに、いまはコンクリートが敷かれてたり、原動機式の巻き揚げ機まで設置してある。上に上がって、まずは徒歩でプレアコーへ。傍の学校含め一通り撮影して、近くで営業してるサトウキビジュースの屋台でジュース頼むがオバサン「あ？飲みたきやカフェの方でも行けば」とアッチ行けの仕草まで。…何じゃそりゃ。以前も思ったがこの辺り他所者に冷淡な人多い気がする。良い人はホントに良い人なんだけど。仕方なく船着場上まで戻ってから、そこのカフェにてサトウキビジュースでなくコーヒー頼んで一服。そのカフェのお姉ちゃんにモトドップ頼みたいんだけど、と聞いてみる。「今は皆荷運びで忙しいから暫く待ってて」との答え。仕方無いのでコーヒーおかわりしたりしながらのんびり待つ。9時半も過ぎた頃、紹介して貰って遺跡めぐりへ。以前来た時の写真見せながら当時の場所を探して行くが、既に物が無くなっていたり、場所自体が見つからないやら確かでないやらで成果上がらず。ならば、と一旦リセットしてこの運転手にお任せで巡って見る事に。結果は当り。見た覚えの無い遺跡（の痕跡）やアンコールクマウなる古代の炭化米が大量出土する場所やらを案内してもらおう。そんな中でメコン川の川沿いの道で興味深い物を見る。何でも元々水捌け用の側溝を掘っていたらレンガの壁らしいのが出てきたので、それに沿って更に掘ってみたら数十m以上有って、まだ続いていそうとの事だった。やはりここ面白いわ。この辺りも本格的に発掘調査とか面白い物一杯出てきそう。かつてはチェンラ的首邑の一つシュレスタプラに比定された事も有った場所だし。何だかんだで14時もとうに過ぎたのでこれで今回は終了。必ずまたいつか来ようと思う。運転手にちょっと色付きで代金支払い、川を渡って町に戻る。

1/4~6

4日朝7時にバスでストゥントレン発。プノンペン着は17時少し前。いつもの宿へ。5日はコンボンチャム州のSithorKandal郡のワットシトーとその周辺の遺跡を見に。6日、帰国の途に。

\*

12/27

午前、日本発。バンコク経由で今回はシエムレアプへ。今回アンロンヴェン経由でのチョムクサン行にトライの為。で夕方着。

12/28

まずバス乗り場に行くが、タッチの差で朝便は出発した後だとかで次は昼。仕方なくアンロンヴェン方面行のタクシー乗り場へ移動。タクシーを探すが相変わらずこのタクシーはふっかけてくる。こちらも意地になって値切りまくって乗る。が運転手、アンロンヴェンに向う車内で私の最終目的地がチョムクサンだと聞くと、今度は往復で300ドルでどうだ、とふっかけてくる。他の同乗客もオイオイな表情。当然断る。すると今度はどこかに携帯電話をかけて、話してくれとそれを渡される。で、電話に出ると日本語で「その条件、妥当ですよ、そこ凄く遠いですし。安いくらいだと思いますよお」などと言う人物。思わずキレそうになる。イントネーションからして本物の日本人らしいが、再度、明確に、断る。道自体はバイパスな良い道が既に開通していて時間も2時間半弱で到着。きっちり交渉して決めた代金だけ支払ってバイバイ。チョムクサン行のタクシー乗り場は到着した所から離れた所に在るようで、モトドップでそこへ向う。15分以上東に行った郊外の所。だが、トベンミアンチェイ行きはともかくチョムクサン行きの便が無い。結局そこで何時間も待つてようやくチョムクサン行の便が見つかり、それに乗ってチョムクサンへ。アンロンヴェンからSraemまでの道は各所で道路工事中だが、さほどの問題は無し。Sraemからチョムクサンへの分岐までの69号線はアッと驚く大変化。道幅は去年までの2倍以上。将来的には舗装もするそう。分岐の所も工事需要を当て込んだか、それなりの規模への集落に拡大。だけど、例の「学校」は未だ未使用で放置されたままだそう。その分岐からチョムクサンへの道路状況は去年のあんまりな状態よりはマシになったよね、と言う程度。道の両側は草茫々になって02年の状態への逆戻り感さえ。到着は17時少し前。アンロンヴェンから3時間半ちょっと。いつもの家へ。

12/29

朝食後、まずは診療所のKongさんの所へ行きKhonさん交えて情報収集。今回の予定では最優先でプレアヴィヘア寺院、町の北方エリアやアンセイボーダー、NeakBuos、キエンスヴァイトメイとKangHet、時間があればPr・Khna周辺。この中でNeakBuosだけ今回は止めておいた方がいい、と言われる。少し前に遺跡の付近で何やら国境線絡みの事件が起きたらしく、付近は今もゴタゴタしてる為に近づかない方が無難との事らしい。それに関連してるのか、06年に行ったトラペアンクル地区は現在、他所者は立入禁止状態なのだとか(後で聞いた噂では「見られたくない集団」がいるからだそうだが)。北の方は一時期、変な噂のせいで避難騒ぎが起きたが今は問題無い。他の場所はプレアヴィヘア寺院でも全然問題なく行けるそう。会合後、例のおっちゃんのバイクで町の北へ。道の状況、06年より更に酷くなっている。そんな道をまずアンセイの麓まで。麓から国境ポストまでの道を上って見る。車1台分の幅より少し広だけのつづれ折りの道が上まで続いている。…以前にある旅行情報掲示板でここをバイクで上ったという書き込みを見たが、実際に自分で来て見ると、それとは随分話が違う様な。違う場所なのか?。なんにせよ道の状況酷いので途中で麓の方戻る。麓の道の入口の近くに民家が在るのでその主に情報を教えてもらいに行く。この上がアンセイの国境ポストで間違いないそう。そこまで徒歩だと1時間くらい掛かるとか。それらを聞いた後、道を南へ戻りChavKombonへの入口近くに出来ていた小集落まで戻り、そこでPr. Kombotという遺跡の事を聞く。その中で一番北の家の人が知っていると言うので話を聞かせて貰う。ここから北東数キロの所だそう。更にChavKombonとその西2キロに在るプラサートクラホーム(同名多数だが)という遺跡の話聞く。どの情報にもない初耳の遺跡の為、こちらを優先。その家の人に案内も頼んで向う。まずはChavKombonへ。だがその遺跡、以前見た物とは同名だが違う遺跡。ちなみにChavKommunはこの東南400mの所だそう。さて次はクラホームだと期待するが、なんと案内の人、ここで家へ戻り始める。なんで?と聞くと、ここからは藪も深く道も悪くて大変だからやはり行きたくないと言いつつ。更にはKombotの方も同様に行かないと言いつつ。話が違う!と説得を試みるが、爺さん聞きやしない。諦めて町に戻る。一旦休憩。14時に明日のキエンスヴァイトメイ行きの下見にプムチャーへ行き16時頃戻る。

12/30

朝8時に出発。途中、プムチャーの「学校」に立ち寄る。03年に初めて会って以後も何度か話した先生達が青空教室から始め、自分達の方で教室一つ分くらいの大きさながらもちゃんとした木造の「校舎」にまで成長させた。見る人によっては貧しくて粗末な建物にしか見えないうえに、「校舎」より余程立派に見える。そこで暫く授業を見学させてもらった後、遺跡へ向かう。トラペントノルチュクへの入口より一つ手前で右折。暫く行くと幾つもの小さな田圃と小屋。以前はホント森の中だったのに。そんな小屋の一つに兄妹がいたので遺跡の事を尋ねる。彼等の御祖父さんが場所を知っていて、暫くしたら帰って来るそうなのでその戻りを待つ。待つ間、モトの兄ちゃんが兄の方から色々聞く。小屋から北西500mにPr. Donkau、西にキエンスヴァイトメイ、更に西にKangHetが在るとの事。待ちが長くなりそうなのでとりあえずPr. Donkauへ行ってみる。レンガの周壁内に半崩壊した祠堂2基。その2基の入口の両側には碑文も残る。小屋に戻るが、彼らの爺様は未だ戻っておらず。更に待つ。そんな中、モトが携帯電話見てるので何?と見ると携帯で動画見てる。うおう。11時少し前にやっと爺様来る。ここ着いた9時から3時間待ち。爺様と3ケツで出発。道を西へ暫く行った先でバイク置いて、直ぐ横にある草藪の中へ。GPSによれば遺跡はその先300m。そしてキエンスヴァイトメイに着く。5年振り。途中や周壁内にも加工された木が転がってるのを見ると、違法伐採された木の加工場として使われていたらしい。しかし、03年に来た時はもっと、色んな所が土に埋もれていた様な記憶が。とにかく色々見て回る。先回は草木が茫々でちゃんと見る事できなかったから。周壁、3連の祠堂、経蔵、全てが砂岩製。その石も大きくなってすっかりした物。残骸も含めると全部で5基の建物が在った様だ。バイクの所へ戻り今度はKangHet。少し



Prasat Donkau

進んだ先でバイクじゃ進めなくなりそこから徒歩向かう。25分程西へ歩いた辺りで草藪の中に右折し15分程でKangHetに到着。一辺の長いラテライトの基壇の外周石?、その広い基壇上に背の高い砂岩の祠堂。そのロケーションの為か、随分細長く見える。石組みのズレによる歪みが目立ち、何年後かには倒壊している可能性高い。何だかバンテアイチュマルへ行く途中に在るPr. Toepに感じが似てる。基壇上には塔頂部の水輪をはじめとした装飾の石材があちこちに散見される。一通り見てバイクの所に戻る際、少し足の痺れを感じ、頭のぼんやり感もある為、トラペアンスヴァイ(ThnalSvay, S)、トラペアンピル行きは取りやめ。爺様を小屋まで送って謝礼し町へ戻る。家で水浴びして一休みしたら、随分と楽になった。どうも熱中症になりかけてた模様。夕方、明日のプレアヴィヘア寺院行きの話



Kien Svay Thmey

Khon、Kongさん両氏とする。おっちゃんが寺院にいる部隊の偉いさんの一人に伝手が有るとかで6年振りに一緒に行く事にする。

12/31

朝8時にプレアヴィヘア寺院へ出発。69号線まで出て暫く走ると、周りの景色が相当変わっている事に今更気付く。去年までは道の直ぐ脇から森が始まっていたのに、今は道の東側は見渡す限りの草原と化している。場所によってはダンレックの山並みまでがはっきり視認できる所がある。道が良くなった、とばかりは喜んではいられないとい

う事か。Sraemを過ぎた辺りから道の両側に兵士のいるキャンプや監視哨、新設の基地が目立つ様に。既に在った物も拡張されている。検問所めいた箇所も幾つか。けれど、雰囲気はのんびりしたものだ。K O 1には9時50分頃に着。兵士の姿が目立つだけで06年と時と変わらない様に見える。入城料も1万里エルのまま。ただ登山用モトドップの値段だけが値上げ。登山道は事前情報通り改修済み。その道沿いには土囊で多数の掩蔽壕が構築され、機関銃やロケットランチャーを構えて兵士達が陣取っている。道向こうの森は、もしもの時に敵を攻撃しやすい様に広範囲に伐採されている。そこにも幾つかの壕が見てとれる。道を登りきり遺跡本体の西障壁にも陣地。第1楼門のそばに世界遺産の登録の証か記念のモニュメントが建ててある。ふと参道の方を見ると旅行者らしい白人女性の二人組が。だが、声掛けようか迷ってる内に下山してしまった。とりあえず来ている外国人は私だけではないという事か。他の客は皆カンボジアの人。ちなみに土産物店は02年同様に跡形も無し。10月の戦闘時に流れ弾で損傷したとされるナーガプラットフォームに行き、その箇所を見せてもらうが正直疑問。楼門に上がって東を見ると、バンダイステアウェイの草叢が取り払われていて通れる様になっている。何でも登山道が封鎖された際にこちらを通れる様に、地雷も除去して整備したようだ。…こういうのも不幸中の幸いって言うて良いのだろうか。見に行くが、兵士に進行を制止される。写真撮影も禁止。これより先は民間人立入禁止の為。だが担当の士官？が許可した所だけは撮って良い、と言われたので指示に従って撮影。バンダイステアウェイ、ここの参道階段の様な石段の崩壊跡を想像してたのだが、実際はブンバヤンのそれか、熊野古道の石畳の坂を思わせる物だった。楼門の方に戻ると、途中でどこかに行ってたおちゃんが戻っていて曰く「話付けてきたから行くぞ」と。可能なら10月の戦闘の発端場所と状況が知りたいと希望を出していたのが通った様だ。参道階段を下り、市場へ。ゲートの前はバードワイヤーの束で封鎖されている。確か警備員の詰所だったかの建物の前にいた恰幅の良い人が案内してくれるそうで付いて行く。…その辺りは05年に来た時に何度か通った脇道の途中。登山道も遠くない所に見える。暫し、言葉を失う。最初の戦闘は双方のはねつ返りの暴発ともいえるモノだったので双方共セーブしたらしいが2回目は本格的な交戦になってしまった。そのきっかけはタイ側発の情報の様な英雄めいた格好良い話では無く、こちらの話を聞く限りではミスとパニックの連鎖反応と言えるもので、戦闘自体も遭遇戦に近い混乱したものだった様だ。案内してくれた人に、このまま進んで登山道へ抜けて良いかと聞くと構わないと言う答え。そのまま進んで登山道に入り、徒歩で下山へ。途中、私を見やる兵士達の顔。笑顔、驚きの顔、訝しむ顔、そして睨み付ける顔。K O 1のカフェで一服後、チョムクサンへ。途中、森の中から戦車が道へ飛び出す様に出て来ると轟音立てて南の方へ。戦車って意外に素早い物だと知る。15時半に帰着。

## 2009年 1/1

朝、バラバラと雨。チョムクサンを8時40分発。69号線で今度は北上する戦車2台とすれ違う。トベンミアンチェイ発は12時45分、コンボントムは16時20分発。ブンペンには19時頃に着。

## 1/2

本日はタケオ州のブンペンへ。だが、だらだらとしてたらバス乗り場へ行く時間に遅れたので、もういいや、と朝飯へ。すると知り合いがなじみのモトドップに連絡付けてくれ、結局、そのモトドップと一緒にブンペンに行く事に。9時に宿を出発して11時40分キリボン地区のブンペンに着。車やバイクで上げれる登山道出来ているが、道の状態良くない。モトドップは行きがたらず、一人徒歩で登山道を上がって遺跡を見て来る。疲れた。夕方、ブンペンの市街まで戻ってくると物凄い渋滞。だが様子が変。AKを構えた兵士や警官が怒鳴りながら検問や交通規制をしている。はて？無事に宿へ戻り、代金支払おうとバイク降りるか降りないかの時、随分イラついた表情の人がモトの所に来て私を押し退けながら大声で「何してた！早く！急げ、急げ!!」と言うので、支払い済ますまでちょっと待ってと言った途端、「アァ？ウツェ!!」と物凄い声で恫喝される。一躍周囲の注目の的。相手にせず支払済ます。すかさずモトドップ乗ってこちらを威嚇でもするかの様に睨んで去るは、そのお人。やれやれ。夜のニュースで帰りの渋滞の原因が判明。政府要人への爆弾騒ぎが発生してたようだ。

## 1/3~4

3日、なじみのモトドップとコンポンチャム州の遺跡に行き、見て来

る。Pr. PringChrum、Pr. Trapeang Ampil Thvear、Vat Trapeang Srok の3つ。昨日の「アレ」はみんなの笑い話に。4日、日本への帰国の途に。

### チョムクサン周辺の遺跡紹介

#### ：Prasat Preah Neak Buos

7世紀後半から8世紀初頭頃に創建された、かつてのこの地域の中心寺院遺跡。ヤショヴァルマン1世、ラージェンドラヴァルマン、ジャヤヴァルマン5世、スールヤヴァルマン1世（推測だがジャヤヴァルマン4世も含むか）各王の庇護を受け栄えた。なかでもラージェンドラヴァルマン王はこの寺院の大改修と増築を行い、現存する主要なレンガ祠堂はその頃の物と考えられる。アンコールトムからベンメリア、コーケーを経てワットプーへと至る王道をわざわざ分岐させてこの寺院に接続する王道を敷設して、など中期までのアンコール王朝にとっては重要な存在だった様だ。なお、この周辺には先史時代の墓群の存在も報告されており、その時代からの聖地とも考えられる事から、その祭祀遺構が寺院か周辺地下に眠っている可能性も指摘されている。ChoamKhsan 東北東8.5キロ程。

#### ：Pr. Preah Neak Buos 第一支寺院

正確な名称は不明。規模は第一第二、共にかなり小さい。構成は、正方形に近い周壁の中に、南向きの連子格子窓のある入り口を持つ建物。位置は最寄の集落からほぼ東に数百m。背の高いススキ様の草叢とカラタチ様の藪に囲まれている。Neak Buos 本体へはここから北上し、第二支寺院を経由、ほぼ2キロ。

#### ：Pr. Preah Neak Buos 第二支寺院

第一支寺院同様背の高いススキ様の草叢とカラタチ様の藪に囲まれている。周壁は半埋没し本体の祠堂が残る。

#### ：Pr. Aban (?)

ChoamKhsan 中心部より北東3キロ程。Pr. Preah Neak Buos へ向かう道の途中に在る。祠堂自体は崩壊、かつて在ったリントルは盗難に遭い消失。現在は入り口の石組みと幾つかの内部構成物のみ残る。なお、本遺跡の名称をPr. 0 Khsan と言う説も有る。Pr. Somab (=Pr. Ta Ros)

楼門を持つレンガの周壁跡。東南角に半壊した経蔵らしき物。南西北面にコの字状の水濠の跡？AD 954年の日付を持つラージェンドラヴァルマン王時代の碑文あり。ChoamKhsan 東6キロ程。PhumChhaeh からNeakBuos へ向かうかつての王道（04年度改修整備済）沿い。：Pr. Thnal Svay

地図上の名称はPr. Trapeang Sala。現地ではPr. Svay とも呼ばれている。ChoamKhsan のほぼ北西。構成は、北が正面にして南へ一直線にレンガ作りの楼門跡、第一祠堂、そこから列柱の在った参道らしき物、連子格子窓のある入り口を持つ主祠堂。と並ぶ。そして楼門のすぐ右斜め横に、塔と回廊、周壁を持つ遺跡。これのみが砂岩製。楼門から主祠堂までは緩やかな坂を上がる様に段階的に高くなっていき、主祠堂の在る丘の南端下には二つのトラペアン。AD 979年のジャヤヴァルマン5世とスールヤヴァルマン1世時代の碑文がそれぞれ出土しているが、創建自体はその時代より前とも考えられる。私見ではあるが、この寺院遺跡はプレアヴィヘア寺院と何らかの関係性があるのではないかと。

注：この遺跡域周辺は毒蛇の生息域でもあり、現地住民の被害も報告されている。自身も遭遇。十二分に注意が必要。：Chav Crommon またはChav Kombon 1 (Kocho Kombor グループ)

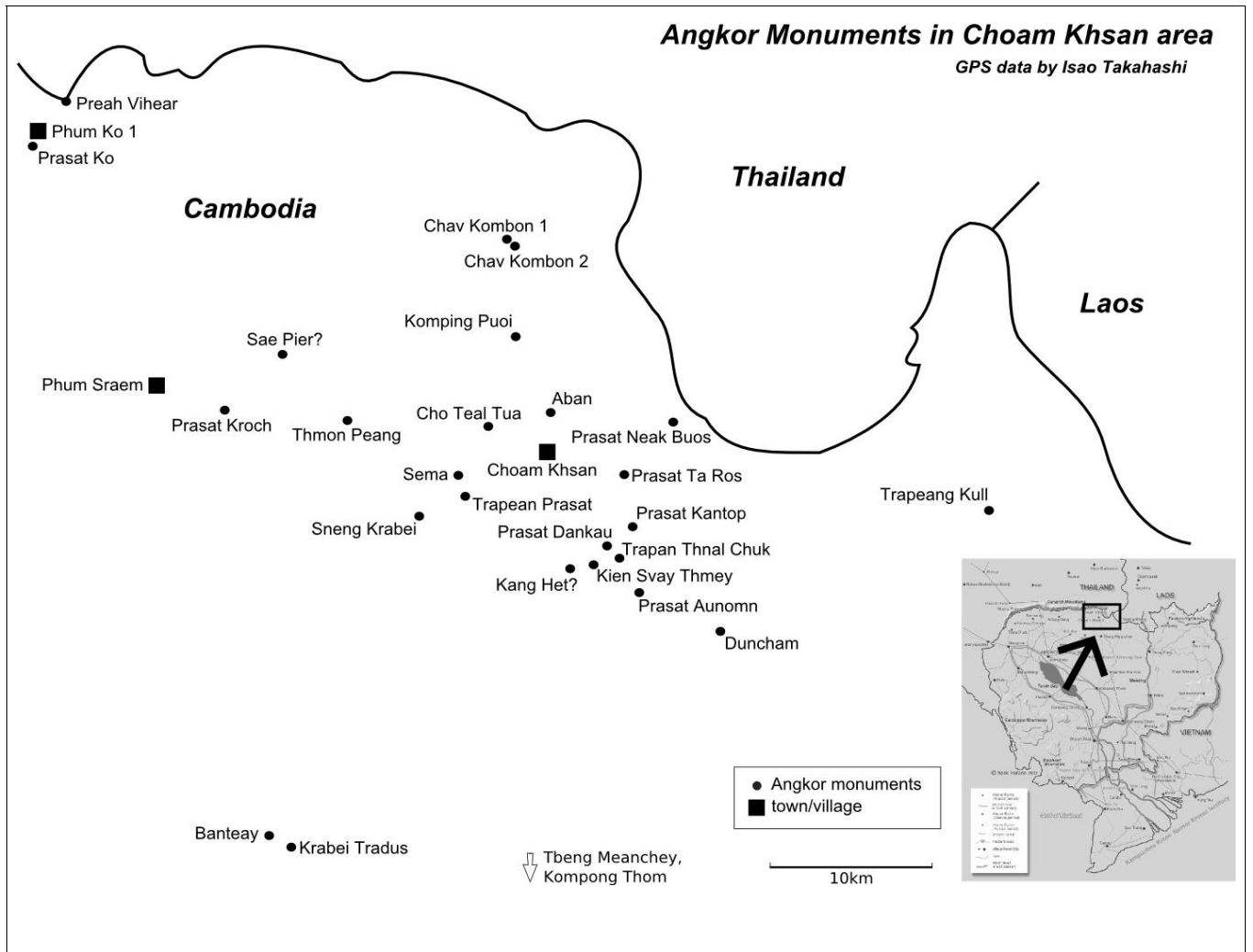
砂岩製。正面は東だが東面は崩壊。他の3面だけ残る。周囲に環濠らしき跡。一つ一つの石材がかなり大きい。マウンド上には他に3つの祠堂の？痕跡。付近にはセーマストーンらしき物も複数。ChoamKhsan 北12キロ程。

#### ：Chav Crommon 2 またはChav Kombon 2 (Kocho Kombor グループ)

Chav Kombon 1 からはほぼ北へ数百mの位置。ChavKommun へはほぼ東南へ400mの位置。ラテライトの遺跡の残骸が散らばるマウンド。

#### ：Chav Crommon 3 またはChavKommun (Kocho Kombor グループ)

Chav Kombon 1 からは東北東へ数百mの位置。遺跡の残骸の散らばるマウンドを古代の大きな複数のTrapeang (溜池) が逆コ字状に囲む。状況から、かつてはメボンの様な物だったのではないかと。



: Cho Teal Tua

ChoamKhsan 中心部より西へ2キロ程。以前は民家の敷地内だった藪の中に在る。祠堂自体は崩壊し、リントルと入り口の石組みのみ残る。

: Komping Puoi

ChoamKhsan 中心部より北に5キロ程。完全に崩壊しており、レンガの小山とその中から覗く幾つかの石材が見れるのみ。

: Pr. Sema

ChoamKhsan 中心部より南西へ5～6キロ程の水田地帯中のマウンド上に在る。祠堂自体は崩壊し、リントルと碑文の残る入り口の石組みのみ残る。周辺および遺跡の在るマウンド上には幾つもの未処理地雷有警告の標識が見られる。

: Pr. Sneng Krabei (Sneng Krabei Cheung)

ChoamKhsan 中心部より南西へ8～9キロ程。砂岩作り。比較的良く残る祠堂が東向きで3基一列に並び、周壁と楼門が半壊半埋没状態で残る。中央祠堂前の階段両脇の地面には、落下して半ば埋もれたシンハ像。

: Pr. Krabei

またはPr. Kbal Krabei, Sneng Krabei Tobong。林の中に東向きレンガの祠堂が3基。南脇にTrapeang Krabei (環濠跡?、沐浴池跡?)。各祠堂のリントルは前面に落下している。中央祠堂前には獅子像の台座と足の一部のみ地面に落下状態で現存。盗掘か? (なお、かつてTharaboriVatでも見た、周辺住民による遺跡崩落部レンガの家屋用途その他への転用がここでも起きている。) 西面側は至近まで密集した藪だった為状況確認できず。ChoamKhsan 南西。Sneng Krabei の南南東? 1.6キロ付近。

: Pr. Kangtop (Pr. Chheah)

ChoamKhsan 中心部より南東へ6～7キロ程のChhaeh村入り口脇の小

丘に在る。崩壊した3基の祠堂と門の跡、そしてかつての周壁及び聖池と思われる跡が残る。

: Trapeang Svay Toch

Pr. Kangtop から Trapang Chuck へ向かう道の直ぐ脇に在る。祠堂内部構成物の残骸が数点のみ残る。

: Trapeang Thnal Chuck

Pr. Kangtop から南南西2キロ程行った辺りレンガ作り。周壁は大半が崩れ、東の楼門もようやくそれ、と判る状態。周壁内部には比較的良く残る祠堂3基と崩壊しかけた経蔵らしき物2基。AD 993年5月の日付の記述の在る碑文が残る。

: Kien Svay Thmey (=Pr. TrapangChuck?)

またはTrapeang Svay Thom。Trapeang Thnal Chuck から西南西へ1キロ?程。砂岩作り。周壁内に東向き祠堂3基、西向き経蔵1基、何らかの残骸一つ。

: Pr. Donkau

Trapeang Chuck (Trapang Thnal Chuck) の北東へ1キロ強の辺り。半壊のレンガ祠堂が2基(南、中)。他には建物の痕跡(含む北祠堂)が4つと周壁、その楼門の残骸。南、中祠堂の入口には左右共に碑文(1046年の日付のある)が残る。CISARK のリストでは別名 Pr. Kantop とされているが、現地ではそれとは別の遺跡と説明されている。

: Pr. KangHet

Kien Svay Thmey の西南西1.6キロ程。その広い基壇から見ると奇妙なほど細長く感じる砂岩の祠堂が1基。地に転がる石材の量からは付属の建物(増設部分?)が存在した?。少し西に古代のTrapeang(溜池)有り。石組みがズレて大きな亀裂が出来ており、崩壊も時間の問題かもしれない。

: Pr. Dun Chlam (Pr. Don Cheam?)

ラテライト製の外周壁とレンガ製の内周壁の間に環濠が有る。  
ChoamKhsan 南東。

: Pr. (Trapeang) Anuon

ChoamKhsan 南南東。

: Pr. Thmon Peang

ラテライトの周壁と楼門と副祠堂。主祠堂は基礎がラテライト、身舎部は砂岩、そして上部構造はレンガ、という作りの様。そして周囲は水(環濠?)。

: Pr. Kroch または Pr. Prei Kroch

ChoamKhsan の西 17 キロ程。幹線道から森の中へ徒歩 1 時間半程の場所に在る。南北に階段?を持つ基壇上に砂岩の祠堂が東向きで 3 基。北祠堂と中央祠堂は半壊状態で、南祠堂のみ比較的綺麗な状態で残る。

(注: 基本的に道は存在せず。そして、内戦時代には陣地としても使用されていた? 事から、行程や周辺には地雷を含めた対人用の罠が未だに、そしてそれらを流した罠の罠が多数存在。それらの警告標識など当然存在しないので訪問の際は付近に詳しい案内人が必須)

: Pr. Sae Pier (?)

現地案内人は「穴」と呼んでいた。周囲には広範囲に祠堂を構成していた石材やレンガ、像の台座等が散乱している。幹線道路を挟み、Pr. Kroch の北数キロ程。ChoamKhsan 西北西。(CISARK のリストやEFE0 の地図に有る Sae-Pir または ThmonThom と思われるが、この撮影当時の現地状況は広めの平地に小さな土の出っ張りと同じく周りに石の残骸が広範囲に散乱。それを少し離れた所から平行に撮影しており、CISARK の画像に見られる状況とはかなり差異が有る為、断言は出来ない)

: Trapang Thnal

基礎がラテライトで祠堂本体はレンガ製だったらしい。ChoamKhsan 中心部より南へ 2 キロ程下り、そこから道を右に 50 m 程入った辺り。(残念な事に、このレンタルは 06 年に盗掘によりタイへと持ち去られた事が確認された後、消息不明となった。既に蒐集家に売却との情報も)

: Pr. Trapeang Kul

ラオス国境近くの集落、Trapeang Kul の南に在る遺跡。なお、この少し北へ行った辺りにもう一つ遺跡が在るが、既に崩壊しており現在は水面下に沈んでいる。尚、この辺りはかつての激戦地でもある為、今も遺跡の周囲には多数の地雷が残存したままになっている。Trapeang Kul 地区、かつての王道沿い。

: Banteay1 (または 2?)

形状、構成は Neak Buos 第 1 支寺院とほぼ同一。Pr. Krabei Tradus (?) の北 2 キロ程?。(なお、CISARK のリストには同名の遺跡が有るが、それとは別物で 69 号線沿いからわずか 400 m ほど森に入った場所に在る。)

Pr. Krabei Tradus (?)

その主祠堂。他に南と北祠堂および 2 つの副祠堂の残骸。そして環濠跡などが残る。なお、他サイトではこの遺跡を Pr. Krahaom (Kraham) と紹介しているが、当時現地でも案内人に再確認した所、「ここは Pr. Krabei Tradus。Pr. Krahaom はこの南に在った方」との事だったので、ここでは今の所その言にしたがっている。

ChoamKhsan 南西 26~30 キロエリア

Pr. Krahaom (?)

(と案内人は言っていた。本名は不明。Tontim? SrahToek?)  
地図表記ではかなりの規模の周壁らしき物、そして近くにはかつての王道と思われる物が記して有るが、発見できず。祠堂跡も複数在る筈だが、在ったのはこの 1 基のみ。ChoamKhsan 南西 26~30 キロエリア。

最後に。

チョムクサンに通うようになって、もう 7 年以上が過ぎた。町も、状況も随分と変わった。初めての時は道はそれなりの悪路しか通ってなかったし、他の都市や町との通話連絡には町に数台かいるだけの無線機が唯一の手段だった。電気も自家発電機を所有してるか、バッテリーを“電気”屋で充電してもらわないと使う事が出来なかった。そ

れがいまや、道は整備されたちゃんとした道になり、通話連絡は携帯電話網が整備されて森の中からいつでも町にいる人と話す事が出来る。電気も、小さいながらも発電所が開設され、電線を敷設すれば普通に使用する事が可能だ(但し使用料バカ高いが)。少ないとはいえ観光客も、欧米人のみならず日本人も何人かが NeakBuos を始めた周辺遺跡を見る為に訪れている。NeakBuos だけで言えば、世界遺産への登録を目指すという話が出ていたり、08 年の 4 月には日本の調査隊が入ったりして、かつての、誰も知らないと言って良い状況が嘘に思えるほどだ。…物事は常に何処かに向かって変わっていく。それが何処なのかはわからない。だから、その行き先を知りたくて私はこの先もこの旅を続けていくのだろう。気負う必要は無い。淡々と、ただ淡々と行くだけだ。

【高橋勲 (たかはし・いさお)】

ハンドルネーム: あつし

フォトアルバム URL (kechaps 名義)

<cambodia-place&peoples>

[http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?](http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?un=58549&key=1864628&m=0)

un=58549&key=1864628&m=0

<cambodia-prasat>

[http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?](http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?un=58549&key=1864626&m=0)

un=58549&key=1864626&m=0

ウェブサイト『アンコール遺跡群フォトギャラリー』

アンコール遺跡を中心とするカンボジアのさまざまな風物を主に写真で紹介するサイトです。

<http://www.angkor-ruins.com/>

カンボジア勉強会

<http://www.angkor-ruins.com/benkyokai/>

ほぼ 2 ヶ月に一度、東京・上野で土曜日の午後で開催されている集まりで、カンボジアにかかわりのある方を招いて話を聞いたり、参加者が情報交換をするといった内容です。次回(第 32 回)は 2010 年 4 月の予定です。

『カンボジアジャーナル』第 3 号

2010 年 2 月 6 日発行

編集・発行 波田野直樹

[hatanonaoki@gmail.com](mailto:hatanonaoki@gmail.com)

カンボジアジャーナル第3号

2010年2月6日発行(不定期刊)

編集／発行 波田野直樹 [hatanonaoki@gmail.com](mailto:hatanonaoki@gmail.com)

非売品